

『ルイン』

shoon K

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いつの間にか無人島へ転生した『私』はセンゴクに拾われ、そこがあのONE PIECE CEの世界だと知る。

そして無理矢理海軍に入らされた私は、普通の人生じゃあり得ないような経験をしながら原作まで突き進んでいく海洋冒険ストーリー。

※ネタバレになるので押し絵を見たい方は二話以降読んだときに見てください。

作者手書きです。手書きが嫌いな人は見ないでください。また、本編中に押し絵が表示される事もありますが、全て手書きです。

目次

転生、出会い	
プロローグ	1
紅色の乱 1	10
紅色の乱 2	18
昇格	29
【孤独の狩人】	41
『組み手』	50
大海賊時代	
大海賊時代、幕開け	60
飛將軍戦 1	66
飛將軍戦 2【イフリート】	73
飛將軍戦【終】	80
昇格、衝突	86
飲み会	101
【悪魔の実市場】「前編」	110
【悪魔の実市場】「後編」	124
番外編『地獄の時間（ヘルズタイム）』	141
アラバスタ編	
『竜』	150
色白少年	173
勧誘	185
隼の気持ち	190
平行線ストーリー#1『壊れた男』	206

マリージョアまでの航海 前編

217

マリージョアまでの航海 後編

229

道中

244

世界会議（レヴェリー）#1 『ルイン』

254

世界会議（レヴェリー）#2 『死の鎌』

266

ドレスローザ編

『ドレスローザ』

281

『八尾比丘尼』

292

『コロシウム』

298

『圧倒』

307

私用

314

『Bブロック』

320

転生、出会い

プロローグ

とりあえず現状を把握しよう。

今私の目に見えているのは、見渡す限りの青い海。

景色にさほど関心を持たない私にも美しいと感じさせるほど綺麗な海だ。

さらに振り返ると、南国で生えるバナナの木のような木が何本も生えている。人の手が届いていないことがよくわかるほど密集している。

：： オカシイナ？ 私は昨日、家に籠ってあの有名漫画である「ONE PIECE」を第一巻から読み直していただけなんだが：：。

とりあえず調査してみよう。

ド素人の調査の結果、ここは無人数島であることが判明した。

無人どころか、動物の一匹もないというのには流石にド肝を抜かれたが。

だが、果物が腐るほど生えている。最初に見たバナナ以外は見たことも無い果物ばかり

りだ。

毒がないか不安ではある。

だけど私が生きるにはこれらを食べるしかない。

……全く、ただ休日を満喫してただけなのに……

妙な物を見つけた、いや、私から言えば存在自体ありえないものだ。

ドラゴンフルーツのような見た目で、赤色で、唐草模様があつて、まるで引力のような不思議な力も感じる。

まさか、いやしかしこれはどう見ても「悪魔の実」あくまのみだろう。

ということはここは「ONE PIECE」の世界なのか？

だがしかし原作では見たことのない実だ、どのような力が身につくのだろうか。

……食べるか？

……いや、冷静に考えろ。

無人島で泳ぐ力は必要だ。

まだとっておこう。ここから出たときに食べばいい。

…
ところで悪魔の実って、腐らないよな？

吉報!!すぐ近くに軍艦らしき船が!

あんな船日本にあるわけが無い。

ここが「ONE PIECE」の世界だということに確信が持てた。
とりあえず大声で叫んでみよう!

「おおおおおおおおい!!!」

「なぜ君は、あんな無人島にいたのかな」

「気が付いたときにはあの島にいたんだ、私は。」

今現在、軍艦内で事情聴取みたいなことをしている。

この人達に悪魔あくまの実を持つてることがばれたらどうなるんだらうか。

だが一つ、気になることがあった。何故か私は子供扱いこども扱いされていた。私は今年で23歳。まあ身長は平均より低かったし童顔とはよく言われてきた。それでも子ども扱いはされなくなってきたんだがなあ

「なあ、お兄さん」

「なんだい、嬢ちゃん？」

ああ、なるほど。見た目年齢が精神年齢より若いのか。

無人島生活してた癖になぜ気付かなかつたと言われると生きるのに必死だったとしか言えない。

だって無人島だけ？ サバイバル知識が皆無の私があんなところに放り込まれたんだ。容姿なんてどうでもよくなるさ。

……まあ、今は引き上げられたこともあつてかそういう余裕が生まれてるんだらう。

正直、聞きたいことは意図せぬ形で聞いた。だからもう答えてもらわなくてもいいんだけど……

こつちから聞いてしまったから何か聞かなきやいけないよな

あ、ネタが一つあるじゃん

「私が悪魔の実を持つて言ったらどうする?」

瞬間、場の空気が凍りついた。

それから私は軍艦の中で一番権力があるとされている人物の元へ連れて行かれることになった。

原作知識のある私は、誰が出てくるのか少し楽しみでもあった。

可能性があるとするとするなら、おつる、モモンガ、ストロベリー、オニグモと言った現役中将だ。いやコビーも有り得るかもしれない。

そんなことを考えていると一つの大きな扉の前に着いた。

そして、私をここまで案内してくれた海兵が

「入りますよーセンゴク中将。」

めっちゃ大物じゃんセンゴク中将……んん!? 中将!??

「ああ、入りましたまえ。」

「失礼します。」

「……失礼します。」

特徴的なアフロ、妙に鋭い目、眼鏡

疑うまでもなくセンゴクさんその人だ。

「おお、君が悪魔の実を所持していると言った少女だな！ さあ、遠慮せずに入ってくれ！」

私は内心驚きながらセンゴク中将の元へ向かった。

「立ち話もなんだから、その椅子に掛けてくれ。」

あらかじめ用意しておいたのだろう。その心遣いに感謝しつつその椅子に腰掛けた。

「まず聞きたいことがあるのだが、君の名前を聞かせて欲しい。」

名前か、以前の名前を使うのは何か気が引ける。ここは偽名を使おう。

「……ルイン、ルイン・アラクハートだ、私は。」

「……………」

数秒の沈黙が流れる。

なんだ、偽名を使ったのがばれたのか？

「ああ、ばれているよ。」

「！」

何故だ、何故…

そう思つてすぐ思い当たるものがあつた。見聞色の覇気だ。

「君は小さい子供なのに良く知つているな。」

「…私の心の中を読んでいたんだな。」

この時代じゃなきやセクハラで訴えてたところだ。

「はっはっは！すまないな、何者かも分からない君を警戒するのは当然だろう。」

確かにそのとおりだつた。向こうから見れば私は得体の知れない少女。そんなのが出てきたら私だつてそうする。

「まあ、とりあえず君のことはルインちゃんと呼ぼう。」

「そうしてくれると助かる。」

「よし…じゃあルインちゃん早速だがその悪魔の実を見せてもらおうか。」

「分かつた。」

私は懐からその悪魔の実を取り出す。

「…なるほど。」

センゴク中将は納得したような顔をし

「確かにそれは悪魔の実だ、私もそんな形のものを見たことはないが。」

やはりそうだったのか。

「君はそれを食べる気なのか。」

少し中将の言葉に重みが掛かった。

「ああ、見つけたのは私なんぞでな。」

当然食べる。もう泳ぐ必要もないだろうから。

「何なら今食べようか？」

「…ああ、そうしてくれ。」

そうして悪魔の実を口の中に入れようとする

「ただし!!」

「!!」

その気迫に若干震えると

「海軍に入隊してくれ!!」

え？

「能力者が海軍へ入隊すれば、こちらとしても大きな戦力になるし、何より君が後々楽に生活できるぞー!」

「いや、私は海軍に入るつもりは「ならばその悪魔の実、回収させてもらおう。」…わかった。入るよ。入るから食っていいよな。」

ならあの時に食べれば良かった。

私はそう後悔しながら悪魔の実を食べた。

紅色の乱 1

それからの私はまあ！頑張った!!

センゴク中將によるスバルタ戦闘教育（超凝縮3ヶ月バージョン！）に毎日出席して、まあボコボコにされたよね！

そのおかげか私は今「1等兵」だ！

先に言っておくが、3ヶ月で1等兵まで上り詰めた奴はなかなかいないらしいぞ。

そして、私が得た能力も判明した。

ゾンオンけいげんじゆうしゆ
動物系幻獣種 モデル ファイアドレイク

神話では「火の精霊」とも呼ばれる存在である。

「火の精霊」なもんだから、自然ロギアのように攻撃を受け流せるし、「ドレイク」だから竜の姿になつて暴れ回り、火を噴くことも出来る。

正直な話。チート能力だった。私が持つにはお釣りが山程出る能力だ。

センゴク中將が「あの時の私の判断は間違っていないかった。」と言っていた。

そして今、私はセンゴク中將からお呼びの声がかかっていた。

センゴク中將は、あれからもよく面倒を見てくれていて、海軍食堂でご飯も一緒に食べたことがある。

その時、私の同僚の一人がセンゴク中將のことをロリコンと呼び、殴り飛ばされていたのは非常に滑稽だった。

まあそんな話は置いといて、早速行ってみよう！

「……あの、すまんがセンゴク中將、もう一度言ってほしい」

「ああ、ルイン一等兵、君には明日私とガープと供にロジャー討伐作戦に参加してもらいたいと思っている。」

開いた口が塞がらないとは正にこのことなのだろう。

何とこの人は私に死ねと言っているのだ。

「もちろん強制ではない。」

よし、なら却下「だが!」…ん?

「君は私に何度もお世話になっているね?」

この人、まさか…

「君の階級が上がりやすくなるよう稽古をつけてやったし、覇気の基礎も叩き込んでやった。霸王色の素質があったのは驚いたがな。オマケに海軍食堂に連れ込んだ時に部下にロリコンのレットルを貼られてまでも君を見捨てずある程度戦えるよう育ててやった私に、恩を返したいとは思わないか?」

「…。」

ドン引きである。私の知る仏のセンゴクはどこへやら

「…分かった。」

今日、私の中でこの人に対する評価が下がったのは言うまでもない。

翌日、私はセンゴク中将の有する軍艦前までやって来ていた。

「全員、敬礼!!」

先輩少将の合図と共に私も敬礼する。

「ぶわっはっは!!お前から敬礼などいらん!!」

「ガープ!遅いぞ、早く乗れ!」

ガープ中将、エッドウオーの時と全く同じ姿だ。

私としてはお爺ちゃんガープの方が好きだなあ。

そんなことを考えていると、ガープ中将がこちらを一瞥した。

「: : おい!センゴク!なかなか面白い奴を連れてきたなあ!!」

そう言ってもう一方の軍艦の方へ歩いていった。

私は当然、センゴク中将の船へ乗り込んだ。あつちはヤバそうだからな。

「ルイン一等兵、戦闘の準備は出来ているな！」

「あ、ああ、もちろんだ！」

先輩の確認に応えた私だったが、相手はロジャーだ。しかも初陣で。

「なに、ルイン、私が一通り稽古してやったんだ。そう心配することは無い。」

「センゴク中将…。」

さすがは中将、新人の扱いに慣れている。ちよつと元氣出た。

「やっぱ中将、ロリコン…。」

後日、その海兵を見た者はいないという。

シヤンクス side

「ぶわっはっは!!ロジャー!いい加減捕まらんかア!!」

「俺にはまだやらなきやいけねエことがある!!こんなところで捕まる気はねエ!!!」

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!
始まった、海戦だ。

全く、船長達はこんな戦いを毎度のようにしてるんだから恐れ入る。

「おいバギー!!俺達もいくぞ!!」

「うるせエシヤンクス!!こんな無謀な戦い一人でやってる!!」

相変わらずバギーはこんな感じだが。

すると突然、海軍側に紅い竜が現れた。

「なんじやありやああああ!!!」

見たことがない。それぐらい鮮やかな色の竜だ。

「おいガープ、センゴク!!何だあの竜はア!!」

ロジャー船長もさすがに驚きを隠せないでいる。

「さア、俺は知らん!センゴク!!誰じやアそいつは!!!」

「私の部下だ!まだ一等兵だが覇気を叩き込んだ!!」

今回の戦闘でまた厄介な敵が現れることにバギーは頭を抱えていた。

ルイン side

(竜になったはいいものの、どうやって攻めようか。)

実は竜になるのはこれで二度目である。

一回は能力を確かめるために何か出来ないかと念じたらこの姿になった。しかも室内でだ。大惨事になったぞあの時は。

だから何が出来るかあまり分かっていないのである。

(とりあえず火を噴こう。)

そう決意した瞬間、私の体から炎の塊が六つ飛び出した。

その塊は私の背後で光臨の様に佇み、船へ向けて無差別に熱線を放った。

(…やらかした)

正直、海賊船より海軍の方が被害が大きい。

一隻ウン億ベリーの船がいともたやすく燃えカスになる。

ウワアアアア!!!

軍艦が3隻ほど駄目になった。

「おいルイン!!もう少し能力の扱いに慣れておけと言ったはずだが!!」

『すいませんセンゴク中將!!』

声出せるんだ、この体。

「だがお手柄だ！よくやった！」

『え？』

「こちらにも被害が出ているが、ロジャー海賊団の方が被害は出ている。現にクルーの何名かは負傷しているぞ!!」

私はロジャー海賊団の方へ目を見やる。

『… 本当だ、何人か火傷してる』

おそらくクルーの半数以上が火傷している。ロジャーやレイリーといった大物はしていないが。

よく見てみると見習い時代のバギーとシャンクスの姿もあった。

原作通り、海賊してるんだな。

「俺は仲間を傷つける奴は許さねエ！」

「やめろロジャー、分が悪い、ここは逃げるぞ。」

おっとお怒りだ。変身解除するか。

ここで変身解除する私を卑怯だと思わないでくれ。

殺されちゃ堪らないんだよ。

紅色の乱 2

シャンクス side

「ううああつちいいいいいいいい!!!」

「大丈夫か！バギー!!」

「うるせエ!!大丈夫だったら叫んどらんわアホ!!： ああ、後でクロツカスさんに観て貰わなきゃ!」

よく見ると右腕を火傷しているようだ。

「しかしその程度で済んで良かったな、バギー。」

「いや、クソ痛エからなお前!!」

「おう、だったら前線復帰しようぜ!」

「見習いの俺たちが海軍の化け物とあの紅い竜に勝てると思ってんのか!？」

そう、海軍の化け物はさておき、あんな竜は以前いなかった筈なんだが。

「おいルイン！もう少し能力の扱いに慣れておけと言ったはずだが!!」

『すまない！センゴク中将!!』

「竜が喋った!!?」

俺たちは驚きが隠せない。だって竜が喋るんだぞ!?

「おいシャンクス、バギー。あれはおそらく能力者だ。」

突然レイリーさんがそう言ってきた。

「能力者ア!?あの竜が!?!」

バギーのそれとは格が違う。

「おそらくだが動物ゾン。しかも幻獣種の可能性が高い。この世界にあんな生物は存在しな

いからな。」

確かに。あんなのいたら俺たちとつくに死んでたな。

「そして、速くお前たちも来い。先程の熱線でかなりやられた。」

「ちよつとレイリーさん！俺も掠ったんですけど!!」

「お前は軽傷じゃないか。なら戦えるし、もう話し込んでる暇も無い。行くぞ!」

「ちよつと無茶言わないでよ副船長!」

さあ、仕切り直しだ!

「おらア!!」

これで何人斬ったか。そこらじゆうに海兵が転がっている。

やはり強いのは将校クラスだけなのか。

そしてあの紅い竜も見当たらない。

「シャツ・・ シャンクス!! 助けてくれ!」

バキ一の声だ。近接戦ならなかなか強いアイツが助けを呼んできた。

「おいバギー! 斬られないお前がどこの誰に苦戦してんだよ!」

「この女海兵、将校じゃねエみてエだが覇気を使うし、何かの能力者だ!」

覇気使いで能力者か、なら納得だな。

「わかった! すぐ行く!!」

そうやって俺はバギーの元へと駆け出した。

ロジャーが怒りだしてすぐに変身解除した私は、バギーを見つけたのでとりあえず戦うことにした。

バギーの戦闘スタイルは原作と全く同じで小振りのナイフ6本を猫の爪のようにもって戦うスタイルだ。

「食らえッ【バラバラ砲】!!!」

バラバラ砲、バラバラの能力の応用技で手首から先を大砲のように撃つ技だ。当然、私は見聞色でかわす。

「ぐツ… 覇気使いか、これならどうだ!!【バラバラフェスティバル】ツ!!!」

瞬間、バギーの体のパーツがポップコーンのように弾け、彼を中心にして動き出した。「うわっ…」

「ギャーツハツハツハ!!これなら覇気でもかわせねエ!!!俺様の必殺技よ!!!」

あの中に入れば覇気が未熟な私は攻撃を受けてしまうだろう。だが問題ない。私の能力は物理技が聞かないからな。

私は意を決し、ゆっくりと近づいていく。

「ああん？そのまま近づけば痛い目見るぜ？」

「問題ない。私は能力者だからな。」

「は？」

ファイアドレイクは火の精霊、故にどんな攻撃も火と化して受け流す。パーツが当たる度に炎と化す私に、彼は青ざめた。

「お、おい待てよ。話せばわかる！」

「戦いの中で交わす言葉は無い。」

そう、海賊に情けなどいらぬ。

「いや、そういわずに」かえんしようてい「**火炎掌低**」**!!!**「ぐふおあああああちやちやちやあああああ**!!!!**」

炎を纏わせた手で彼の顔に打ち込んでやった。

「ぐうううううう：：クソ！こうなったら」

彼にはまだ秘策があると言うのか

「シャツ： シャンクス!! 助けてくれ!!!」

．．．．．
まあ、いいか。期待した私が馬鹿だった。

「お前が、ウチのバギーが苦戦してる女海兵か。」

「ああそうなんだよシャンクス！おめえの戦闘の腕だけは買ってるからな！こんな女ボ

「コしちまえ!!!」

「……なんだろう、傍から見ればマフィアのボスと子分に見える。

「……にしてもバギーお前ソイツ俺たちより年下じゃねエか。」

「うるせエな！お前も戦ってみろ！俺は顔面大火傷だぞ!!」

確かに割と高火力で打ったんだが普通気絶してもおかしくないと思う。

「元々戦う気で来んだよ」

「だったらさっさと始めろこの赤っ鼻がア!!」

「赤っ鼻はおめえだろ！」

「何だとしてめえ!!!」

「呑気に会話してる暇ある?」

彼らの喧嘩に付き合う気の無い私は左腕に炎を纏わせた。

「!!」

一応少しでもコントロール出来る霸王色を二人にぶつける。

「話は済んだ？私は君たちの喧嘩に付き合う気は無いのでね」

「……おい、シャンクス」

「……なんだ、バギー。」

「俺様らしくねエが共闘するぞ」

「おう」

2人の海賊は覚悟を決めたようだ。

「では早速・・【地獄の炎】^{ヘルフレイム} ツ!!!」

「!おい、そつちは」

纏った炎の量に応じて火力の変わる炎。今腕に纏った炎の全てを船に向けて放った。

当然、船は無事では済ませないつもりだ。

「ロジャー!船に紅い炎が!」

「くそオ、さっきのルインとか言う海兵の仕業か」

「ああ、おそらく。」

ロジャー海賊団はその炎をきっかけに今までの陣形が狂い始めた。

船内の水をかけたり、自分の服で仰いだりするのが見える。

まあ普通の水では消えないだろうが。

「お前エ!!」

シャンクスの怒りの声が聞こえる。と同時に彼の持つサーベルが黒刀へと変化した。

「安心しろ。私の炎は私を倒せば消える」

「なら斬るまでだ！」

シャンクスが私の体目掛けて斬りかかる。私は見聞色を発動させ、スレスレの所でかわした。

なかなか良い剣筋、その年で黒刀を作り出せるほどの覇気。おそらく能力が無ければ瞬殺されていただろう。

「そこだ、バギー!!」

「バラバラ砲」!!!」

シャンクスの剣撃をスレスレで回避した所をバギーが能力で援護する形のようなだ。

しかし、バギーは原作で覇気が使えない筈だが。なら受けても支障はないはずだ。

そしてバギーのナイフと私の体が接触した。

「…え」

瞬間、私の脇腹に強い痛みを感じた。

「でかしたバギー!!」

「おうよ！さっきはド派手にやられちゃったが、能力者用に海水に漬けておいたナイフが役に立ったぜ!!」

いやナイフを漬けたら錆びるんじゃないか？そう突っ込みたくなった。

「……だが油断した。私に触れられるのは海楼石か武装色程度だと思っていた。完全に私の落ち度だ。使いたくなかったが、この技を使うか。」

「……やるな、だがこれくらいの傷は楽に癒せる」

「は？」

【再生】

周りの炎を吸収することで自身の体の傷を癒す技だ。

この技を使うたびに「不死鳥マルコ」を思い出す。

「何iiiiiiii!!」

そりゃ驚くのも無理は無い。私だって最初使った時は驚いた。

「おいおい、そんなのありかよ……。」

「……！見てみるバギー！船で燃えてた炎が消えてる！」

そう、周りの炎を吸収するのだ。

ヘルフレイム
地獄の炎だって例外ではない。

「はあ… あとちよつとの所だったのだが、まあいい。こうなれば私が不利だ。」

そう、いくら最強の能力と言えど伝説の海賊団のクルーに目をつけられては太刀打ち出来ない。

特にロジャーなんかは私を倒しに来そうだ。

「… 今回はおとなしく引き下がろう。今回はだ。次会った時には容赦しないぞ、二人とも。」

そう言つて私は竜の姿へ変身した。

「… おいおいおいおいシャンクス、あれ！」

「… 道理で強かつたわけか。」

こいつら二人は今更私の正体に気づいたようだ。

あんなに能力を使ったのに、鈍感な奴らだ。

『私個人はもう手出ししないが、センゴク中将とガープ中将がどうするかは私も知らんからな！』

お決まりの捨て台詞のようなものを残し、私は軍艦へと向かった。

昇格

センゴク side

私は今、大変虫の居所が悪い。

先制攻撃を与えた私たち海兵は優勢になったと思いきや、ある時を境に押され始めてきたからだ。

その原因は当然ノコノコ帰ってきた一等兵だ。

「ルイン貴様!!何故敵陣からノコノコと帰ってきた!!!見た所傷を負っている訳でもあるまい、どう説明する気だ!」

『ロジャー海賊団の見習い共と約束した。私個人は今回だけはもう手を出さないと。』
「海賊と約束だ?!?そんな事をした海兵など今だかつて聴いた事が無いわ!!!」

ああ、また一つ腹痛の原因が出来てしまった。

戦力としては心強いが個性が強すぎる。

「ぶわっはっはっは!!面白い奴だなセンゴク!今度俺の隊に貸せ!」
「貴様は黙ってるガープ!」

本当に貸し出してやろうか。こいつら二人は気が合いそうだ。

生意氣^{ルイ}一等兵^ンには後でじっくりと海軍のなんたるかを教えなければならぬが今はロジャー海賊団の捕縛が重要だ。改めてロジャーに宣言する。

「ロジャー!!我々は貴様を今ここで捕らえ、海賊のいない平和な世界を作つて見せる!!」
「そりやアもう叶わねエ!!俺を捕らえたところでお前らが得るものは何も無い!」

私は目を見張つた。

その言葉を言つたロジャーの目が、間違いないと訴えてくるような目だつたからだ。

「我々が得るものは何も無いだと。なら我々は何のために戦つている!!今までの長き戦いは全て無意味だつたとでも言うのか!」

「いや、全てを知つた俺達だからこそ、分かるんだ。」

ここでガーブが割り込む。

「最果てへ行き何を知つたかは知らんが、俺達は海賊と海兵。ロジャーよ、もう語ることは何もない筈だ。これ以上語りたいなら拳で語り合おう」

全く、これだから筋肉^ガバカ^バは。

「ああ、もう俺達も長エ付き合いだ。そろそろ幕引きと行こうか。」

この戦いは後に「紅色の乱」と呼ばれることとなる。

ルイン side

マリンフオード市民街の路地裏にて現状を報告しよう。

あの後ロジャー海賊団は見事に逃走。急に嵐が起こつたらしい。日本の考察グループの言う通りあの海賊団には風を操る能力者がいるかもしれない。

その後私はセンゴク中將に説教を食らった。「過ぎたことだからいいのでは。」と言うとさらに説教の勢いが増した。何故？

長い説教が終わった後センゴク中將に「ルイン、お前は昇格することになっている。」とも言われた。階級は未だに知らない。

「ルイン、お前昇格したからって良い気になるんじゃないぞ。」

「お前エいきなり一等兵からすつ飛ばしまくって本部の准将だろ!? なめてんのか! ああ!?」

「センゴクさんに可愛がられてよオ!!」

私は今、同僚共に集られている。なんでも昇格の話が気に食わないらしい。

「なら実力を付けて上に認められればいいだけ。」

「それができねエからこうしてるんだろがよ!!」

「それが出来ないなら私の前に立つな。私はこの後正式な昇格式を控えている。こうして話を聞いてやっただけありがたいと思え。」

「!!」

ああ、日本でもこういうことあったなあ……。その度に「私に文句があるのならそれを言える立場になってからにしてもらおうか。」と言った私は部下に信頼されていたかどうか。

「……くっそ、覚えてやがれ!! ずらがるぞ! お前ら!」

「……………」

その背中は暗かった。

「…それにしても准将か。私はてつきり曹長ぐらいだと思っていたが。」

何故彼らは知っていたのだろう。そんな疑問を持ちながら私は会場へ向かった。

会場へ着いた途端、一等兵以下の海兵が私に向かって敬礼して来た。

まだ私も一等兵なんだが、もう彼らは私を上司扱いしているようだ。

「皆、まだ私を上司扱いするには早いと思うぞ。」

そこで一人の海兵が皆を代表するかのよう言う。

「いえ、私達の同期でこんな立派な功績を遺した方に同期扱いする方が馴れ馴れしくて良くないのです。」

「ロジャーの時のことを言ってるのか？私には有名どころとは戦っていないんだが。」

「いえ、結果的には逃げられましたが、熱線でオーロ・ジャクソン号を燃やし、**【飛將軍とひしやうぐん】**牙王がに傷を負わせたことであなは今海軍で最も注目されていますよ!!」

は？飛將軍？原作でそんな奴は出てこなかったが。

「すまんが、飛將軍とは「ルイン殿、そろそろ時間です。」…。」

式の係員が割り込んできた。どうやら時間のようだ。飛將軍と言う奴は気になるが…後でセンゴク中将にでも聞いておこう。

「わかった。すぐ行く。」

「あつ…あの…。」

「？」

「…いえ、失礼しました。」

海兵は去っていった。私に何か言いたそうだったが。

「… よろしいのですか。何か話していたようでしたが。」

「ああ、大丈夫。行こうか。」

彼とはまた会いそうな気がする。

会場へ着いて5分くらいした後、元帥であるコング元帥が現れた。

「えー…これより、海軍昇格式を執り行う。」

コング元帥のその言葉に会場に集まる全ての海兵が階級関係なしに敬礼をする。

私以外にも昇格する人はいるようだ。

「今回、昇格する者は全員で4名いる。階級順に呼んでいくから呼ばれた者は前へ。」

5名もいるのか。階級順と言っていたから私は最後だな。

「まずは、M・C09723。マリンコード海軍本部中将センゴク」

「はっ。」

センゴク中将：…え!?センゴク中将!!?

聞いてないんだが!?!おい、中将!?!

「先のロジャーとの戦いで功績を挙げ、日頃の行いもよく、市民達からの支持率も高い。実力もあるし、書類仕事も完璧だ!!センゴク、今日を以てお前を【海軍本部大将】に任命する。皆の者!彼に盛大な拍手を!!」

ウオオオオオオオ!!!

流石です！センゴク大将!!

パチパチパチパチパチパチ

周りから歓声が聞こえる。ガープ中將に至っては笑っている。

彼が大将になればこれまでよりも海軍が市民の支持率を得れる。そう考えたのだから。

え、何故私が素直に喜ばないか、だって？説教だ説教。ロジャーの時の。

「皆の者、静まれ！」

その声一つで周りの歓声がピタリと止んだ。

「続いて、M・C17389。マリノコーク海軍本部少将ロキ！」

「……はい。」

紫色の髪に、2 m以上ある身長。特徴的なブルージュマツシュ・パーマだ。

……誰、私知らない。

「元サイファーポールイージス0の職員だったが、海軍へと転職し、懸賞金3億4000万ベリーの【悪政王アバロピサロ】を監獄送りにした張本人。ピタピタの実の溶接人間であり、大きな功績を残した君を、【海軍本部中將】に任命する！」

「……どうもつす。」

「皆の者、彼に盛大な拍手を!!」

パチパチパチパチパチパチパチ

あ、拍手だけなんだ。彼。

けど、悪魔の实の能力者か。サイファーポールに居たぐらいだから相当強いだろう。

「…さて、3人目に入ろう。」

3人目。もう誰が出てきても驚かないぞ。

思えば原作当初はセンゴク元帥だからな。

「ロキ中将と同じく【海軍本部中将】に昇格。

マリンコード M・C23954。海軍本部少将ダルメシ

アンー！」

「ワンツ!!」

いやいや犬か！人だろお前。恥ずかしくないの？

「ぶわっはっはっは!!」

そら見たことか。ガープに笑われている。

「ガープ！止めんか!!」

「すまんすまん」

あのガープ中将を黙らせれるとは。センゴク t y . . . 大将は元帥になってもガープ

中将で苦勞していたのに。流石コング元帥だ。

「ウオツホン!!… 彼は動物系ゾオンダルメシアン犬の能力者で、六式の指銃と剃をマスターし、日々の努力でここまで這い上がってきた。そんな彼に盛大な拍手を！」

説明雑ツ!!短ツ!!もつと言つてあげたらどうなんだ!こんなのじゃ歓声なんて「ウオオオオオオオオオ!!」… え?

「流石!ダルメシアン中将!!」

「あなたこそ平民俺達の出の鑑だ!!」

パチパチパチパチパチパチ

ええー…。なんかちよつと萎えるんだが。

じゃあ、彼より階級の低い私はもつと雑なんじゃあないか。

「静まれ!静まれ!!」

コング元帥が声を張つても歓声は止まない。

大人気だな。ダルメシアン犬。

… ちよつと覇気を使うか。

覇王色を使つたら一瞬で場の空気が凍りついた。

… ちよつと加減できないや

バカ言え！あいつの能力じゃ…。

だから誰なんだ【飛將軍】って。そんな奴知らんぞ私は。
「静まれ、お前達！そして彼女に盛大な拍手を!!」

……。

再びの沈黙。まあこうなるのは読めていた。

さて、私の海兵生活。どうなることやら。

【孤独の狩人】

昇格式が終わった翌日、私はまたセングク大将に呼ばれていた。何か大事な話があるらしい。

「入っても。」

「ああ、入りたまえ。」

相変わらず無駄に大きい扉を開けると、そこには【仁義と言う名の正義】と書かれた書道作品が壁に掛けられていた。以前はこんな物が無かった筈なんだが。

「その作品は私が考える【正義】を書いた物だ。海軍将校の者は自分なりの【正義】を掲げなくてはならない。壁掛けが出来るのは大将以上からだが。」

成程、私も考えなくてはいけないのか。

「で、何の用があるんだ。セングク大将。」

「それなんだが、君は類を見ないスピードで准将になったからな。本来しなければならぬことが出来ていないんだ。」

「本来しなければならぬこと？」

海軍にはそんなことがあるのか。

「ああ、君は〔少尉、中尉、大尉〕をすつ飛ばしているからね。その時に「海軍研修」というものをしなければならぬんだ。」

「海軍研修」？

「そうだ。「海軍研修」とは、〔少尉、中尉、大尉〕になった時にするものでね。〔海軍本
部中将〕以上の者の下に付き、海軍の基本戦闘方法や上司の立ち回り方などを学ぶ所だ。
研修中に成果を挙げることでやつと准将以上になれるから、一つの障壁としても知られ
ている。」

へえ、じゃあ昨日会場で昇格した人達は歴戦の猛者だったんだな。

「君の場合はそこで「経験」を積んでもらう。」

「経験？」

「ああ、どんなに強い能力を持ったとしても使い方次第で弱くもなる。歴戦の猛者相手に能力だけで渡り合えるなんて事は絶対にならないからな。だが「経験」を積んでおけば、その時その時で最も良い選択をすることが出来る。現に私が大将に就いたのも若い頃培った「経験」在つての大将だ。」

おお！なかなか心にクるではないか。流石はゴールドロジャーと戦り合うだけはある。

「それで、君にはどの将校の元へ行くか選ぶ権利があるんだ。まあ私でもいいんだが。」

「まあセンゴク大将の元へ行かないのは確定として。」

「えッ酷ッ!!」

あなたから学べることは大体予想出来る。私は「未知」を知りたい。

「… まあいい、とりあえずリストだ。」

そう言われセンゴク大将にリストを渡された。

中には中將から大将の名前が書かれている。

「その中から一人選ぶんだ。今。」

とりあえず名前を見てみることにする。

ゼファー、モモンガ、オニグモ、ガープ、おつる、ダルメシアン…。

全員知っている。原作に出てきた人だらけだ。

だが、一つだけ気になる点があった。

「… 大将、昨日の昇格式で中將に昇格したロキ中將の名前は？」

「!!! ああ、彼か。彼はまだ新人ということでもまだリストには入れてないんだ。」

「だったらおかしくないか、何故ダルメシアンの名前がリストに載ってるんだ？」

「そ、それは…。」

「どうやら、ロキ中將はワケありらしい。」

「… はあ。彼はあえて入れなかった。」

「どうして。」

「それは彼が【孤独の狩人】だからだ。」

【孤独の狩人】？何それ。

「誰も寄せ往けない圧倒的な強さ。【悪政王】の時も、彼は拳一発で仕留めた。まるでロックスを追い掛け回していた若い頃の私やガーブだ。だが、我々と違う点は一つ。彼は全ての任務を一人でこなした。連絡もせず、倒してきたら身柄をこちらに渡すぐらいでしか本部には戻ってこなかった。彼は軍隊を持っていない。一人で何でも出来てしまうからだ。だから、彼の名は省いた。」

「…成程、わかった。」

今決まった。私の研修先は。

「なら、私はロキ中将の所に行く。」

「待て!!ルイン!!話を聞いていなかったのか!!!」

「今聞いた!!聞いて尚、私はそこへ行きたいと考えた。本部へ戻らず、各地を歩き回ってロキ中将ならいろんなことを知っているはずだ。ならどの人よりも学ぶことは多いはずだ。」

「いや、彼は【孤独の「孤独なんて関係ない!!」…。】」

「不可能ではないのだろう。彼は中将なんだから。」

「…… 本当に後悔しないんだな。」

「後悔？ そんな物、前世で捨ててきた！」

「…… 彼には私が直接伝えておくことにしよう。では明日、私の所へ来てくれ。」

「わかった。では失礼する。」

そうして私は部屋を出た

何が孤独だ。海軍は組織。孤独になるわけが無いんだ。

ロキ side

「…… と、言うことだロキ中将。」

「…… はい、わかりました。」

久々に電話を受けたと思ったらセンゴクさんだった。

どうやら明日から俺の元に研修生が来るらしい。

…… はあ。足手まといにならなければいいが。

今現在、俺はマリンフォード内のホテルで宿を借りている。本部の中将なのに。

それも当然。俺はこんな所今すぐにも出て行きたい。出て行ったとしても孤独ひとりなことには変わらないが。

少し俺の話をしよう。

俺はいつでも孤独ひとりだった。

養子で、いじめられて、大人になっても誰とも話さなくて。

ただ、運動神経だけは良かったから

友達ができると思ってサイファーポールに入った。

だけど、何も変わらない。孤独ひとりだ。

そこで得た物は圧倒的な強さと「孤独の狩人」という二つ名だけ。

いらぬ。いらぬんだよ。そんな称号は。

俺が欲しいのは、【仲間ともだち】だけだ。

俺は、サイファーポールを辞め、海軍の将校になることにした。

こうすれば同僚と言う名の仲間ともたちができると思つたからな。

だけどそんな淡い期待はすぐに砕け散つた。

俺が多数の功績を残したから。「悪政王」なんかとつ捕まえたから。

同僚達はすぐに俺を【化け物】扱いした。

ああ、もうやめだ、こんな話。聞いても暗くさせちまうだけだよな。
今日はもう寝よう。

「あと5分で来るはずだ。」

「……そうすか。」

「……………」

翌日、俺はセンゴクさんの所へ来ていた。研修生の面接らしい。まだ名前は聞いていない。

温和と言われているセンゴクさんでも、俺とまともに会話したことは一度も無い。

コンコン

「『私』だ。センゴク大将。」

「ああ、入りたまえ。」

声色からして女。年齢は10台後半の様に聞こえる。

「失礼する。」

そう言っに入ってきたのは、昇格式の時に見た少女だった。

「あなたがロキ中将だな。」

「…… そうだが。」

「今日からあなたの元でいろいろ学んでいこうと思ってる。名はルイン・アラクハートだ。階級は准将。これからよろしく頼む。」

数多在る候補の中で何故俺を選んだのか。間接的に聞いてみよう。

「変わってるな。俺から学ぶことなんて無いと思うんだが。」

「いえ、ロキ中将は他の中将よりも多くのことを知っている。センゴク大将から数多くの島を渡ったとも聞いた。そんなロキ中将から学べることはこの先必ず役に立つと考

えたんだ。」

「…そうか。」

初めてだ。海兵に入つて一番最初に俺のことを二つ名で呼ばなかつた奴は。

いままでの奴らは必ず俺を「孤独の狩人」としか呼ばなかつたからな。

「…センゴクさん、これ、俺も自己紹介した方がいいんですか。」

「あ、ああ。」

「じゃあ、俺の名前はロナルド・D・ロキ。昨日から海軍本部中將をやつてる。…自己紹介なんてしたことないからちよつと緊張してるが、これからよろしくな。ルイン。」

くだらねエそこらの奴らだったら即蹴つてたが、

認めるよ。お前の研修を。

お前からは、俺と同じ臭いがしたからな。

『組み手』

私達は今、マリソフオードのすぐ近くの無人島に来ていた。

「……そうだな。ルイン、お前は「六式」って言うの、知ってるか。」

「ああ、知っているが、まだどれも使えない。」

今日から本格的に研修が始まる。

ロキ中將はサイファーポールから転職したから「六式」は全て使える筈だ。

「……わかった。じゃあ、まず最初に俺と組み手をしてもらう。」

「……え？」

組み手？今の私と組み手？能力使っていいんだったらやってもいいんだけど。

「勿論、能力は使っていいぞ。今のお前の実力を測れたらそれでいいからな。俺の能力で闘技場を作る。」

そう言つてロキ中將は地面に手を突き刺した。

すると地面から大量の土が私たちを覆う形で盛り上がってきた。

大きさは東京ドームくらいだと思う。

「えっ……中將の能力って確か……。」

「俺はピタピタの実際の溶接人間。なんでもくつつけたり離したり出来る能力だ。そして、溶接しているものは自分の意思で自由自在に動かすことが出来る。これはその応用だ。」

能力は使い方次第、この人はそれをよく理解している。

「…ちよつと、燃えてきた!!」

「とりあえず、ルール説明だ。さっきも言ったように、お前は能力を駆使して俺に挑んで来い。ただし俺もお前と全く同じ条件で行く。」

「え…それはロキ中将、どういうことだ。」

理解が出来ない。私と同じだったらロキ中将は本気で来ると言うことなのか。

「…組み手の中で解かる筈だ。」

「は、はあ…。」

「それと、もう組み手は始まつてる。どこからでもいい。」

ロキ中将が構えた。なら、私も構えなければ。

私は即座に両腕に炎を纏う。

「……へえ。」

「うぐぞ!!」

私の考えた新技を見せてやる!!

私は素早くロキ中将の胴元に移動し技を放った。

【焰崩し】!!
ほむらくすし

焰崩しは右腕で相手の胴を焼き上げ牽制し、その隙に左腕で強力な一撃を食らわせる大技だ。

だが、なぜだろう。攻撃が当たった感覚が無いのだ。

その不思議な感覚に囚われているとすぐに答えが返ってきた。

「!?」

なんと、ロキ中将がボロボロと崩れ落ちてしまったのだ。

「攻撃力はそこそこ。だけど、スピードが足りない。」

「がはっ……!!」

そう聞こえた時には、腹に掌底が打ち込まれていた。

余りの痛さにおもわず腹を抱える。

「……あと、防御力も。」

声が聞こえた方向へ向くと、一切傷を負っていないロキ中將がたっていた。

（何故傷を負っていないのか。確かに命中させたと思つたが。どこから掌底を打ち込まれた!? 腹に打つなら正面からじゃないと……。）

「……それは、よく考えれば解かる筈だ。それと、俺は【六式】を使つてないぞ。」

六式を使つていない？ ならあの攻撃に説明が付かん。

だがまだ終わつたわけじゃない。戦える。

私は左腕に最大火力の炎を纏わす。

「【一点集中地獄の炎】 ツ!!!」

【大地の盾】。」

瞬間、ロキ中將の周りに土の壁が発生した。

それはロキ中將を囲つていて、まるで大きな半円だ。

一点集中地獄の炎でも貫通しない。なんて硬さだ。

私はその球体を警戒した。彼のことだ。いつどんな攻撃がくるか分からないからな。

「周りが見えていないな。」

するとうなじ辺りに強い衝撃が走つた

「ガッ……。」

その衝撃に耐え切れず、私は意識を手放した。

目を覚ました時、そこは知らない家の天井だった。

そしてベッドの中、感覚的にお腹と首に包帯が巻かれている。

「……は……。」

「……目覚めましたか。ここはマリソフオードのホテルの一室だ。俺専用の。」

声のするほうへ向くと、そこには私服姿のロキ中将がいた。

「……大丈夫か、ちよつと強く打っちゃまった。首と腹、痛くないか。」

「ああ、まあ……大丈夫だ。」

「そうか。なら良かった。」

私は確か組み手をしてた筈……はっ!!!

「私との!!!私との組み手はどうなった!!!?」

私はロキ中将の胸倉をつかんでそう聞いた。

組み手の結果。戦闘のプロから見た私の評価。私は今どれほど通用するか。

今はただそれだけが知りたい。

「あー…落ち着け落ち着け。結果だけ言えば100点中20点だ、お前は。」

「え、20点…。」

そうか、20点か、ハハハ…。

「いやそう落ち込むなって。俺も採点するの初めてだったからな。」

「……。」

「とりあえず、一通りの評価は今から言うぞ。パワーはまあそこそこ良い方だと思うぞ、だが、お前にはスピードと防御、耐久力が圧倒的に足りてない。」

「……グスツ」

もうだめ。泣きそう。

「おいおいおいおい、そこまで気にする必要は無いんだぞ！俺に20点って最初から言わせるのは凄いいことだ！素でそこまであるんだったら俺達の域に来るのも早いはずだ！」

「…本当？」

「ああ！今あげたお前の弱点は技術でなんとかなる！明日からはその技術を身につけさせてやる!!」

「本当か!?よし！じゃあ…いたたたた。」

流石ロキ中将の一撃は治療しただけは痛みが中々引かない。

「おい、大丈夫か!?今日はゆっくり休め。それと夕飯作つといたから食うんだぞ。」

「ん… ああ。だけど一つ聞かせて欲しい。」

「なんだ。」

「組み手の時に打ち込まれた掌底。あれはどこから打つたんだ。」

そう、これが不思議で仕方ない。

「… ああ、あれは俺の能力の応用だ。なにも俺は体全体が物に溶接できないとは言っていない。」

「… まさか」

「多分お前が予想していることは当たってる。俺が構えた時があつたら、あの時に俺は完全に大地と溶接していた。つまり俺は「焰崩し」の時には既に地中にいた。そこでお前の下に土で腕を作り出し、お前の角度からは見えない所から掌底を与えてやった訳だ。土くれだから威力は低かつたら、お前にとつちや痛かつただろうがな。」

成程、完全に自分の能力を物にしている。腕に炎を纏わせるだけの私とは大違いだ。

「… じゃあ、俺は隣の部屋にいるから。腕に炎を纏わせるだけの私とは大違いだ。」

そう言つてロキ中將は隣の部屋へ歩いていった。

今日だけで一つ学んだことがある。能力に対する意識だ。

彼の能力は決して戦闘向きとは言えない。それでも彼は最大限戦闘に応用していた。あと、ロキ中将が作った夕ご飯は物凄くおいしかった。

あの人、専業主夫になれるのではないか。

ロキ side

俺はいつも一日の終わりに必ずすることがある。

それは、日記を書くことだ。

いまから今日の分を書くところだ。見ていくか？

いつもの俺なら。

俺の部屋に人を入れたことがない。そもそもそんな仲の奴はいない。

だけど『人』が俺の所為で怪我したから、治療してやろうと思った。

料理を作ることさえしない。軽い軽食で済ませてる。めんどくさいからな。

だけど『人』がいるから作ろうかかって思った。

人と戦う時に手を抜いたりしない。真剣勝負だからな。

だけど『人との組み手』だったから、ワザと手を抜いた。

稽古なんかつけたことがない。稽古する相手がないからな。

だけど『人』がいたから、稽古をつけてやった。

普段しないことなんていろいろある。

だけど、今日は。

初めて人に稽古をつけた。

初めて人の実力を測った。

初めて手を抜いた。

初めて俺の部屋に人を入れた。

初めて人を泣かせた。

初めて人の為に飯を作った。

今まで体験したことのないことが多すぎて、頭の整理が追いつかない。

だが、一つだけ言えることがある。
人と関わることって、こんなにも有意義で楽しいんだな。

…… こんなに書けるだなんてな。自分でもビックリだ。
まあ、今日がそれだけ充実してたってことだ。
さて、明日は『ルイン』に何を教えようか。

大海賊時代

大海賊時代、幕開け

——ゴールド・ロジャー自首——

いづれ大海賊時代幕開けの引き金となる出来事の引き金であるこの出来事に世界が震撼する。

その大元であるゴール・D・ロジャーは今インペルダウンに投獄されていた。

ロジャー side

コッソン…コッソン…

足音が響く。この響きは獄卒獣の物ではない。

その足音は俺の牢の前で止まり、一つの声が響く。

「……ロジャー。何故自首をした。」

「……ガープか。」

声の主はガープだった。俺の戦友で何度も殺しあつた仲だ。

「……前にも言った筈だが、俺はもう長くねエ。海賊団もあの戦い以来解散したしな。」

「……そうか。」

ガープの声は低く重たい物だった。俺の事で何か思うところがあるのかもしれない。

「ガープ！いつものような元気はどうした!?!まるで葬式みたいじゃねエか!」

「……。」

「ただそのことを聞きにこんな所に来るお前じゃねエ。なんか言う事あるんだろ!?!」

「……ああ。一週間後、お前の生まれ故郷ローグタウンでお前の公開処刑が決定した。」

「!……ハツハツハ……そうか。」

俺の公開処刑か。実に滑稽だ。だが、心残りが一つある。

「なあガープ!お前に頼みがあるんだ!!近頃俺の子が生まれるんだが、その子の世話を
して欲しい!!!」

「!!!なぜ俺が海賊のお前の子を世話してやらなければならん!!!」

海賊の子？ガープ、お前は何も知らないのか

「生まれてくる子に罪はねエ!!!ガープ!!何度も殺しあつた仲だろう？お前なら仲間ほどに信用できる!!」

「だからお前が守れ!!!」

「勝手な事を言うな!!」

「いやあ... やつてくれるさ.....!!!」

子の事は仲間にも言つてない。そして俺の子を最も安全に育てられるのがお前だけだと思つたんだよ。俺は。

だから俺はお前に俺の子を託す。

生まれてきてねエが、強くなれよ。俺の子よ。

俺の事なんか気にするな。親父なんて忘れちまえ!!

お前はお前で好きな道を歩んでくれ。

そしてガープ。

「俺の子を、頼んだぜ！」

そして時は流れ一週間後、俺の公開処刑の30分前。

俺はローグタウンの独房に入れられていた。2日前からだ。

最後をこの町で終えられるんなら、俺は幸せモンだ。

「ロジャー、出る、時間だ」

無表情の見張りが淡々と告げる。

腕につながれた鎖で俺を引っ張り出す。

「おいおい、自分で出れるって。」

「これは我々の仕事だ。」

そう言っただけで俺は処刑場へと連れられた。

「ロジャーだ！ロジャーが来たぞ!!」

「撮れ!!大ニュースだぞこれは!!」

俺が処刑場へ立つと周りの観衆が騒ぎ出す。

俺はその高い処刑場から辺りを見渡す。

一般人以外にも名の知れた海賊たちもちらほらいた。

そして、スピーカーから音が聞こえ出す。

『ただいまより、海賊王ゴールドロジャーの公開処刑を開始する!』

どうやら俺の公開処刑がもう始まるようだ。

『何か言い残す事はあるか!!?』

「.....」

言い残す事?決まっている。マスコミも海賊も民衆も、俺の言葉が欲しいんだろ?

言い残す事か、一つだけあったな。

俺にはもう必要ねえ物だが、存在だけでも知らしめてやろう。

「俺の財宝か?欲しけりやくれてやる、探せ!!この世の全てをそこに置いてきた!!!」

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

ここに人がロマンを求め海へ飛び立つ「大海賊時代」が幕を開けた。

飛將軍戦 1

牙王 side

ロジャーの処刑が執行された。

【海賊王】の最後としては余りにあつけなく、そして美しい最後だった。

「うわああああああああああ!!!ロジャー船長おおおおああああああ!!!」

私のすぐ隣にいるバギーが大声を上げて泣いている。

それも当然か。ロジャーは私たちのことを家族の様に思ってくれていた。泣かない方がおかしいだろう。

それほど彼は私たちにとって大きく、偉大な存在だったから。

彼は常に前を向いていた。どんな困難や謎が待ち受けていようと物ともせず、むしろ嬉々として進んでいく奴だった。

そんな彼のおかげで楽しい航海が出来たし、楽しい海賊人生を送る事が出来た。

心から感謝する。我が船長よ。

そんな意を込め、私はロジャーの処刑台の方に向き、手を合わせる。

「……今まで、ありがとう。ロジャー。」

この言葉と、仲間の涙は地獄まで持っていつてくれ。

グランドライン
偉大なる航路のある島にて

「追い詰めたぞ！懸賞金9億7200万ベリー【飛將軍】牙王!!!」

私は今、海軍の軍隊に囲まれている。見聞色で捉えられる限り、1万は軽く超える数の海兵だな。

私は愛刀を構える。

「君たちもしつこいな。残りの余生は静かに暮らしたいんだよ、私は。」

「貴様のような大犯罪者に余生もあるか!!!」

「世界を一周する事が犯罪と言うのはどうなのかね？」

「他の船員ならそうだろうが、貴様に関してはもつと大きな犯罪を犯している!!!」
大きな犯罪?..... ああ、アレか。

「成程、わかったよ。じゃあ返り討ちにしてやろう。」

私は愛刀を鞘から引き抜く。

「君たちには飛ぶ斬撃を見せてあげよう。」

刀を武装色で黒刀に変える。

「くるぞー！構えろ!!」

合図と共に全ての海兵が銃口を私に向ける

「大砲も全部奴に向ける！こうでもしないと奴は全て切り刻むぞ!!」

軍艦の大砲の砲門も全てこちらに向ける。

「私の指示で一斉射撃だ。」

「さあ、指示は済んだかい？」

「!!? 貴様、まさか……。」

「ああ、これくらいハンデにもなりやしない。伝説を舐めるなよ？海軍。」

「貴様!!!全体撃て!!!」

その指示と共に発砲音が鳴り響く。まるで雨のように連続的に。

「ハッハッハ……【豪劍・嵐】ごうけん・あらし」

刀を台風のように振り回し、斬撃の竜巻を作る。

放たれた弾丸全てを切り裂く、【飛ぶ斬撃】だ。

「……もう少し威力をあげるか、【豪劍・嵐】ごうけん・あらし」

もう一度同じ技を放つことで技と技が重なり合い、倍の火力を生み出す。雑魚をまとめて斬るのうってつけだ。

そしてこの竜巻、一つだけ欠点がある。

黒刀が生み出す斬撃ゆえに視界がさえぎられるのだ。

まあ、覇気を使えば欠点でもないんだがな。

竜巻が止んだ時、辺りは大量の血しぶきで真っ赤だった。

やはり数だけだな。脆い。

「……こんなものか、海兵は。」

私は失望する。ロジャーがいなくなれば所詮はこんなもの。

私は改めて思う。あの時代は黄金のような日々だったと。

「……いや、そんな事はないと思うぞ。」

私の背後から声があった。おそらく海軍側の人物。私の斬撃を防ぐ時点で只者ではない事分かる。

私はその相手の方に振り向かず、問う。

「何者だ？ 私の斬撃を防ぐとはなかなかやり手の様だな。」

「まあ、伊達に【孤独の狩人】なんて呼ばれてないし。」

「!!」

【孤独の狩人】：… 確か【悪政王アバロ・ピサロ】を一撃で沈め、一時期有名になった男の通り名だった筈。

有名どころの海賊を一人で倒していくうちにそう呼ばれるようになった男と聞いている。【孤高のレッド】のような男だ。

：… だが、何故そう呼ばれている男が軍隊の中に紛れていた？

そして、【孤独の狩人】と呼ばれていても海軍。海兵の命をこうも簡単に私が臨戦態勢に入った時、【孤独の狩人】は慌てて手を上げ

「待て待て早まるな。今日戦うのは俺じゃない。」

「何?」

「来いよ! 見せてやれ、今のお前の実力を。」

奴がそう言った途端、奴の後ろから何か紅い塊のような何か飛んでくる。

ソレは明らかに私に向かって飛んできている。物凄いスピードで。

【地獄の剛拳】!!!

ソレがそう叫ぶとソレの腕が肥大化する、まるで巨人族のような腕だ。

私は愛剣を引き抜き、黒刀に変化させ、拳を受け止める。

「ム!!」

多少覇気を纏っている。それはいい、しかし、この腕は本当に実体か?

まるで何か別の力が働いているような感覚だ。

「プロミネンス!!!」

「ん!?!」

瞬間、肥大化している腕からあふれだすように炎が噴出される。

咄嗟の出来事に対応出来ず、私はその攻撃をもちに受けてしまった。

「グオオオ!!!」

ま、まずい! どうにかして消さなければ!! 能力の性質上炎はまずい!!!

私は体を転がせ、何とか消そうと試みるが、消えない。むしろ火力が増している。

待て、この炎、まさかあの時の!!!

「そうだ! あの時は名乗れなかったが改めて名乗ろう!! 私は『ルイン』!!! 海軍本部准将だ

!!!」

そういった途端、私の体に纏わり付いていた炎が消えた。いや、意図的に消されたと言

うべきか。

「…何故、火を消した。」

「これは挨拶代わりの一撃だよ。今のを見た感じ炎に弱そうだ。」

「…ハッハッハッハ!! ああそうさ! 私は火に弱い!!! 能力の性質上なア!!!」

なるほど、ロジャーの言っていた次の世代の者の一人か。では視てやらねば、これか

らの時代に通用できるかどうかを。

「フッフッフ：： なら私も自己紹介しよう。元ロジャー海賊団船員、懸賞金9億7200万ベリー【飛將軍】牙王だ!!」

我ながら少し燃えてきた。久しぶりに使うとするか：：

飛將軍戦2【イフリート】

ルイン side

「フツフツフ… なら私も自己紹介しよう。元ロジャー海賊団船員、懸賞金9億7200万ベリー【飛將軍】牙王だ!!」

私はそのとき感じた圧に一瞬怯えてしまった。さすがロジャー海賊団に所属していただだけはある。物凄い覇気だ。今の私ではきつい所があるかもしれない。

だが牙王は言っていた。「能力の性質上火に弱い」と。

だったら私のファイアドレイクで燃やせばいい。さっきの様に。

獣人化している私は炎を纏う量と速さが変身前よりも圧倒的に多い。「プロミネンス」もあるから攻撃範囲も広い。

いくら経験を積んだ相手でもこの範囲攻撃から逃れるのは至難の業だろう。

私は腕に炎を纏い、牙王目掛けて技を放つ。

「【一点集中地獄の炎】!!!」

この技は広範囲技の【地獄の炎】を一点に集中させる事で瞬間火力をあげる大技。そして、軍艦を貫き通すほど貫通力の高い技。刀一本では防ぎきる事はまず不可能。

「この技、防げると言うのなら防いでみる!!」

私がそう叫ぶと牙王は「一点集中地獄の炎」に手を向けた。

「ペラペラ」

彼がそう言った瞬間、「一点集中地獄の炎」がただの大きな紙に変わってしまった。

「何!!? 私の「一点集中地獄の炎」が紙切れに!!?」

意味がわからないと言った私に彼はその訳を話す。

「私は「ペラペラの実」の紙人間。紙を生成したり、どんな物でも紙に変化させたり、それらを操る事が出来る能力者だ。」

紙!?! 本当に能力って何でもありだな。

私の前世の一世紀前ぐらいだったら時の人になれるかもしれないな。

「そして、私が紙に変えたものは紙に変化する前の状態の特性を全て受け継ぐ。」

「全て受け継ぐ? …… ってことはまさか!!」

「そう、そのまさかだ。いくぞ! 【地獄の槍】!!」

彼が変化させた紙が槍状に変化し、【地獄の炎】を纏い猛スピードでこちらへ直進する。

おそらく貫通力も引き継いでいるはず、まともに受ければ大怪我ではすまない。

「くっ… うああッ!!」

なんとか見聞色を駆使しかわした。もう一発来られたらもうかわせないかもしれない。
い。

後ろを振り返ると、私の能力を再現した紙が燃え尽きている事がわかった。

「成程なア。空中で燃やす対象が燃え尽きれば炎は自然と消えると。」

「……！」

気づかれたか、少しまずいな。

ここで改めて私の能力、ファイアドレイクについて簡単に説明すると炎の化身のようなもの。炎は自然界ではトップの位置に入れるほど強力な力だが、弱点がないと言えはそういうわけではない。むしろ弱点だらけだ。

炎の発生条件は空気（酸素）があることと、動機、ようするに発生源がなければならぬ。しかもその発生源は有機物でなければならぬと、いろいろ面倒なのだ。発生源は私の体そのものだから大丈夫なんだが。

だが発生源から別のものへ燃え移った炎は燃え移ったものを発生源とする。彼の紙のように空中に浮くようなものは焼き尽くした後、何も残らなくなってしまうのだ。

おそらく、彼はこの事に気づいたのだろう。生成する紙をどんどん空中に浮かせている。

次第にその紙々は私を四方八方方位する形になった。

「さあ、始めるぞ!!」
ペーパーピア【紙槍】!!!」

空中に漂う無数の紙全てが槍状に変形し、私に向かってくる。ヤバいこの数は!!本気でまっすい!!!

おそらく全て武装色を纏った槍。一つでも食らってしまえば死ぬ可能性すらある。私は見聞色を発動する。

(…ん?)

一つ疑問点があった。何故先程の槍よりもスピードが落ちているんだ?わからないが、これなら対応できる!

私は両腕に炎を纏い技を放つ。

「プロミネンス!!」

発生源から周りを巻き込むように舞い上がるその炎は無数の数あった紙槍を一瞬で燃えカスにしてしまう。

「なっ…。」

私が彼の特技を一瞬で無効化したことに驚きを隠せないようだ。当然、私はその隙を逃さない。

すぐさま【荊】で彼の胸元へ移動する。

「隙を見せたな!牙王!!」

「くっ!!! まずい!!!」

見せてやる。【六式】の最大奥義に、私の能力を合わせたあらたな必殺技!

「【六王銃・炎】!!!」

手ごたえはある。やったか!?

「…… フッフッフ、なんちゃって。残念だったな。私に今のは届いてないよ。」
(何!!? 私の奥義を防いだだと! いったいどうやって……)

「…… その疑問に答えてやろう。見ろ! 今貴様が技を放った場所を!!」
言われたとおり私が技を打った箇所を見る。そこには黒い紙が貼り付いていた。

「この紙は海楼石を紙にしたものでね。しかも私の能力で変化させているから能力者の

嫌がる海のエネルギーを感じさせることもない。実際には私以外には海のエネルギーが発せられるよう調整しているがな、防御力も高い上に能力者対策が出来る最高で最硬の鎧だ。」

「な…まさか海楼石を紙に変えるとは…」

「驚くのはまだ早い。実はこの紙、最小サイズまで縮小してあるのさ。」

「最小サイズ？」

「まあ見ている。」

黒い紙が今見たサイズのおよそ十倍ぐらい大きくなり、彼の周囲を舞い、変身ヒーローの変身みたいに彼の体に被さっていく。

いつの間にか彼は腰に携えてあった刀を右手に持ち、背中には大きな翼のようなもので付いている。体についている紙は兜と甲冑のようになっていた。

その姿は前世で見た武装している將軍を連想させた。

「ハッハッハッハ!!本当に久しぶりだ!この姿になるのは!!まあ、君は能力の相性的に本気で行かなければ勝てないと思ったのですね。だから君も本気を出せ!あの姿を私に見せろ!!」

本気、か。今私は本気を出しているつもりなんだがな。どうやら彼にはそう思われて無いらしい。

「ルイン!!!」

遠くの崖にいるロキ師匠が私に向かって叫ぶ。

「今回の戦い、竜化を使わずに勝て!!」

師匠に使うな命令が出されてしまった。おそらくこの後私が使うと考えたのだろう。まあ使うつもりだったのだが。

一度私は大きな深呼吸をする。そして相手^{牙王}を見る。

「師匠から使用禁止命令が出されてしまった。これ以上の変化は見せられないが、この姿での私の本気を見せてやろう。」

敵は海賊王の船員。生半可な覚悟じゃあ勝てる相手では無いことは当然わかってい。だから見せよう。今の私の全力を。

獣人状態の私は今出せるだけの炎を体全体に纏った。

【モード：イフリート】

それは全てを焼き尽くす邪神の姿。

それは神々をも下す絶望の炎。

「ハッハッハ……!!!面白い。」

「……………」

空には本気を見せた両者を中心に大きな渦が出来ていた。

飛將軍戦【終】

牙王 side

彼女が変身したその姿は以前ほどではないが確かな迫力があつた。

全身炎に包まれていて、その炎の中から覗かせるその目は私を焼き尽くさんとばかりに睨みを利かせている。

面白い。まるで血に飢えた獣だ。

「……………」

そして何も喋らないし、動きも見せない。覇気と気迫だけを感じる。

「……どうした、動かないのならこちらから行くぞ！」

私は彼女に接近し、右手に持つ愛刀で彼女の首目掛けて斬りかかる。何の動きも見せていない彼女がこれを防ぐのはまず不可能。

ザシュ!!!

心地いい音と共に彼女の首が勢いよく跳ねた。彼女はおそらく動物^{ゾン}。炎を自分中心

でしか操れない辺り

自然系ではないのは明白。もしかすればこの一撃で死んだかもしれない。

「グ、ガアアアアアアアアアア!!」

最後の抵抗なのか、彼女の体に纏わり付いていた全ての炎が彼女を中心として燃え上がった。

「ぬ、ぐおおおおお!!」

火力は凄まじく私の紙装甲ですら若干焦げているだろうと思うくらい熱が伝わってきた。まずい、燃える!!!

命の危機を感じた私は、【豪剣・嵐】で空気の層を作り、何とか回避した。

彼女から数メートル離れた私は、山火事のように燃え上がる彼女の方を見る。

「…凄まじい能力だ」

改めて実感する。彼女は化ける。そう思えるほどの威圧感だ。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

叫び声と共にだんだん彼女の体から炎が消えていく。おそらく限界を超えたのだらう。

そうして全ての炎が体から消えた彼女は首がある綺麗な人型の姿でその場に倒れ付した。

「…!!!」

そうか、白ひげの所の鳥のように再生能力まであるのか。火力もある上に再生まです

るとは、ぶっ壊れ能力だな。

「さあ、立て、まだ始まったばかりだろう、戦いは!!」

そう問いかけるも彼女から返事は無い。

「もうよせ、ルインの負けだ。」

「……【孤独の狩人】か……ずいぶん彼女に肩入れしているな。」

「ああ、そいつは俺の弟子であり、友達だからな。連れ帰らせてもらおうよ。」

「……友達?……フフツ、そうか友達か、なら連れて帰ってやれ。私も疲れたから帰るとするよ。」

「……すんなり引くんだな。昔のお前から想像出来ないが。」

昔の頃とはあの頃のことを言っているんだろう。そうだな、私もずいぶん柔らかくなつたな。

「ハツハツハ……もっと強くなって貰いたいからね。その子には。」

さて、私は帰るとしよう。次合う時はもっと高みだ。

ロキ side

奴の姿が見えなくなった時、俺は慌ててルインの元へ駆け寄った。

外傷は能力で全て回復しているが、疲労感や修行で溜まった疲れが体に来ているのは間違いない。

「…よくがんばったな、ルイン。」

本当にルインはよくやった。俺の厳しい修行を文句一つ言わずにやっていたし、今回のことは流石に何か言ってくるだろうと思っていたが、何も言わずやって来た。

一回俺の宿に帰って、力の沸く料理でも振舞ってやろう。

昇格、衝突

ルイン side

「…ん」

なんだろう、物凄くいい香りがする。

「…起きたか、ルイン。」

「ふえ…」

目を開けると、以前に見た師匠の部屋の天井だった。

声のする方へ向くとロキ師匠がいる。あれ、なんかあったっけ…

「……………あああっ!!!」

私はバツと

そうだ!!牙王と戦ってたはず!!勝負はどうなったんだ!!?

「おいおい落ち着け!!あんな激闘を繰り広げたんだ。今はゆっくり休め!!」

…確かに、そんな事を知るより自分の体を休めることの方が大事だな。

言われたとおりベッドで再び寝ようとする。

「ああ、待って待って、今料理作ったからまずそれ食ってから寝ろ。」

「料理……？確かにいい香りがするな。」

「おお！気付いてたか!!すぐ用意するからな!!!」

師匠のテンションがいつもと違うのは気になるが有り難く頂いておこう。

「見ろ！この料理はある国で習ったんだけどな、〔99のバイタルレシピ〕っていうやつの一つ、その名も、復活系、フロストフィッシュの出し汁スープだ!!!」

99のバイタルレシピ、たしかカマバッカ王国に伝わる門外不出の料理だった筈。まさか師匠が会得しているとは……。

「まあ、まだまだ料理は作ってあるが、飲んでみてくれ。」

「……ズズツ」

そのスープを口にする。

「……おいしい。」

おいしすぎる、フロストフィッシュはクセの多い魚として有名だが、非常に淡泊な味わいに仕上げられている。そして何だろう。体の底から力がこみ上げてくる感じもある。

「ホントか!?良かったー!!あんまり人に食わせる機会も無かったし、前食わせた時には

感想聞けてなかったから口に合うか心配したんだが、良かった…。ん、どうした？」

「…え？」

「ルインお前涙出てるぞ!!大丈夫か。」

そう言われたので目を触ってみると一筋の涙が流れている事がわかった。味に感動して泣いてしまったのかもしれない。

「いや、あまりのおいしさに思わず涙が出たんだと思う。」

「!!!…そうか、ありがとな。」

そういったロキ師匠の顔はかつて無い笑顔だった。

翌日も私はベッドの中にいた。一度ベッドに入ってしまったと、中々出れないんだよ。日本人なら誰もが感じた事があるだろう。

本当、修行の間は休憩のきの字も無かったからな。今ぐらいはこうしていてもいいだ

ろう。

ちなみに師匠は外出中だ。

……ただ私がベッドの中で寝てる絵なんてつまらないよな。じゃあ私の修行内容を少し語るとしよう。

まず私は【速さ問題】を克服するために【六式】の剣を獲得。獲得した速さに師匠から「速さは速さでも覚える速さは尋常じゃないな。」なんて言ってたな。

その調子で残りの【六式】も習得、ここまででかかった時間が1週間だ、まあ早い方だろうな。

そして覇気、これはもともとセンゴク大将に基礎は教えてもらってたから霸王色以外は3日でマスターしたな。「お前、実力だけで言えばもう5億の海賊ぐらいはあるだろう。」と誇らしげに言ってたな。

あとは新技のアイデアを幾つか考えたりしてた。【モード・イフリート】は昨日初めて使ったな。成功して良かった良かった。

ピンポーン

「……ん？」

この家、インターホンがあるんだな。初めて知った。

そんなことより速く出てあげなければ。

私は駆け足でこの部屋のドアの前に立ち、ドアを開けた。

「はい、どちら様?」

ドアを開けると、海軍の制服を着た男の人がいた。

「はい、こちらご注文の……つて、え!!」

「はい?」

どうしたのだろうか。

「あの、失礼ですがもしやあなた、ルイン中将では……」

「ああ、そうだが……ん、中将!? 何故?!」

「いや昨日昇格式があつて、その内容が【海軍本部准将ルインの昇格】だったんです

よ。」

「……はい?」

そんな話全く聞いてないんだが、え、何どういうこと?

私の中将? 何で? おかしくないか? 私が准将になったのつい最近なんだが!?

「……あの、海兵さん、上層部上に今からそっちに行くつて言つていてくれないか。」

「え……あ、はい。それとこちら注文の方なんです、よろしければこちらの方にサイン

を……。」

私は届け物にサインを書き、部屋を飛び出した。

私は今センゴク大将の元にいる。

「何で私の中将なんだ!? 准将になつたのもついで最近なんだが!?」

「いや、このことはロキ中将の訓練が終了し次第決行すると元々決まつてたんだ。覇王色を持つ海兵と言うだけで異例だし、何より本気の「飛將軍」と戦つたという実績だけで引き上げる価値がある。」

：： 上層部にはもう知れてるのか。昨日の事が。

「ぶわっはっはっは!!! 本気の奴と戦つたのか!!! なかなかやりおる。」

部屋にあるソファアーに座つていたガープ中将が人事のように笑う。何かむかつくな。

「お前は黙つていろガープ!!! とにかく! もう君は上層部上の許可も下りて【中将】になつたんだ。もつと実績を上げれば【大将】の座も狙えるようになるから精進するように。」

「でも私なんか中将でいいのか!? まだロキ師匠にも勝つたことが無いんだぞ!!!」

「アレは化け物だ、おそらく実力で言えば四皇ぐらいある。ただ性格に難があるからあの地位であり君が中将より弱いと言うわけではない。試しに他の中将を一人呼んできてやろうか、君なら即倒せるはずだ。」

「むう……」

何か異端者扱いされて仲間はずれにされそうなんだよ。だって普通の人だったら天才的なスピードで駆け上がって同僚を見たらどう思う？普通避けるよね。アイツと俺達は住む世界が違うとか言うくだらないこじ付けみたいなものつけて避けるよね。私はソレが嫌なんだよ。前がそうだったから。

「……… だったら、こうしてくれないか」

「何だ」

「海軍の人達に私は決して特別な存在ではなく、今回の昇格もちゃんと実績を残したからこそその昇格だと言う事を伝えておいてくれないか」

「何故だ。」

「……… 理由は聞かないで欲しい。頼む。」

私は床に手を突き土下座をしようとすると「待て待てそこまでしなくていい。」と言われ止められた。

「分かった。言えない事情があるんだな。ならいい、私がそう言うておく。だからこれから君は【海軍本部中將】として政府に貢献してくれ。」

「…… 分かった。」

まあいいだろう。言っといてくれるのだったらそれで。

話が終わり、セングク中将の部屋から出ようとすると、ガープ中将の隣に座っていた海兵が「ちよつと待ちなお嬢ちゃん」と言ってきた。

「……はい？」

その海兵は天然パーマでアイマスクみたいなのをつけている……。待つて、どっかで見えたことあるぞ。

私は念のため名前を聞く。

「あの、すいません、名前を伺っても？」

「ああ、俺はクザン。一応海軍本部少将をやってる。最近じゃ、腕の立つ海兵として知られてる。」

やっぱり、将来大将の座に就く人じゃん！

「何か用か？」

「ああ、俺達海兵学校卒業組はお前の事が気に食わないんだよ、だから今から訓練場を借りるから俺達と戦ってくれないか？」

……ええ？

海軍学校訓練場

「……………」

私は周りの人達の内容に驚愕していた。

青キジクッサンは勿論の事、赤犬サカズキ、黄猿ポルサリーノ、バスティーユ、メイナード、ハグワール、D・サウロ、モモンガ、オニグモなどなど、全員原作だと中将以上の階級にいる人達だったからだ。

「ホンマにコイツが【海軍本部中将】じゃとお……？」

「聞いた話より弱そうだねえ〜」

さっそく大将二人が私のことについてなんか言ってる。待って、勝てるか？この人数。

「……で、嬢ちゃん、対戦形式なんだが、嬢ちゃんが指名した奴から対戦していくって形で頼むわ。もし指名しなかったら一気に全員と戦ってもらおうが。」

何その鬼畜ルール。待って私って本当強敵としか戦ってないんだけど。酷くない？

仕方ない。指名するか。指名するなら能力の相性的に青キジがいいんだろう。だけど考える。私が知っている中で一番高い地位に上り詰めたのは誰だ？そいつを倒して

しまえば他の人達全員ビビッて逃げていくんじゃないか？そう、それがいい!!

「なんじゃあ、このガキウキウキしとるぞ。」

「…まさか、全員に勝てると思つてないだらうねエ。」

…あ、そうだった。一番地位高いの、赤犬^{サカズキ}だった。どうなんだろう。火の精霊とマグマ。行けるかな。

まあいい、指名しちやおう!

「…じゃあ、そのヤクザみたいな顔した人」

そう言つて私はサカズキを指差す。

「ブハハハハ!!嬢ちゃんいいね!もつといつてやれ、おいヤクザア!!ご氏名だぞ!!」

…あれ、青キジつてこんなだったっけ。

「…わしをヤクザじゃとお…覚悟はええんやの!!?」

サカズキが被つている海軍帽がマグマで煮えたぎっている。沸点低いなこの人、マグマのクセに。

「じゃあ、ヤクザと嬢ちゃん中央まで行つて、そこで俺が合図するから」

「貴様も覚悟しちよれよクザン!!」

この二人はどうやらこの時から仲が悪いらしい。

言われたとおり私たちは訓練場の中央まで行く。サカズキはマグマで煮えたぎつて

いるが。

「まあ、私を倒せるといいな。ヤクザ君。」

「調子に乗れるんは今だけじゃぞ……!!!」

「それじゃあいくぞ！試合開始!!」

試合開始だ。張り切つていこう。

「わしに勝てると思うなよ!!」

サカズキがマグマの拳で殴りかかってきた。私は咄嗟に右腕に炎を纏い殴る形での拳を受け止める。

「ぬおおおおおおお!!!」

「……へええ。」

叫び声と共に火力が増していくマグマ。そのマグマは私の炎を飲み込もうとせんばかりの勢いで私の炎を押し出す。

これがエースを焼いた悪魔の力の力なのか

「火がマグマに勝てると思うちよるんかアああ!!!」

確かに、エースの火は焼き尽くされていた。だが、私の炎は違う。

「考えが甘いね、私はファイアドレイク、溶岩の中を泳ぐと言う逸話を持つ化け物だ!!」

私は腕に纏う炎の量を増やす、すると先程まで押していた赤いマグマは赤黒い炎に覆

われつつある。

「：： なんじやと!?この感覚、まさかわしのマグマが燃やされとるのか!!?」

そう、私の炎は対象を燃やし尽くすまで永久とわに燃え続ける地獄の炎。腕を燃やし尽くすだけじゃあ済まない。

いつの間にか体の方まで燃え移った炎にサカズキはパンチの姿勢をやめ、燃える火を消すために地面で転がり始めた。

「ぬオオおおおお!!!」

サカズキ マグマが燃やされている光景に周囲は驚きの声を隠せないでいる。

「：： こりやあまずいねえ」

「まずいぞ、あのままでは本当に燃え死ぬぞ!!」

ざわざわと周りが騒ぎ始める。

そこで私は、一番屈辱的な負け方をさせてやろうと思ひ、サカズキにこう言った。

「なあ、そのままじゃ本当に燃え死ぬから、ここは私より弱いと言う事実を認めて大人しく降参したらどうかかな?」

そう、降参だ。降参なんて私にとっては恥そのものだからな。

「：：： !!!フザけるなあ!!!降参など誰がするかア!!!」

降参する気は無いらしい。ならもうちよつと痛めつけてやろう。

私は左腕に炎を纏う。

「そこまでだア!!嬢ちゃん、速く炎を消してやれ!!そいつはもう負けてる!!誰の目から見てもそうだ!!だからあいつの炎を消してやってくれ!!」

「なんじやと貴様ア!!わしはまだ「見苦しいねえ」…あ?」

「サカズキくクザンの言うとおり誰の目から見てももう君の負けなんだよ。だから大人しく降参しなあく。海軍としても君という大きな戦力を失いたくない筈だよ」

ボルサリーノが正論を放ち、サカズキを黙らせる。こんなことで海軍の戦力を失うのは確かにバカみたいだな。

「……グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

サカズキが叫ぶ。自分が負けていると言う事実には納得いかないのだろう。

「さあ、速く消してやってくれ。」

クザンに急かされる。そうだな。彼を燃やしてもう数分立つ。本当に消してやらないとヤバイな。

私はパチツと指を鳴らす。すると彼の体で燃えていた地獄の炎は魔法が解けたみたいに消えた。

「グオ…ゴフツ…ガハツ!!」

「大丈夫か、サカズキ!!」

周りの少将たちが彼の元へ近寄る。クザンとボルサリーノの二人を除いて。

「どうする、まだやるか？」

そう聞くとクザンはハハツ、と笑い

「いや、もういい。あんたの強さが分かったよ、ルイン中將。」

「…そうか。」

ならいい。彼らもしつかり理解した筈だ。こんな無謀な事はするだけ無駄だと。

するとボルサリーノが歩いてきた。

「…あんた、自然系かい？少なくともサカズキの攻撃をもつともしてなかったから自然系だと思っただが〜」

「確かにソレ、気になるなあ。中將、一体何の能力者だ？」

彼ら二人が私にそんな事を聞いてきた。まあ珍しい能力なのは確かだな。一応教えてやるか。教えたつて私に何か否があるわけじゃないし。

「私は動物系幻獣種、モデルファイアドレイクの能力者だ。自然系みたいに攻撃を受け流せるぞ!!」

「へえ〜。あつしが食う時があれば似たようなの探そうかなあ〜」

「俺はもう食ってるからいいが、へえ、センゴクさんと同じ幻獣種か。珍しいもん食ったんだなあ。」

「まあな、じゃあ私はもう帰っていいのか？」

「いや、こんな所に呼び出したお詫びに夕飯奢ってやるよ。」

なんと！ご飯をタダで食えるのか！まあロキ師匠に作って貰えばいいんだけど、こうでもしなければ今日ここに来た私に何のメリットも無いわけだからな。

「ぜひとも連れて行ってくれ!!」

「あつしもついていいかあいゝ」

「お前は自分の金で食え。」

今日の夕飯は高いの買ってやろう!!!ウへへ…

飲み会

その後、海軍食堂にて

「おいしいルインちゃん。飲んでるかあ〜」

「貴様は飲みすぎなんじゃあクザン!!」

「… あっしは酒に弱いからねえ〜… 君の気持ちがわからないよお〜」

クザンに奢りで連れて行ってもらった海軍食堂は先程訓練場にいた次期三大将がバチバチに目立っていた。クザンが私のことをルインちゃんと呼んでくるあたり、この少将達の私に対する好感度はかなり上がったと思われる。サカズキに関してはなんでも聞いてきたのか分からない。

「… ルイン中將。」

「どうしたヤクザ君。」

「^{サカズキ}ヤクザ君が話しかけて来た。何だろうか？」

「なぜわたしは無傷なんじゃあ？」

「ああ、さっきの事か、私の炎は解除すれば炎がそこに存在したと言う証拠すらも消して

しまうんだ。」

私はお酒を飲みながら答えた。ほんと不思議だよな私の能力。まだまだ自分でも分からないことがいっぱいあるしな。

「……どういう経緯で、その悪魔の実と出会ったんだい？」

「ああ、気になるか。よし、教えてやろう!!」

ボルサリーノの質問に答えようとした途端、少将達の視線がこちらに集中する。酔っているクザンでさえもだ。

「……私は捨て子でな。幼い頃にマリンフォード近くの無人島に捨てられたんだ。そこで何年もサバイバル生活をしているうちに悪魔の実を見つけたんだ。だけどサバイバル生活で海で泳ぐってというのは大事だったからな。ずっと保管してたんだ。センゴク大将に拾われるまで。」

「……ルインちゃん。ずいぶん大変だったんだな。」

「怖いねエ、その親」

まあ半分作り話なんだが。

「……じゃが、おかしくないか？何故幼い時に捨てられたコイツが悪魔の実の存在を知ったんじゃ？」

あ、ホントだ。ここどう説明しよう。

「あ、悪魔の実凶鑑ってあるよね、それを私が捨てられる前に読んでたんだよ!!」
顔を赤らめて言ってみる。まあ、大丈夫でしょ。行動でごまかせれば。

「……………」

ボルサリーノは物凄く冷たい目でこちらを見てくる。クザンを除いて。

「ブツ……………」

突然クザンが鼻の辺りを押さえた。押さえている手から赤い液体が滴り落ちている。

「…今のはクザンには刺激が強すぎたかもねえ〜」

「……………」

ボルサリーノは反応してくれたがサカズキは被っている海軍帽で自分の顔を隠していた。さてはコイツ、むつつりだなあ〜?

「あれえ〜?サカズキも照れてるのかい〜?」

「貴様は黙らんか!!ボルサリーノオ!!!」

「アツハツハツハツハ!!」

「アンタは笑うなア!!!ルイン中将!!!」

いやあ、その人から想像できないような物を見るのって面白いなあ。酒のつまみにもなるし。

「…あと、気になった事があるんだけど聞いていいか?ボルサリーノ?」

「… 何だあいつ？」

「ボルサリーノは悪魔の実を食べてないのか？」

そう、彼は能力を使うそぶりも見せなかったし、私の所まで歩いてきた。ピカピカの実を食ってるのならそんな事しなくても能力で近づけたはずだからな。

「ああ、食べてないよ。そこの二人が食ってるから、あつしも何か食べたいんだけどねえ。」

そうか、この時はまだ食べてないらしいな。

「成程、じゃあ提案なんだけど、今度『悪魔の実市場』に行ってみないか？」

「!!!」

その言葉に3人が驚いている。まあ確かに中々行く機会なんてない筈だからな。

「… あそこに行くには、中々手に入らないチケットがある筈、アンタが持つてるとは思えないけどねえ。」

「いや、持つてるよ、4枚。」

懐にしまつていたチケットを彼らに見せる。

「「ええ!?!」」

「ルインちゃん、それ、どこで…。」

「ああ、『准将』の時の昇格祝いにセンゴク大将から貰ったんだ。私は将来有望な部下が

出来た時用に置いておこうかなと思つてたんだが、期限が来年までだったからどうしようか困つてたんだ。」

「いや普通そんな高価な物貰えないからな!!一枚何千万ベリーすると思つてんだ!!?」

「…ルイン中將はセンゴク大将に気に入られてるつてことだねえ。」

へえー、そんなに珍しいのかコレ。

「…でも、あつしの為に使つてもいいのかい?それ、売れば下手すれば数千万ベリーで売れる代物だよ?」

「まあ、海軍としても能力者が増えれば即戦力になるからな。それに私も行ってみたいしな。」

期限が残り少ないコレがそこまで高く売れると思わないし。

「…じゃあ、お言葉に甘えて行かせて貰うよお。」

「んじゃ、明日行きますか。」

明日の予定が出来た。原作でも見たことないし楽しみだ。

「まあ、悪魔の実際の最低料金は海軍に申請すれば出してくれるじやろうが。わしらも行くことになるんか。」

「当然!だって四枚あるからな。使わなきゃ勿体無い。」

「…… ルインちゃんって将来器が大きくなりそうだな。」
「珍しく、わしも同感じゃ。」

海軍食堂で飲んだ帰り道にて

私は少将3人組と帰っていた。

「…… ああ、今日は飲んだなあ。」

酒なんて久しぶりに飲んだ。前世以来だ。飲み会したの。

「…… 帰るって、私、師匠のところへ帰ればいいのか？」

「…… ん、ルインちゃんの師匠って誰なんだ？」

クザンが聞いてくる。そういえば言っただけだったか。

「ああ、ロキ中将だ。」

「「えっ……。」」

三人の顔が見る見る青ざめていく。どうしたのだろうか。

「中将、まさかあの怪物の元で……？」

「…… 成程ねえ。アンタのその強さの片鱗を見た気がするよ。」

「…… !!」

三人それぞれが異なった表情をしているが、思っている事は同じように見えた。「そ、それじゃあ中将、また明日……。」

クザンはそう告げた後、能力でその場から消えた。

「あ、あつしも彼とは会いたくないんで……。」

「……わしも帰る。」

クザンの行動をきっかけにそれぞれが別方向の道へ帰りだす。みんな師匠を避けている感じだった。

いつの間にか一人になった私、なんか仕事帰りの孤独感を味わってる感じだ。

「ただいま。」

無事師匠が住むホテルの一室にたどり着いた私はそのホテルのドアを開ける。

「おいルイン!!!今まで何処に行っていた!!!今日は寝ていると言ったのに!!!」

奥から師匠の怒った声が聞こえる。そういうセリフは面と向かって言っただが。欲しいんだが。

私は師匠の部屋に向かいながら答える。

「私が中将になった件について異議を申しに行き、少将達と手合わせをし、
そして勢いよく彼のドアを開け、

「その少将達と飲み会に行ってきたんだ!!」

その言葉に師匠は顔を真っ赤にする。

「…… お前、未成年だろオが!! なんて酒なんか飲んだ!!? 俺はお前をそんな弟子に育てた覚えは無いぞ!!」

「師匠は私の親か何かか!! ちなみに明日、予定があるから出かけるつもりだ。」

「何イ!!! …… まさか、その少将達と……。」

師匠は青ざめた顔でこちらを見てくる。…… 彼は変な勘違いをしている。

「違う!!! 確かに明日そいつらと出かけるが、「悪魔の実市場」に出かけるんだよ!」

「はア!!! まさかルイン、その少将に悪魔の実を買ってやるんじゃないだろうな!!! どの誰だ!!! その少将は!!!」

「…… サカズキ、クザン、ボルサリーノ。」

少将の名前を言うのと師匠の顔に少し落ち着きが見えてきた。

「…… 成程、たしかにあいつらはあんな事はしないな。クザンは分かんが…… まあいいだろう。行ってきても。」

「師匠はどんな勘違いしてるんだ!!!」

この人、とんでもない勘違いしてたな!!!私がそんな事するわけないだろ!!!

「まあ。あそこに行くんだつたら明日早いんだろ。だつたらとつと寝ろよ。」

「むううううううううう!!!」

こうやつてすぐ話を逸らす。いつか負かして泣かせてやる!!!

【悪魔の実市場】「前編」

翌朝、昨日飲んだにも関わらず私は早起きし、待ち合わせ場所のマリンフォード港に来ていた。師匠と。

「おお!!ここがマリンフォード港か!!」

「・・・そうか、お前ここに来るの初めてか。」

大きな船が何隻も停泊していて、朝から従業員の人がわっせわっせと働いている。前世でも港なんて来たことなんて無かったから感動物だ。

何で港に行った事が無いかって？私は県外に行く時は飛行機派だったからな。

途端、少し悪寒が走る。

「よお、ルインちゃん!!」

「おお!!」

いつの間にかクザンが現れていた。能力で出てきたあたり私を驚かせるつもりだったのだろう。

「……………」

何だろう。後ろから物凄い殺気を感じる。

「いやーあいつ等まだ来てないのか。じゃあ俺達二人だけかー」

「あ、あのクザン？その辺にしといた方が…。」

クザンのセリフに殺気が強くなっていく。

「いやーさ、今日はあいつ等も来るけど今度二人で「おいクザン」…ん？つて、げ!!!」

「あ…あ。」

ヤバい、師匠がクザンに向けている目がヤバい。

「お前、俺の弟子をナンパしようなんざ、100年早エんだよオ!!!」

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「そんじゃ、俺はこの船が次来る夜八時にまた来るから。」

「…あ、ああ。それじゃ。」

師匠が帰って行った。クザンをボコボコにして。

顔面ボコボコのクザンが話しかけてくる。

「る、ルインちゃん。よくあんなのと一緒に住めるな。」

「い、いや、まさか師匠があそこまでするとは思ってなかったんだ。普段は優しいし…。」

「うわっ…… あの人マジか。」

まあ、クザンには今度ご飯でも奢ってやろう。

「早いねエ〜君達〜。」

「…… 何故クザンがボロボロなんじゃあ?」

サカズキとボルサリーノがやって来た。両方とも正義のコートを羽織り、タキシードみたいなスーツを着ている。

今更だがクザンは正義と書かれたパーカーを着ている。

それよりこの二人の疑問に答えてやるとしよう。

「ああ、さっきまで師匠がいてな。クザンは「ちよちよ、ルインちゃん!!」言わなくていいから!!」…… え?」

説明しようとしたらクザンに止められた。何で?

「…… ほほう、クザン貴様。中將をナンパしようとしてボコボコにされたんじゃなあ?」

「…… 面白いねエ〜! 最高だよオ〜!! 今度広めてやろうかねエ〜。」

「やめろボルサリーノ!! 凍らすぞ!!!」

…… どうやら、言わなくても分かっているらしい。

「まもなく【悪魔の実市場】行きの船が出港いたします。まもなく【悪魔の実市場】行きの船が出港いたします。」

アナウンスの声が聞こえる。速く行かなければ。

「あららら、不味いんじゃない？速く行かないと」

「そうだな。行こうか。」



【悪魔の実市場】

無事に航海を終え、港にたどり着いた私は少将達にそれぞれのチケットを渡し【悪魔の実市場】に足を運ぶ。

「おおおおお!!!」

高級店にありそうなショーケースに悪魔の実が飾られている。どの悪魔の実も色や形が違っていて面白い。こんな所だったのか。【悪魔の実市場】って。

「子供か中将は。」

「おお。あつしも初めて来るねエ。どんなのがあるか楽しみだよ。」

「… わしには必要無いんじゃないか?」

三人が違った反応を見せている。まあ今回はボルサリーノの為だけに来ているからな。ボルサリーノと私以外が微妙な反応をするのもまあ当然なんだが。

「ちなみにボルサリーノ、お前は何億持ってきたんだ?」

「あつしは一応3億持ってきたよ。」

「3億で足りるんか?」

「いやあく多分いけると思うけどね。」

3億か。まあ買えるんじゃないか? オペオペとかは無理だけど。

「とりあえずあつしは見てくるよおく。」

「おい、待つんじやボルサリーノ!!!」

とてもわくわくしている様子のボルサリーノは待ちきれないとばかりに飛び出していった。もう私も行こつかな。

「あららら、行つちやつたよ……俺達はどうする?」

「じゃあもう私行つてくる!!!」

「ルインちゃんまで!!?アンタはもう能力者だろ!」

能力者でも悪魔の実は気になる。当然じゃないか。

私も悪魔の実はシヨーケースの方へ飛び出していった。

クザン side

ルインちゃんが飛び出して行って俺達二人が取り残される。

「……………」

気まずい。コイツと二人でも話すことがない。元々仲良くねえしな。しばらく沈黙が続くが、向こうからその沈黙を破ってきた。

「……お前は、中将のこと、どう思つとるんじや。」

「ルインちゃんのことか。…上司の中ではガープさんぐらい信頼できる。」

本当の事だ。飲み会の時に見聞色を使ったが、俺達3人に対して何の不満も持つてなかったし、お前を赤子みたいにする人だからな。

「…そうか。」

「逆に聞くが、お前はどうかんだ。」

「…変わった奴じゃと思つとる。海軍の中でも荒れてるわしらに普通の友達みたいに接するし、話してて面白い上司じゃな。」

へエ…。あのサカズキがねエ。

「…成程。じゃあ俺も悪魔の実見てくるわ。」

「そうじゃな。わしも行くか。」

まあ、あの中将は、ガープさん以来の『良い人』だ。

ルイン side

悪魔の実一つ一つがショーケースに保管され、金色のプレートで名前が書かれてい

る。

「へえ。【パチパチの実】、「ラキラキの実】、「ホネホネの実】：…超人系パラミシアばかりだな。」
 いろんな悪魔の実を見ているが超人系パラミシアしかないな。個人的には動物系ゾオンの実を見てみたいんだが。

一応資金として2億持ってきている。将来の為に買っておこうかと思ったからだ。

「おお〜ルイン中将〜。」

「おお、ボルサリーノ。」

ボルサリーノが声をかけてきた。ちよつと上機嫌だ。

「どうした。欲しい実があったのか。」

まあ私は彼はピカピカの実を食べると思っているから、何も買わないんだろうなと思
 うが。

「ああ〜見つかつたよお〜」

「何ツ!!!」

驚きだ。まさか見つかるとだなんて。

一応実の名前を聞いてみる事にする。

「ちなみに、実の名前は？」

「ああ〜それが、分からないんだよねえ〜。」

「… え？ここに売ってる悪魔の実って全部名前が分かってるんじゃないの？」

私が見た限り、名前の分からない実は無かったんだけどなあ。

「… ルイン中将。アレ見てみなさいよ」

「？」

ボルサリーノが指差す方向を見ると「能力が判明している物」と書かれていた。

「アンタが見てたのはソレでしょう。あつしが見てたのはあつち。」

そういつて別の方向を指差す。そこには「能力が判明していない物」と書かれていた。

「！…へえ。そんなものがあつたのか。」

「そうなんだよ。で、あつしを買ったのはコレ。」

ボルサリーノは懐から悪魔の実を取り出す。

「おお〜!!!」

その悪魔の実が黄色い悪魔の実だった。

「何故かこの悪魔の実に心惹かれてしまつてねエ。見た途端に買つてしまつたよお。」

何の実か知らないけど、あつしはコレを食うよオ。」

おそらくピカピカの実なんだろう。まさかこんな所に眠つてたなんて。

…だが、そんな事より気になる事が一つある。

「… ちなみに、お値段の方は…。」

「ああ。何の実か分からないから、変な実だった場合の保険も込めて最低金額の1億ベリで買えたよお。」

「おおお!!!その実が一億か!!!」

「ロギア自然系で一億は安すぎる!!商人大損だな。」

「……?、その実い〜?」

「あつ……」

「マズイ……。いや、マズくないか。どうせ知る事になるんだし。名前くらいいいか。教えとしても。」

「……私の予想ではおそらくソレはピカピカの実。」

「ピカピカの実い〜?……なんだそれ。」

「詳細は食べてからのお楽しみってことで。」

「……まあ、ルイン中将でその反応って事は強い悪魔の実ってことだねえ。食べるのが楽しみだよお。」

「……あれ、今食べないのか?」

「ああ、アイツ等の前で食べてやろうと思つてねえ。じゃああつしは買い物終わったんでアンタについてく事にするよ。やる事ないし。」

「そ、そうか。分かった。」

ボルサリーノ
この人案外性格悪いな。

「…じゃあ私もそっちに行こうつと、案内してよ。」

「…まったく、見れば分かるでしょうに…。」

名前が判明していない悪魔の実が置かれている所は、先程の場所とは違い、一つの大
きなシヨーケースに何個もの悪魔の実が置かれていた。

「おお、こつちも凄いな。色んな実がある!!」

「…あつしはさつき見たけどねエ…。」

「おお、また来てくれたのかい。」

「さつきはどうも。」

…こつちはシヨーケースのすぐ隣に会計があるんだな。

「そちらのお嬢さんも、海兵さんかい？」

「…はい！そうです。将来有望な部下を持ったときのことを考えて悪魔の実を買いに
来たんです!!!」

「…知らない人の前だと、人が変わるんだねえ。」

うるさいな、隣。

「……と言ふことは、君はもう既に能力者か。」

「はい、そうです!!」

「へえー。面白いね。まあ、ここに売ってる悪魔の実は最低金額の一億ベリーで販売してるから。好きに見てつてよ。」

「はい!!」

よーし、見ていこう。

いろいろあるなあ。まあ、私が欲しいのは動物系ゾオンだが、そこは運まかせだからなあ。買えるとしても二つ。慎重に選ぼうかな。

「……！おーいたいた!!ルインちゃん!!」

「いたのう。ボルサリーノも。」

…… 真剣に選ぼうとしたら二人来たんだけど。

「ああ、やあ二人とも。調子はどう?」

「調子はいいぞつて言うか、俺等の事適当に流そうとしてないルインちゃん!?」

「今ルイン中将は真剣に悪魔の實を選んでるからねエ。」

そう、そういうことだから邪魔しないでつて事だ。

改めて選ぼう。…… ん、上の段の左から二つ目にあるバナナみたいな悪魔の實は

どっかで見たことあるんだよな。けど、他の悪魔の実の一つも見たことが無い…。
こんなの、どれを買ったら一番いいんだ？

「うーん。」

「なんで悪魔の実なんか買うんじや？中將は既に能力者だろ？」

「たしか将来有望な部下が出来た時用に買うって言うってたよお。」

「まあ俺だったらパツと選ぶけどな。」

外野がうるさいなあ…。あ。

「そうだ!!!」

「「おっ!?!」」

突然の私の大声に少將達が反応する。

いい案を思いついたぞ!!

「クザン！サカズキ！あのショーケースの中から悪魔の実を選んでよ!!」

「「… はい？（ん?!）」」

「私は悩みだすと永遠に悩んじやうから、君たちに選んでもらったやつを買うよ。」

「けど、悪魔の実じゃぞ?!選ぶのを人に任せてええんか!?!」

「いいんだ。選んでくれ。」

「けど、ルインちゃん、悪魔の実ってのは本当に一生問題だからな!?!やっぱり慎重に選ん

だ方がいいって!!」

さすがの二人も悪魔の実となると遠慮しがちな。だが、私が選ぶよりはいい。その方が面白い。

「じゃあ上司として命令する。クザン、サカズキ! このシヨーケースの中から5分以内に悪魔の実を一つずつ選んで私に渡しなさい。これは命令だ。」

「…………… こんなので命令する人始めて見たわ。」

「そうじゃのう。見たことないぞ。人の人生を変えるものを他者に選ばせる命令を出す上司は。」

そう言いながら二人はシヨーケースを眺め始めた。

さすがに命令となれば動かざるを得ないようだな。

〈続く〉

【悪魔の実市場】「後編」

クザン side

全く、前代未聞だろ。自分が買う悪魔の実を他人に選ばせる人なんて。…しかも5分以内で。

まあ命令だし、仕方ないか。

とりあえずショーケースの中にある悪魔の実を眺めてみる。まあ、もう食った側としては本当にどれでもいいんだが。

(…とりあえず、これでいいや。)

取ったのは下の段の真ん中辺りにあった実。黒色で…なんだろうな、この形、俺知らないわ。

早速取った悪魔の実をルインちゃんに渡す。

「適当に取ったけどコレでいいかい？」

「お、早いね。ありがとう！」

ルインちゃんが満面の笑顔でその悪魔の実を受け取ってくれた。

………
待って、キツいわ。萌え死にそう。

「おくクザンく。顔が真っ赤になってるよおく。」
「う、うるせえな!!ボルサリーノ!!」

サカズキ side

わしが悪魔の実を食った時は、何も考えてなかったから、普通に迷う。

クザンは今パツと取ったが、わしは少し考える。

… さっきのルイン中将を思い返すと、上の段の左から2番目の悪魔の実に少し見覚えがあるようにその悪魔の実を見ていた。つまりはその悪魔の実以外を選べと言っているようなもの。

そして、わしが一通り眺めた感じ、上の段の右から四番目にある悪魔の実が一番興味を持った。持ったと言うより、感じた引力が一番大きかったと言える。

なら、その悪魔の実を取ろう。

そうしてわしは悪魔の実を取る。

見た目は白いドリアンのような物、この悪魔の実は強い。わしはそう感じた。そうして取った実をルイン中将に渡す。

「…これでええか。」

「!!… おお、ありがとう。」

ルイン中将は少し驚いた顔をしながら受け取った。

「… なんじゃ。なんか不満でもあるか。」

「いやいやそういうわけじゃない。サカズキはもう少し考えてから選ぶ人だと思ったからビックリしただけだ。ありがとうな。」

「… 礼はいらん。」

ルイン side

二人が取ってくれた悪魔の実は対照的な色をしていた。白と黒。どんな能力が手に入るか想像もつかない。

白い方はドリアンみたいな形で、黒い方は見たことが無い形だ。おそらくこの世界にしか存在しない果物なんだろう。

まあせっかく選んでもらった（強制）からこの二つを買おう。

「おつ、その二つだね。じゃあ二億ベリー頂こうか。」

「はい、お願いします。」

私は持ってきた二億を商人に渡す。

「ありがとう。それじゃあそれらは君の物だ。良い能力である事を祈ってるよ。」
「ありがとうございます。」

よし、買い物も出来たし帰ろうかな。

「じゃあ、あつしも今この実を食おうかなあ。」

「お前、もう買ってたのか。」

「どんな実じゃ、見せてみい。」

「この場で食うのか!?それはちよつと良くないんじゃないか？」

「おい三人ともーご飯食べに行くぞ!!!」

そう言つて無理矢理三人を引つ張つていった。

【悪魔の実市場】から少し離れた路地裏に私たちはいた。

「……なんでこの場所に来たのさくルイン中将。」

ボルサリーノがここに来た理由を聞いてきた。彼としては二人が来た以上、実を食べたくてたまらないようだ。

しかし勿論理由はある。

「あの場で食つてもし能力が自然系ロギアみたいな最強種だったら、商人が後から追加で金とつてくる可能性があったからな。食べるならここで食べてもらおうと思つたんだ

よ。」

「ルインちゃんって案外現金な人だな。」

いやだって、本当に金取ってきたらどうする。買いたいものは最安値で買えるのが一番だ。

「……とにかく、もう食って良いよね。」

「まあ、良いよ。食べてみな。私も楽しみだからな。」

「……変な能力である事を期待しよう。」

クザンがひどい事を言ってるがおそらくそれは無い。あれは自然系^{ロギア}だ。間違いなく「それじゃア、」

そう言つてボルサリーノは持っていた実を一かじり。

「……………おエツ。」

「吐くなよ!？」

「しっかり噛んで飲み込むんじやア!!!」

「ムシャムシャ……………ごっくん……………能力者ってこんな物食ってるんだねエ。」

何とか食べきった様子の彼、私も地獄だったなあ。あの時は。いろんな意味で。

「……………で、どんな能力じゃ。」

「確かに、ポンコツ能力だったら笑ってやるよ。」

「……………。凄いなエエ。実って食ったら自然と使い方が分かる気がするよお」
 そう言ってクザンとサカズキの目にピースの形を作った手を見せる。

瞬間、その手の先が発光した。

「うオツ!!!」

「眩し!!!」

「…… やっぱり、ピカピカの実だな。おめでどうボルサリーノ。自然系だよ。」

「おお。うれしいねエエ。」

やはりピカピカの実だった。チート能力の類だ。あまり能力に頼りすぎにはなってもらいたくないが。

「…… なんじゃ、その能力。今とてつもない光を発したぞ。」

「…… 今ルインちゃんと言ったの聞こえたけど、ピカピカの実って言う代物らしいぞ。しかも自然系^{ロギア}。俺達と同じ最強種かよ……。」

「これであつしも、君たちの超人バトルに参加できるねエエ。」

まあ、これでやつと三人ともが原作通りの能力を手にしたわけか…… 今度ボルサリーノと戦つてみたいな。

「そーいやあもう予定はないけど、これからどうするつもりなんだあい。中将。」

確かに、予定より早く悪魔の実が買えたからなあ…… もうやる事もないな。

「… そうだな、まだ四時間もあるからな。どこかでご飯でも食べるか？」

「おお、いいなルインちゃん。」

「わしはもう一度手合わせしたいのう。」

「いややめろよここ訓練場じゃないんだし。」

「… あつしも能力使って中将と戦ってみたいねエ。」

「おいおい、中立のお前まで!!…… ハア。どうするよ……。」

私としてはどつちでもいいんだが。

「じゃあ「ドコオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!」…… ん？」

爆撃音が港の方から聞こえた。何かトラブルがあつたのか。

「…… あつしが見てくるよお。」

そう言った途端にボルサリーノは光の粒子となってこの場から消えた。

「…… 見にいかんでも分かる。おそらく襲撃じゃ!!!悪魔の実を狙った海賊の!!!」

「… あらら、どうやら飯に行ける様な事態じゃねエみたいだ。」

二人は一気に戦闘モードに入る。私も行かなければ。

「そうだな、じゃあ二人とも、港に行くぞ!!!」

「おお!!! (はいよ!!!)」

私達が港に着くとその爆撃で観光客や従業員がパニックを起こしていた。

「あらら、あの人ヤバいんじゃない?」

クザンがそう言つて指差した方向には怪我を負つた老人が蹲っていた。

私は急いでその老人に近づく。

「大丈夫ですか!? 一応簡単な応急措置は出来ませんが。」

「イタタタタ……いや、いいんじゃない。お主海兵じやろ? だつたらわしの事よりその騒ぎを起こした原因の男をなんとかしてくれ。海賊じや。今海軍の人が一人戦つてくれておる。その人の援護をしてやってくれ。」

「……分かりました。必ずこの騒ぎを止めて見せます! すいません!! 手のあいている人がいましたら、こちらのご老人の手当てを!!」

私の呼びかけに応じて集まってくれた人たちにご老人を託し、私はクザンとサカズキを連れ、戦場へ向かった。

私が戦場についた時、その配下らしき海賊の残骸が無数に転がっており、その海賊の船長らしき人物とボルサリーノが面向かっていた。

「今襲撃してきたのは失敗だったねエ。君等の海賊人生ももう終わりだよ。」

「何だテメエは!!!俺の仲間達を倒しやがって、殺されてエのか!!!俺の計画の邪魔をするってんなら承知しねエぞ!!!」

その海賊の頭は腰に刀を携え、頭には良くある海賊帽を被っている。

「俺は懸賞金3600万ベリーのミカツキだ!!!ここにある悪魔の実を全部強奪して大金持ちになろうって計画を邪魔すんなあ!!!」

ミカツキと名乗った海賊はボルサリーノに斬りかかった。

スパツと言う心地良い音と共にボルサリーノの上半身が切断された。

「「ボルサリーノオ!!!」」

サカズキとクザンは切断されたボルサリーノに声を上げる。まあ私は死んでないって分かってるから何の反応も示さない。

「へッ、俺の邪魔をするからこうなるんだ。」

「貴様ア!!!」

サカズキが飛び出ようとしたので私は大慌てで止める。

「何じゃアルイン中将!!!何で邪魔するんじゃア!!!」

「いや、彼は死んでないから、大丈夫。あの海賊の頭つぼいのは彼に任せよう。」

「いやいや、じゃあ俺達はどうするの。このまま黙って見てろって言うのか!!」

「いやそういうわけじゃない。頭の相手をボルサリーノに任せようって言ったんだ。私たちは奴等の船にいる船員達を潰しに行こう。正直言つて頭よりそちのほうがめんどくさいからな。」

「……分かった。」

いやー素直で良かった良かった。

ボルサリーノ side

あつしは今体を切断された。武装色はそこまで鍛えてなかったから死んだかなと思つたら、全く痛みが無い。

……凄いいねエ。こんなの普通だつたら泣き叫んでるのに。痛くもかゆくもないや。

ヒュンヒュンヒュンヒュン

……そして自動で再生する。いやー本^ロ自^ギ然^ア系^アって化け物じみているねエ。

「……ソレであつしを倒したつもりかい？」

「!!」

あつしが発した声にあつしを切った海賊はこちらの方を向き驚愕の表情を見せる。

「なんで、今斬った筈「反応するのが遅すぎるねエ」何!!?」

海賊が何か言っている間に光の速度で彼の頭上に移動し、かかと落としの体制をとる。

「光の速度を味わいなよお!!」

言ったとおり光の速度でかかと落としが海賊の頭に直撃。その海賊は言葉も発さず、びくびく痙攣している。

「… たかが3600万の男じゃア、話にならないよお。」

こんな化け物じみた能力を得る事が出来た。本当、ルイン中將には頭があがらないな。

「さて、後はあそこに止まってる船を破壊すれば良いだけかア。」

光だからあそこまで瞬間移動しても良いが、さつきサカズキ達を光で驚かした時に、手から光の粒子が飛び出しそうな感覚があった。

「……もしかして、ビームとか撃てるんじゃないかい？」

その船の方を一指し指を向け、先程より少し多めに光を出す感覚で光を発生させてみた。

すると一指し指が光り出し、その先から一本の光の筋が船目掛けて放たれた。

その光が船と接触下と思われた瞬間、大きな爆発が発生し、船のマストを破壊した。

「… 本当、化け物になっちまったねえ。」

なんだか、人ではなくなつたみたいだ。

ボルサリーノが船にレーザーを放つ少し前。

ルイン side

「なんだ、船長じゃねえぞ!!! 誰だ!!! テメエら!!!」

海賊船に上がってみると大勢の船員が私達に向かって銃を向けた。

「ああ、私は海軍本部中将ルイン。君達を捕まえに来た。… おとなしく自首すれば何もしないが。」

とりあえず救済措置も用意する。だが結局インペルダウン送りだが。

「誰が自首なんかするか!!! よしお前等やっちゃまえ。」

この船の船員が私たち三人に向け発砲する。しかし三人とも物理攻撃を受け流せる為、こんな攻撃、痛くもかゆくも無い

「ハア… 弱いな。」

「な、何で銃が当たたらねえ!!!… まさかこいつ等全員能力者か!!!」

銃に当たるのも痛くないわけではない。石を投げられてる感覚だ。

「……ここは俺がやろう。」

クザンが私達の前に出る。体の半分^{アイス}に氷を発生させて。

「氷河時^{アイス}」「ピユウウウウウウン……ん？ぐわア!!」

クザンがああ技を決めようとした直後、港の方から黄色い光が飛んできた。

その光はクザンの体に直撃し大爆発を起こし、船のマストを破壊した。

「なんじゃあ今の光は!!」

……おそらくボルサリーノのレーザーだ、クザンが氷の塊となつて爆発四散した。

「……なんで今日俺酷い目にばかり遭うの!!? ねえおかしくない!?」

本当、いよいよ同情するよ。今度何か良い物でも買ってあげるよ。

だが、今の攻撃で船員の大半が片付いたんじゃないか。そこに関してはナイスボルサリーノ。

「……な、なんなんだよ。なんでこんな目に遭うんだよ。」

「……ん、まだ生き残りがいたのか。」

この生き残りの海賊は完全に戦意を失っている……そんな人を無理矢理捕まえるのはなんか嫌だなあ。

「あーら、たまたま当たらなかったのか。」

「……じゃア、わしが燃やしちやろうか。」

「あ、あ……。」

グツグツ煮えたぎるマグマと、冷えた表情でその海賊を睨み付ける氷クザンにその海賊は失禁寸前だ。

「待て待て、二人とも。」

「なぜ邪魔をするんじや!!!」

「この人は戦意を失つてる。この人の処理は私に任せてくれ。」

さあ、話し合いの時間だ。

「……君がもし、二度と海賊行為をしないって言うのなら、見逃してあげてもいい。」

「!!何を言うとするんじや!!!中将!!!」

私の言葉にサカズキが怒鳴ってくる。大丈夫。私には秘策があるから。

「本当か!!!だったらもうしない!!!助けてくれ!!!」

「ただし、条件がある。」

「なんだ!!!助けてくれるのだったら何でもする!!!」

「じゃあ膝を突き目を瞑りなさい。私がもういいよと言うまで目を開いたらだめ。」

言われたとおり海賊は目を瞑った。私はその時に左手に炎を纏い海賊の頭に重ねる。

エンチャント・レフリースレイム
「付与・審判の炎」

左腕に纏った炎がその海賊に吸い込まれていく。

「はい、終わり。もういいよ、逃げても。」

「ほ、本当か!!!」

その海賊は逃げるようにして海賊船から出て行った。

「……ルインちゃん。何したの。」

クザンが私の行った行為について聞いてきた。

「あれは【付与・審判の炎】（エンチャント・レフリースレイム）。その炎を付与した相手の邪念を感知すると、頭から地獄の炎が発生してその人を焼き尽くす。」

「……!!!」

その言葉に少将二人は驚いた。まあ無理は無いだろう。この技は覚醒していないと使えないからな。

「……邪念つてスケベなこと妄想するのモ？」

「そう。」

その言葉にクザンは顔を青ざめさせ私から距離を取った。「それ、生き地獄じゃん……。」と言って。

「ハッハッハッハッハ!!!クザンお前一度【付与・審判の炎】（エンチャント・レフリースレイム）されてみい!!!すぐ燃え散る姿が目に見えかぶのう!!!」

「う、うるせえ!!! おいおいルインちゃん!! そんなの使えるのかよ!!? 全く勘弁してくれよお!!!」

「あつはつはつは!! クザンにはしないしない。そんなしょうもないことで死なれても困るしね。」

「面白そうな話してるねえ。あつしも混ぜてよお。」

「ああいいぞ... って、うわ!!」

いつの間にか私の隣に瞬間移動していたボルサリーノにビックリした。

「あつ!!! お前だろ!!! さっきのレーザーみたいなの!!!」

「あつしだけど、どうしたんだい。クザン。そんな怒った顔して。」

「お前の攻撃が直撃したんだよ!!! 全く、俺が自然系ロギアじゃ無かったら大怪我じゃすまないぞ!!!」

「ああ。直撃。ごめんねえ。クザン。あつしはまだ慣れてないからさあ。」

「コイツ人事みたいに言いやがって!!! あーもう何で俺ばかり酷い目に遭うんだ!」

「あつはつはつはつはつはつは!!!」

「笑うなよルインちゃん!!!」

あー面白い。クザン最高!!! 面白い反応するわ!!!

「あー面白かった... ボルサリーノ。能力はどうだった?」

まあ一生物だからね。気に入ってくれるといいが。

「：：最高だよお。速度も攻撃力も防御力も、どれをとっても隙が無い能力だねえ。本当この実を食べられる機会を作ってくれたルイン中将には頭が上がらないねえ。」

「だったら良かった良かった。」

案の定気に入ってくれているようで安心した。もし変な能力だったら一生根に持たれてた可能性あったから。

「：：なんか動いたら疲れたな。どこかに食べに行くか。」

「そうだな。なんか俺も腹減ってきたわ。」

「あつしはもう食べたけどねえ。」

「：：：。わし、今回何もしてない気がするの。：：。まあ、飯は食いに行くが。」

「じゃあ食べに行こう！腹いっぱい!!」

いい汗流した後の飯はどうまい物は無いからな。

番外編 『地獄の時間（ヘルズタイム）』

修行開始初日。私はいきなり地獄を経験する。

「ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…」

「この程度で息を上げているのか。ヘナチヨコだな。」

「いやだっておかしいぞ!!!なんで初日からこの島5周してその後スクワット100回、腕立て100回、腹筋100回なんてやらされるんだ!!!」

正直突っ込むのも疲れる。それくらいしんどい。あのサ○タマのトレーニングに島5周とか一般人の私に出来る訳無いじゃないか。

「そもそも、なんでロキ中将はピンピンしてるんだ。島5週に腕立てスクワット腹筋100回だぞ?!疲れないほうがおかしいって!!」

「…そりゃあお前、俺は慣れてるからな。」

「そんなのに慣れてたまるか!!!」

一日目でこの量とツツコミ。なんか耐えられる気がしない。

「…まあ、がんばれや。」

ロキ中将はそう言って私の肩に手を置く。まったく、何故私はこの人のところに来て

しまったのだろうか。

：： だけど、そんな規格外の人が私の先生：： いや師匠となるわけだ。改めて挨拶しておこう。

「ハア：： だが、これからご指導よろしくお願いします。ロキ師匠。」

師匠は目を大きく開き私の顔を見た。なんだ。私おかしな事言ったか？

「：： ああ、俺からもよろしくな、ルイン!!」

そう言う師匠の顔はどこかうれしそうだった。

翌日、再び昨日と同じ訓練内容。

「おい!! ペース落ちてるぞ!!! 走れ!!! もっと速く!!!」

「む、無茶言うな!!：： ハア：： ハア、き、きついく：：。」

やっぱこんなの慣れてる師匠はおかしい。

今日はキノコ採集に来ている。なんでも今日の夕ご飯の材料を採りに来ているらしい。

「あのキノコはワライダケと言ってな、食ったら笑いが収まらなくなるキノコだ。」

「ああ知ってる。ルファイが食べたキノコだった筈。」

「…ルファイ？誰だそいつは。」

「あつ…今のなしで。」

「…？」

良かった…なんとか誤魔化せたぞ。

【^{ヘルフレイム}地獄の炎】!!!

私は師匠が作った土の傀儡に向け炎を放つ。

「…ほお、昨日より火力が増しているように感じる。点数で言うなら70点って所だな。」

「な、70点か。私はもつと取れる気がしたんだが…。」

「フツ…甘いな。俺から高評価を貰いたければもつと自主練すべきだな。」

「む、むうう…。」

今日は島の奥の森に来ていた。

「この際だ。俺の能力の使い方を見てもらおう。」

「何故？」

「お前の新技の参考にしてもらえたらと思つてな。」

「おおー!!!」

それは有難い。最近アイデアが一つも浮かばなかったからな。

「じゃあいくぞ」

師匠は懐から銃の弾丸を取り出し、それを握る。

「【溶接】。」

そう言つた後握つた手をパツと開く。そこには握つた筈の弾丸が無い。

「そうだな、ルイン、あそこを見てみる。」

そう言つて師匠が指差した方向を見る。そこには野ウサギがいた。

「………… あ野ウサギには悪いが………… 【解除】」

「キイイ!!!…………」

「!………… え…………」

ウサギがぐつたりと倒れ身動き一つとらなくなる。

その原因を探す為に周りをキョロキョロ見ると、師匠の指先から煙が発生して
た。

「………… まさか、師匠、撃つたのか？」

「ご名答。溶接して体内に埋め込んだ物は解除した時に物凄いスピードで外に出ようとするんだ。これはその応用だ。……あのウサギは責任もって食ってやろう。無意味な殺生は良くないからな。」

……もし何の意味も無く殺したと言っていたら私は怒っていたかもしれない。

彼が仕留めたウサギに近寄る

【溶接】

そう言つて彼はウサギの腹に手を突っ込んだ。

その異様な光景に私はゾツとする。

「……な、何をしている。師匠。」

「ん、ああ、解体作業だ。ウサギの内臓とかを取つてるんだよ。解体作業つてのは基本だろっ。」

「いや普通道具使うから!?能力で引き千切るとかえぐい事するな師匠!!!」

私は盛大にツッコんだが、師匠は無視し解体作業を続ける。なんだ、感じ悪いなく。

「……………あ。内臓あつたぞ。」

そう言つて血でどろどろの内臓を見せ付けてくる。

「うわ!!!そんなばつちいもの見せるなあ!!!」

「ハハハ……………これぐらい見慣れとけよ。」

ヤバい…… そんな物を見せられたせいで生物なまもの嫌いになったかもしれない。

「はああああああああ!!」

「…… 遅いな……。だが昨日より速い。本当飲み込みが速いな。これなら5億ぐらいの海賊なら余裕で倒せる筈だ。」

「…… え、師匠が、褒めた!」

「…… お前、俺の事どう思ってるんだよ……」

修行開始から2ヶ月。ようやくお褒めの言葉をいただいた。【六式】とか【覇気】の鍛錬を今の限界まで鍛えてもお褒めの言葉は頂けなかったからな。

「…… まあ、これでやっと、連れて行けるようになったな。」

「…… はいっ。」

「…… 【飛將軍】 追跡任務だ。その依頼が俺んここに來ててよ。俺を含める將校二人以上が必須条件だったんだが。お前を連れて行こうと思ってたんだよ。」

「……」

何を言い出すかと思えば、どうかしてるのかなこの人。確か【飛將軍】って海賊王の

クルーだったよね!? そんなの相手に勝てるわけ無いじゃないか!! しかも何で私!? 私より強い奴なんていくらでもいるはずなのに。

「な、何で私を連れて行くんだ。他にも強い人がいっぱいいる筈。」

「お前がいいからだ。」

「え!!」

何だこの人。私を口説くつもりなのか!!? ……今の、ちよつと効いた。

「お前のその能力で奴を焼いたと言う話を聞いてな……もしかすればまだ鉄壁と言う事しか分かってない奴の能力に有利なんじゃねエかと思つてな。」

「あ……そうですか。」

なんだ。口説きに來たわけじゃないわけか。

「……? 何ガツカリしてるんだ?」

「…… 別に。口説きに來たとか思つてないし。」

「口説く? …… プツ。アツハハハハハハ!!」

「あつ、笑つたな!! 師匠!!」

「ハハハハ…… だつて、だつて口説くだぞ!! 出会つて2ヶ月で口説くとか!! どんだけチャライ男だよ!! …… アハハハハハ!!」

…… もう頭にきた。許さない。

行かないって言っても無理矢理行かせるんだらう。だったら
「ああ、行くよ。」

こうして物語は、【飛將軍戦】へと続く。

アラバスタ編

『竜』

「……で、【悪魔の実市場】で英雄扱いされてきたわけか。お前たち。」

「……その通りだ。」

今、私達4人はセンゴク大将に呼ばれていた……。昨日の件で。

正確にはボルサリーノが、だが。

「ハア……。ルイン。確かに功績を出せば昇格すると言ったが、出すの早すぎないか？」

「あ、ははは……。」

ホント、言われた翌日だったもんなあ。

「それで、なんであつしたちも呼んだわけですかいく。センゴク大将。」

「……わしらは何もしとらんぞ。」

サカズキの言葉にクザンは何回も頭を縦に振る……。なんか上司を避けてる感じがするなあ。

「……ボルサリーノ、報告によると、悪魔の実の力としか思えない技を使ったそうじゃないか。」

「まああつしは昨日、能力者になったからねえ。」

「……………やはりそうか。お前の性格上、悪魔の実なんて食べたならそれこそ訓練を怠る怠け者になると思つてあえて食わせなかつたんだが。」

そう言つて大将は私の方に向く。

「まあ、【悪魔の実市場】行きの手ケットは私が渡したから別にいいが、何故自分の部下でもないサカズキ達を連れて行つたんだ？特にサカズキとクザンは能力者だぞ?!」

「なんだ、貰つたんだから好きに使つていいだろう。それに何も、私が何も買つてないつて事ではないぞ。」

「何イ!!? どういうことだ!!」

私は手に持つ鞆の中から2つの悪魔の実を取り出す。何故持つてきたかつて？そりや家に置いておくところわいからね。ロキ中将が売りそうだ。

「これだよ、将来の部下の為に買つておいた。」

「……………確かに悪魔の実だな。見たことが無いが。」

「食べさせるのが楽しみだよ。」

「そうか、ならいい。」

「……………それより、俺等と呼び出すつて事は何か面倒な報告でもあるんじゃないの。セングクさん。」

「ああ、ボルサリーノの昇格が決まった。」

「何イ!!? (何じゃと!!)」

へえ。昇格が決まったって事は、私と同じ中将になるわけか。

「おおくあつし昇格するんだねえ。」

「……まあ重大な報告を上げるとすればこれだけだ。ボルサリーノはともかく、君等二人を呼んだのはこうした方がいいと思つたからだ。」

「…… やつてくれたのう。ボルサリーノ。」

「確かに、同期に先越されるのはいい気しねえな。」

「そう思うのだったら、さっさと功績あげてきなあ。」

「やかましいわ!!」

犬猿の仲とは思えないほどびったりなタイミングで同じセリフを言い、センゴク中将の部屋から出て行った。

「じゃあ、あつしはこれからどうすればいいんですか。大将。」

「ああ、今日は家でゆっくり休んでくれ。突然呼び出して悪かつたな。もう下がつてくれていいぞ。」

「了解。じゃあ、失礼しました。」

そう言ううと能力でこの部屋から消えた。やっぱり能力に頼りそうだなアイツ。

そうして取り残された私。…… まあ私も昨日の件の関係者だったから呼び出されただけだろう。だったらもう帰らせてもらおう。

「じゃあ、私も失礼し「ちよつと待ちたまえ」。…… はい？」

何だ、まだ何かあるのか。

「君には仕事が一入っている。」

「えー……。」

「何故嫌がる!!!」

「……この所休みと言う休みがないんだよ。修行が終わったと思ったら【飛將軍】と戦うわ、それが終わった直後にサカズキと戦りあうわ、昨日だってすばらしい休みが期待できると思ったら海賊来るわでもう休みが休みじゃないんですよ。」

「ま、まあそれは君のトラブル引き寄せ体質が原因と言う事で……。」

「いやいやトラブル引き寄せ体質とか。」

私は漫画の主人公か何かか!?

「まあそれより仕事の方の内容だが、君はアラバスタ王国と言う所を知っているか？」

「おお!!あの砂漠の国の!!?」

ビビのいる国か……。まだ生まれてないだろうけど。

「ああ、その国王のコブラ王が3ヶ月後の世界会議レヴェリエリの護衛にそちらの最近名を上げて

いるルイン中将を派遣してほしいと言っていたんだ。」

「……ご指名か……断ったらどうなる。」

「無論極刑だろうな。」

「分かりました喜んで行かせてもらいます!!」

最悪だ……断れば極刑だとか、逃げ場が無いじゃないか……

早速準備をしなければ。今回は長旅になりそうだ。

早速家に戻ってきた私は早速出発の準備を始める。

「えっと、コレとアレと……後は……」

「……何をしてるんだ、ルイン。」

「見て分からないかな。旅の準備だよ。」

「いやいや、何で旅の準備なんかしてるんだよ。」

そういえば師匠には何も言っていなかったな。とりあえず言っておくか。

「ああ、仕事が入ってきてな、ちよつと遠出する事になった。」

「……ちなみに、行き先はどこだ。」

私は鞆の中からアラバスタの永久指針エターナルポースを取り出し、師匠に見せる

「……………　　そうか、アラバスタへ行くのか、遠いが大丈夫か？」

「ああ、竜になって行くからそんなに時間はかからないと思う。」

「……………　　そうか。」

師匠はどこか寂しそうにそう言った。まるで大好きな主人が遠くへ行ってしまうのを見つめる子犬みたいだ。

「……………　　寂しいのか？」

「……………　　違エよ……………　　ただ、話し相手がいなくなるな、と。」

「それ、寂しいんじゃないか。」

「……………　　この話はもういいだろ、仕事なんだったら行ってこい。がんばれよ。」

そう言って部屋から姿を消す……………　　やっぱ寂しいんだろうな。私がいなくなる事が。

「……………　　よし、荷物は纏め終わった。じゃあ行ってきますか。」

新月の夜、夜道を歩く私を月光が照らす。まるで旅立つ私を祝福するみたいに。

… 半年近く此処にいた。まあまた戻ってくるが。

初めてマリolfordに来た時は見るもの全てに感動を覚えていたが、今では見慣れてしまったマリolfordの風景。月光が照らす町並みもまた美しい。

「しばらくここから離れるんだ。… 空から見えておこうか。」

私は【月歩】で空中へ飛翔する。空から見ると町全体に淡い光が籠っているように見える。

ふと視線を家に向けると師匠がこちらに向け手を振っているのが見えた。

… …、ここ、家から大分離れてるんだが、しかも夜。彼の目のよさは群を抜いてるんだろうな。

そう思いながら手を振り返す。

「よし… 行ってくるか」

私は竜となり空を駆けた。



空を飛んで何時間たっただろうか。もうすっかり日は昇り、太陽の位置的に正午近くだ。

このすがた
竜化状態で行けばすぐ着くと思っていたが、そんな事は無く。さらにこのすがた
竜化状態でいて分
かったんだが、燃費が物凄く悪い。そろそろ限界超えそうだ。

『そ、そろそろ島のひとつでも……ん?』

エターナルポース

前方に島を確認……。しかしアラバスタの永久指針はその島を差していないし、砂漠島であつても全体的に白いな。

だが体力が限界に近い。一度あの島に降りて休憩しよう。

私は急降下し、その島に向かって直進する。

『……あそこに白い岩で出来た建造物があるな。そこの近くに降りるか。』

ドラゴン side

私はドラゴン、世界政府を倒し、自由を手にするという目標に向け各国で暗躍する組織『革命軍』と言う組織を仕切っている。この白土の島バルティゴを本拠地として。

…今はまだ大した戦力ではないが、いつか必ず世界を変えてみせる!!

「ドラゴンさん!!!大変です!!!」

そんな自分語りをしているとおれの部下が物凄い剣幕をして入ってきた。

「何事だ。」

「そ、それが、空から紅い竜が下りてきました!!!」

「…何だと…!!竜?!!」

竜がこの大地に舞い降りたと言うのか!?

「今どこにいる!?!」

「それが、下り立った瞬間に炎に包まれ、その中心から一人の少女が出て来たんです。現在この本部にもてなしているんですが…。」

「分かった。すぐそちらへ向かう。」

竜から出て来た少女。実に興味深い。

ルイン side

「さあさあこちらへ！」

「竜から出てきたって言うのは本当ですか!？」

「竜……我等の自由の象徴そのもの!!」

「神が、神がこの大地。我等『革命軍』本拠地に舞い降りた……!!!」

体力の限界で下り立った島がまさか『革命軍』の本拠地だったとは……。しかも彼等の中では竜が神聖なる生物として信仰されているらしい。

……失敗だったな。もう少し海の方で下りるんだった。まあ、今更後悔しても遅いが。

「そこをどけ、お前達。」

ど、ドラゴンさん!!!

……どうやら、『革命軍』のトップが来たようだ。

「……君が、紅い竜から出て来たという少女かね。」

「… まあ、そうなるな。」

「…………… 能力者か？」

… 能力者か。まあそうなんだが、私が海兵である以上バれるのは非常に良くないな。ここは本当に神だと名乗っておこう。

「… 違う。私は竜神。この世界で言う神竜の一種だ。君達の言う紅い竜は私の本来の姿。この地に降りたのには訳があつてな。あの姿を下界で保つのは【神気】と言う神々の超パワーを使わなくてはならなくてな。その力が尽きそうな時にこの島を見つけたので体力回復の為に下りさせてもらったわけだ。」

おおおお!!!

… うん。まあ信じてもらえてそうだな。適当設定ぶちこんだだけだが… ドラゴンだけはまだにらみを利かせているが。

「我々は竜を神とし、自由の象徴として崇めている… 君が神だというのなら、一度私にその神々しい姿を見せてはくれないか。」

「ああ、君の部下におもてなしもしてもらったからな。それくらい良いだろう。外でな。」

さてさて、外にやってきたわけだが、物凄い数の革命軍団員に見られている。なんか服着替えるのを直視されてる感じでちよつと恥ずかしい。

まあ、約束だから竜にはなるが。

「〔竜化〕」

私の体から紅い炎が発生し、徐々に竜の形に変身していく

おお!!! 本当に竜になった!!!

我々の信仰対象……!!

う、美しい!!

私の竜化状態このすがたに対する感想、評価が飛び交っている。まあ気分は悪くないな。むしろうれしい。

「……!!! 本当に竜になるのか……!!」

『ああ、竜化状態このすがたが私の新しい姿。神竜種の中でも最強の竜である『幻竜種』だ。つておい、聞こえているのか?』

ドラゴンは私を見たまま動かない。おそらくこの姿に圧倒されているのだろう。何も耳に入らない状態の様だ。

「…………… 神よ、どうか我々の話を聞いて欲しい……!!!」

何か彼が自分の世界に入りはじめた。まあ神って言うのは自分から言ったからな。

仕方ないな。話を聞いてやろうか。

『……いいだろう。』

「我々『革命軍』は自由を求め、世界政府を直接倒すため、各国の王に接触し、既にソルベ、カマバッカ、アラバスタの王に接触し、革命の思想を植えつけて参りました。…世界政府は最終的に【古代兵器】を蘇らせ、この世界に住む民族全てを支配するつもりです」

『ほほう……つて、え!?!アラバスタ!?!』

待て待て待て待て、確か原作じゃあコブラ王は民のことを第一に考えている名君だった筈。…革命の意思なんて一切見られなかったんだが。しかも世界政府つて【古代兵器】蘇らせるつもりなのか。

……… こんでもない事を聞いてしまったな。一国の王が革命軍の思想に染まっているなんて話がこちら側バレたらこんでもない事になるぞ。

少し動揺した私の心を沈め、何とか平常心に戻した私は、ドラゴンに問いかける。

『…では聞くが、コブラ王はこの所、何か動きを見せたか。』

「はい、彼は我等の敵である世界政府に最近、頭角を現し始めた『ルイン』と言う海兵を暗殺すると言う連絡が入ってきました。」

『!!』

私を暗殺!?あのコブラ王が!?

『……………何故暗殺するという結論に至った。』

「…我々の野望の敵となるからです。各国の王には既にその海兵の情報が知れ渡り、白ひげ同様世界を揺るがす力を持つ海兵として恐れもされ、期待もされています。……………いつか起こる大きな戦いで衝突するおそれもある。なら、今のうちに息の根を止めておくことでいつか必ず起こる大海賊時代史上最大の戦争でかかる負担を少しでも減らすのが我々の目的です。」

……………私と白ひげが同等扱いされているのか。世界を揺るがす力なんて持った覚えがないし、何より何故こいつ等は私がルインだと気付かない。普通各国の王になら私の能力も知れ渡っていると思うが。

『聞くが、そのルインという海兵について、王が世界政府に聞かされていることは何だ。』
 「はい、『ルイン』は海軍に入隊して半年で海軍本部中將にのし上がった海軍史上最速昇格記録を持つ女海兵、見た目は10代後半、霸王色の覇気の素質を持ち、覇気が未熟な状態である【飛將軍】と互角に戦ったと聞いております。能力は世界會議^{ヴェトリ}にて公開されるそう。まだ世間一般には知られていない海兵です。」

成程成程、私を過大評価しすぎだな、五老星。照れるじゃないか。

……………そんなことよりだ。『革命軍』はこの先必ず敵となる『私』を消そうとしていると

言う最悪な情報を手に入れた。能力が知られてないのは不幸中の幸いと言うべきだろう。なら、こうしよう。ドラゴンたち『革命軍』は私のことを神だと思っている。…だが今知れてよかった。これはチャンスだ。…!!!
『：：なら神としてお告げをしよう。』

おおお!!!

我々に、遂に：：!!

う、美しい：：！

『今はまだ、牙を剥く時ではない。仮にそのルインとやらを殺せたとして、海軍上層部、世界政府は必ずその原因を洗いざらい突き止めてくるだろう。そうすれば今はあまり名の知れていない『革命軍』と言う組織の存在が世間に広まる事になる。そうなればドラゴン、お前の「自由」を手にするなどという野望は遥か彼方へと飛んでいつてしまふ。：：今、政府を直接倒そうとする『革命軍』の存在が政府にばれたら指名手配犯になること間違いなしだ。なら今は『革命軍』が政府に勝てるほどの戦力を持つまでは自分からちよつかい出すような事はよしておけ。』

「ああ、神が我等にお告げを。…!!!分かりました。そのように。…おい！お前達!!コブラ王に『ルイン』の暗殺計画を中止するよう言っておけ!!!」

はい！ドラゴンさん!!

「……勝ったな。もうちよつかいだされる事がないだろう。これで安心してアラバスタへ行けるといふものだ。」

私は竜化状態から元の姿に戻る。

「……じゃあ、今日一日泊まっても良いよな?」

「はい、神よ。おおせのままに。」

……ちよつと罪悪感あるが、まあいいか。

ドラゴン side

竜。

我等の自由の象徴。

天駆ける竜のごとく自由に向かい一直線に向かう我等にとうとう現れた本物の竜。

おれは彼女を神と呼ぶ事にした。

能力者などと言う偽者ではなく、彼女の姿は本当に、古の竜そのものなのだから。

あの時代に起こった『自由戦争』^{ザ・ウオーズ}の先導者『ジャンヌ』と同じ姿だったのだから。

「で、私はどこで寝ればいいんだ？」

「神はこちらへ。最高級のベッドでおやすみくださいませ。」

「あ、ああ。」

神は若干引いてる顔をしながらおれが案内した部屋へ入った。なんだ、おれはなにかな変な事でもしたのか。神に対してこれくらいのおもてなしはむしろ当たり前だと思っただけだ。

「……ドラゴン。」

「……なんだ、イワ。」

「あんなのを神と思っちゃっていいの!? ヴァターシは思うところあるんだけど。」

「何だと!!! イワ貴様!! 我等が神を何だと心得る!!!」

イワ、心外だ。実に心外だよ。

「……あの顔!! コブラがヴァターシ達に送ってきた『ルイン』の顔写真と一致するツキヤブルのよ!!! アレはおそらく海軍中将『ルイン』だわ!!!」

「……何だと……!! 我等が神が、『ルイン』……!!? そんなわけが無い!!!」

おれがそう叫ぶとイワが慌てておれの口を押さえる。

「大声出すなツキヤブル!!! これを見なさい。」

イワは懐から一枚の写真を取り出し、おれに見せる。

「……バカな……!!」

その写真には神と全く同じ顔の海兵が写っていた。

「……………で、どうするのよドラゴン。このままあの女をここに泊まらせるワケ!?!」

……………おそらく、イワの言う事は真実。神は海兵だ。そうなると昼に我等

にあのお姿を見せる理由が無い……………神が敵にわざわざその力を見せるのか?

「……………おれに考えがある。これはここにいる『革命軍』全員に報告せよ。」

翌日、アラバスタに向け飛び立つ私は『革命軍』の隊員達に囲まれていた。
：私を殺そうとしていた奴等が私を見送るなんて滑稽な話は中々無いな。だが、泊めてもらったからお礼はしておこう。

「ありがとうな。君達には感謝してるよ。」

「恐れ多い!!!我等が神にお礼を言われるなどとは!!!」

本当、騙している感じで悪いな。

「……神よ。」

「……何だ。」

「……旅先で怪我をすることの無いよう願っています。」

最初殺そうとしていたのに、なんて優しいんだ……って、この人たちは私が『ルイン』だって知らないんだったな。

私は回復した力で竜の姿へと変身する。

「……ところで神の名は、『ルイン』か？」

『!!!』

ドラゴンが発したその言葉に、私は大きな竜の体をビクツと震わせ反応する。

私のその様子に『革命軍』隊員全員が驚いていた。

『…いつから分かつていた。』

「やはりそうか… 昨日の夜からだ。…… 我等の情報を、存在を、世界政府にばらすのか…!?」

彼等の情報を世界政府にか。

『…… たとえ君等に私の正体がばれたとしても、君等の存在をばらす事は無いよ… 泊めてもらったし、おいしいご飯まで頂いたんだ。そんな事、私にはする権利が無い。』

「… 本当か?」

『ああ! 私はこう見えて口は堅いんでな。約束するよ。君等の情報は決して海軍には漏らさない。』

私はそう言つて人間状態に戻り、ドラゴンの方へ近づく。

「小指出せ、ドラゴン。」

「あ、ああ。」

ドラゴンはおずおずとした感じで小指を出す。私はその小指と自分の小指を重ねる。

「指切りげんまん嘘ついたら針千本飲ます!」

「… え、え… え!!!」

ドラゴンは三種の表情を見せた後、フードで顔を伏せ、そのまま動かなくなる。
 おおお!!
 ヒュー!!!

シーフフフフ… やるわね、あの子…

外野から様々な声が聞こえてくる… そういう意図でやったわけではないが。

「これはな、約束の証明だ… もし私が約束を破ったら君達のとこに行つて死んであげ
 る。」

そう、『革命軍』には大きくなつてもらいたいと言う私自身の願望もある… 海軍に
 なんて報告するわけない。

「な、わ、我等はそんなつもりで言ったのでは…。」

「あーそれとたまに遊びに来るから。ココ、私が一人で始めて来た場所だし、言い人多い
 し、なにより、私の野望と似た考え持つ人多いし。ココの永久指針エターナルポースちようだいよ。」

「あ、ああ。これだ。」

そう言つて永久指針エターナルポースが投げ渡される。

「それじゃ、また来るねー。」

私は竜の姿に変身する。

「ま、待つてくれ!!」

『何だ？』

「神の持つ『野望』とは一体、何なのですか!!？」

私の考える野望、それは

『種族、身分の差、それらを無くし平等な社会を作る。それが私の野望。』

そう、かつて私が住んでいた日本のような美しい世界。そんな世界を……いつか。

……なんてのはただの口実で、どうやったら彼等が落ち込まず、かつ私がさつさと

アラバスタに旅立てるか考えてました。まあ『革命軍』の情報にはばらさないが。

だつてこうした方が彼等に納得してもらえらると思つたし、何より平和に解決できると

思つたからだ。

「……ああ、女神よ……!!!我等が女神よ……!!!どうか、どうかご無事で……!!!いつてらつ

しゃいませ!!!」

うおおおおお!!!女神メシアよ!!!!!!
いつかまた来てくださいー!!!
我々はいつでも歓迎しますからね!!!

何かと罪悪感を感じながら、私は島を出た。

色白少年

コブラ side

「……何だと、ドラゴンが『ルイン』の暗殺計画を中止すると言ったのか!!」

「……そのようで、国王様。」

どうしたと言うのだ。あれだけ「我等の敵となる力は今のうちに消す。」と言っていた奴が。その敵となる『ルイン』を消さないと言い切るなど、ありえん。

………何か理由があるはずだ。おそらく、ドラゴン本人が『ルイン』と接触した。みたいなの……まあ、そんな訳無いか。バルテイゴは世界政府にも見つかっていない秘境だからな。

……私は『ルイン』を暗殺しておくべきだと思うが、ドラゴンの意思是『革命軍』の意思。私がおの意思に背ける筈も無い。

「ハア……それでは敵である世界政府から『ルイン』を呼んだ意味がないではないか。なあ、イガラム。」

「ええ、ですが国王様……もう一つの報告がございます。」

……報告?

「……ドラゴン殿からの報告によりますと、その『ルイン』と言う海兵がバルティゴに体力回復の為に竜の姿で下り立ち、一日総本部で泊まっていたそうです。」

「何だと!!?」

「今この国に直進しているとの事で……おそらく『ルイン』には我々が暗殺しようとしていた事がバレていると思われれます。」

「……なにそれ、終わった。『ルイン』がココに来たら、我々は殺されるのでは……」
「国王様、お気をしつかり!!国王様……!!」

イガラムの言葉を最後に、私は意識を手放した。

ルイン side

エターナルボイス
永久指針が目の前の島を差している……ここまで来るのに面倒な事があつたが、どうとう辿り着いたのか。

『おおおー!!!……あれが『砂の国アラバスタ』かあ!!』

上空から見ると砂漠。そして海につながる川があり、その付近に人が住んでいる町のようなものがいくつか見える。そして、その町の奥の方に一際豪華な町と宮殿があ

る。コブラ王はおそらくそこにいるのだろう。

この姿のままその宮殿の方まで行きたいが、そうすれば町民達を驚かせる事になる。仕方ない。ここらで解除しよう。なあに、落ちはしない。私には「月歩」があるからな。

『【竜化解除】』

さあ、行つてみよう!!!

とりあえず、海沿いの町の近くに「月歩」で下り立つ…。これで誰にも見られずにこの国に到着だ。海軍のコートは宮殿に入った時に着ればいい。さて、私は「ONE PIECE」の地理にはあまり詳しくないから、海沿いの町に寄つてアラバスタの地図を買う必要があるな…。とりあえず行つてみるか。

「あ、あ…!!!」

後ろから声があった。私はそちらの方に振り向く。そこには色白で民族衣装のような服を着ている少年がいた。その少年は恐怖に染まった顔で私の方を見ている。おそろく竜の姿の時から私を見ていたのだろう。でなければこんなに怯えた顔をするはずが

無い。

「……見たんだな。あの姿。悪かー！う、う……うわあああああああああああああ
ああ!!!」……ちよつと待って！逃げないで!!」

「く、来るなあ!!!化け物!!!」

そう言つて少年は町の方へ走つていった。

「……化け物、か。」

能力者つていうのは武勇伝や書物、成果の上でこそ英雄ヒロロになれる者。こうして直にその能力を見られてはただ恐れられるだけ。

……町に行つたら、私はどんな目で見られるのだろうか……恐いなあ。

……

町に着いた。豆腐みたいな形の建物が無数に建造されている。たくさんの商店も並

び、賑わっている。ここなら地図売ってそうだな。

適当に町をぶらついてみる。飲食店、服屋、雑貨屋……いろいろあるが、どれも必要ではないもの。

……でも、服装はこつちの物にしておいた方が良いのか？……少年に見つかっているから意味がないかもしれないが……周りも私を見ても驚いた様子はないし……

……でも万が一あの少年に見られた時の為だ。買っておくことにしよう。

服屋に入るとそれらしき服はいっぱいあった。だが、服の種類が多すぎる。

「うーん……。どれが一番無難な服装なんだろうか……。」

……服つて中々選ぶの難しいんだな……店員さんに聞いてみるか。

そう思い、私は辺りを見渡す。ちょうど暇そうな女性店員を見つけた。私はその店員に尋ねる。

「……すいません、アラバスタの民族衣装つぽいのを買いたいのですが、どれが一番無難ですかね。」

その店員は私を見た後、

「……へええ、お客さん、外国の方かい……よし、アタシが一番無難な服装を選んでや

ろう!!」

「あ、あの、ちょ…… ひっぱ、ひっぱらないで……。」

私は首元を捕まれ引つ張られながら店の奥へ進んだ。

「一番下にブラジャーとロングスカート。その上に耐熱用にマント等を着る……。まあ、これぐらいが無難だとアタシは思うがね。」

一通り着てみた衣装を鏡で見してみる。

……なかなか良いな。この服。これなら目立たないと思うし、何より似合ってる気がする……。これ買おう。

「気に入りました！これをください!!!」

「あい、わかった！セットで1万6000ベリーだよ!!」
ぐっ… 中々良い値段しているな…!!

「… もうちよつと値下げは「ウチは値下げなんてしない。そんなことすると不公平だろ?」…。」

ド正論を言われ、何も言えなくなった私はおとなしく定価の1万6000ベリー支払った。

「ありがとうねエ！また来てよ!!」

「またこの国に来る機会があれば…。」

… さて、本題の地図を探さなければ。この服装なら目立つ事も無いだろう。
地図なんてどこに売ってるのか… 日本だったらスマホでどうにか買ってたもん
なあ。

「… 仕方ない。色々見てみることにしようか。」
言っても可能性がある所だけだな。

！
…

…
…
…

…
…
…
…
…

まず、結論から言わせるとどこにも無かった。無かったのだが…。

「さ、さつきは逃げてしまったが!!僕も立派なアラバスタ兵の一員としてこのままお前を見過ごすわけにはいかないんだ!!!」

…
この通り、私が下り立った所で会った色白少年と街中でばったり会ってしまった

わけだ。この反応から彼は私を敵だと思い込んでいるようだ。まあ立場上敵ではあるが。しかも彼が街中で叫ぶものだから人の視線が痛い。

私が竜になれるという事実だけは絶対に言われてはならない。

「お、落ち着け少年、私は君達の敵ではない。」

「嘘をつけ!!敵ではないのなら船で来るだろ!!なぜあんな姿で来る必要がある!!」

その一言に周りにいる住民達は私の方を見ってくる。

……まあ、それはそうだが、あいにく私には飛行能力があるからね。船なんて要らないわけさ……なんて、言える訳が無い。ここは頭を使うか。

私は即座に表情を作り、感情の籠った声で言う。

「……皆さん、違います。私は漂流してきたのです……とある商船でお手伝いをやらせて頂いていた訳なのですが、その船長さんにお前に出す金はない、と言われお金も何もない状態で海に放り出されました……。私は元々泳ぎが下手で、たまたま浮いていた木材につかまり、波に流されていたところこの島を発見し、上陸したわけでございます。」

なるほどお……。

……可哀相なお方ね。

グスツ……わし、泣けてきた。

… 同情される作り話を即興で作れる私って天才か？

「…!!皆さん!!彼女は嘘を言っています!!騙されしないで!!」

色白少年は私の言葉に反論する。だが甘いな。私には勝てない。絶対に!!!

私は目尻に涙を浮かべ、すすり声を上げながらその場にしゃがみこむ。

住民達はそんな私を見て

… ペル!!お前はこんな残酷な日々を送っている彼女になんて事を言うんだ!!

あなた、最低ね。

… ギルティ 罪じゃな。今のは

「なんでそうなるんですか!!!この人はりゅ「うわあああああああああああ!!!」…!!」

!!

危ない… 危うく言われそうになった。

… 見た目年齢17でもこどもみたいに泣き叫ぶ私。日本でやれば間違いなく変人

扱いだが、ここはアラバスタ。状況が状況。こうなれば私は無敵!!

… どうだ、周りの人たちの反応は…

目をチラツと覗かせる。

…

「あ…え、その…」

周りの人たちは私をジツと見ている。その目は私にそれはないわとでも訴えかけてくるような目だ。

… あれ？おかしいな。クザンとかはこれで大体いけるんだが…。

「……………」

私と色白少年は互いを見つめあう。

「…なあ、色白少年。」

「……………なんです。」

「どうしようか、この空気。」

「それはこっちのセリフですよ!!!どうするんですか!!!」

「いや、私はあれでなんとかなると思っただ。私の仕事仲間は大体これで通用するん

だかな。」

「ただだけチヨロいんですかその人たち!!!」

「いやいや、この世の中の男は皆こんなもんさ。」

「そうであつてたまるか!!!」

… 中々良いツツコミするな色白少年、私の部下に欲しいくらいだ。… スカウトす

るか？

… いや、今はそれどころではないな。早くこの場から去らなければ。

そう思い、私は立ち上がり色白少年に手を差し伸べる。

「…：… なんですか。この手。」

「掴まれ、これ以上大事になる前にここから離れよう。話はそれからだ。」

「…：…：…：…」

少年は黙って私の手を掴んだ。さて、どこへ行くかうか…：…

勧誘

ルイン side

私は色白少年を連れ、人目のつかない所まで移動してきた。

「… さて、少年。どうする。」

「どうするって言ったってあなたが僕を連れ出したんでしようよ!!!」

やや興奮気味の少年、それもそうか。彼からしたらいろいろ起こりすぎて頭の整理が追いつかないのだろう。まあ私はもう慣れてしまったが。

「とりあえず、自己紹介しようか。私はルイン。君がさつき見た竜の姿は私の能力なんだ。驚かせてすまなかったね。」

「… !!能力者…!!!」

私が放った能力という言葉に食いつく少年。少年からしたら能力は珍しいんだろうな。

「… 僕は、ペル。僕も悪魔の実を食べた能力者だ。」

!!!

今度はこつちが驚かされた。悪魔の实の能力者!!?こんな小さい子が…!!?
しかも、ペルって名前に聞き覚えがある。確か「アバスタの守護者」…って原作ア
ラバスタ編で大活躍する人じゃん!!

「… 本当か。」

「…:…:… はい、僕はトリトリの実モデル ファルコン 隼を食べた、隼人間です。」

そう言つて彼は自らの姿を隼に変える。本物だ。コレは…:…!!!

…:… 確かペルって忠誠心が物凄く高い男だった筈。この年で海軍学校に入れたら、将
来必ず強い海兵になるな。

…:… よし、原作に多少変化が出るかもしれないが誘つてみるか。

「君は、海兵に興味あるかな?」

「…:… 海兵、ですか。興味はありますよ…:… でも、なぜ今海兵の話なんか…:…」

「君を海兵に誘いたいんだよ。」

「…:… えっ…:…!?!」

「私はこう見えて海軍本部中将。最近上げた手柄と言えば【飛將軍】と戦りあつた事と、
ロジャー海賊団最後の戦いの『紅色の乱』でロジャー海賊団を殲滅しかけたことかな。」

「：：なぜ、そんな大物が僕を海兵に？」

まあ、私が彼を誘う理由としては二つ、一つは原作で己の身を呈してまで国を守ろうとした姿に感動したこと。もう一つは、

「：：つけていたね？私のこと。」

「!!」

ペルは驚いた様子でこちらを見る。

「私が町へ向かう時、君は岩陰に隠れずつと私のことを観察していた。いや、私が何か事件を起こさないようにずつと見張っていたの方が正しいか。町で私が買い物している時まで尾行し、その行動から私が行く道の奉公を予測して、私と偶然出会ったかのように見せる為にわざわざ私が向かう方向まで遠回りし、私が向かう方向から私の方へ歩いてきたわけだ。違うかい？」

「：：その通り、です……。」

おっと、もうちよつと言い返してくるかと思つたが、そこは素直に引いてきたか。

「でも！何で僕があなたをつけていたことがわかつたんですか!!」

「：：直感かな。」

本当は見聞色に引つかかっただけだが。さつき語つた話は彼の原作上での性格を考へて言つてみたら当たつたつて感じだな。

「…… さすが中将だ。バレていたなんて。」

「まあね。そんなことより、私が君を海兵に誘った理由だ。」

「…… 何ですか。」

「君は私と町で出会った時に、こう言った。「アラバスタ兵としては行かない」と。」

「…… それは何ですか。」

「…… あの場に居合わせた住民からするとただの変人にしか見えないかもしれない。だが、私のあの姿をみても尚、恐怖心に負けることなく私に立ち向かうその勇気を、私は評価したわけだ。いくら正義の海兵といっても、私みたいな化け物に立ち向かう勇気はそう無いと思うからね。あの時の君は『ヒーロー』だったよ。」

「ヒーロー…… !!…… 僕が…… !!」

ペルは体を震わせている。その震えは喜びからくるものだろう。

「…… どうだ、海兵になる気はないか？」

私は改めて問う。彼に海兵に入る意思があるかを。

「…… 残念ですが、僕はアラバスタ兵なので……。」

「…… そうか、アラバスタ兵か…… 待てよ、もし彼をアラバスタ兵じゃなくしてしまえば彼は入ってくれるかもしれないのではないか？」

意思を聞いておいて何なのだが聞いてみることにしよう。

「じゃあアラバスタ兵じゃなきゃ入ってくれるのか？」

「!!… それは、そうですけど…。」

「そうか、言質はとつたぞ。」

「… え？」

やることは決まった。世界会議レヴェリーの護衛もあるが、私にとつて一番にやるべき事が!!

「… 今から宮殿に向かう。そこで国王から許可を貰うんだよ。」

「… 許可って、まさか…!!」

「ああ、そのまさかさ。ペル、君をアラバスタ兵を辞めさせ、海兵に入れる許可を国王か

ら貰う!!」

「ええええええええええええええええええええええエエエ!!!」

さて行くか! 宮殿へ!!!

「… とところでペル、宮殿ってどこかな？」

「いや宮殿の場所知らないんですか!!… 締まらないなあ。」

隼の気持ち

——アラバスタの夜は寒い。かの極寒の地『未来国バルジモア』に劣らない寒さを誇る。

「……さ、寒いです。」

「そうか？ 私は平気だが。」

「……あなたは炎ですからね……。」

宮殿に行くのは夜にした。理由としては私が能力を使うのを町の人たちに見られないから。王には見られるかもしれないが。

……それにしても、夜のアラバスタはこんなにも雰囲気が変わるんだな。まるで枯れ果てた土地のようだ。

「まあ、私が竜になれば大丈夫だ。私の体から発する炎で寒さも消え失せるだろう。」

「そうなんですか…… だったら早くなくてくださいよ。」

急かされたので竜化することにする。

「……ちよつと離れるんだぞ、【竜化】」

毎度のように私の体は炎に包まれ、その炎はどんどん肥大化していく

私の竜化は炎が肥大化している最中にその炎の中で竜の姿が形成されていく仕組みになっている。外から見れば多分、太陽みたいな火の塊がどんどん大きくなっていく感じだと思う。

そして完全に竜の姿を形成し終わると、私を包んでいた炎が全て私の中に吸収され、その姿を露にする。

「……お、おお……凄い……」

ペルが感嘆を漏らすほどの姿。私自身竜の姿は気に入っているからな。褒められるのは悪くない。むしろうれしい。

『そうか！凄いかこの姿!!』

「ちよつと！その姿ではしゃがないでくださいよ!!なんか物凄く台無しですよ!!」

ちよつとテンションあがっただけでこの言われ様。薄々感じてはいたけどペルって友達とか出来ないタイプなんじゃない？私に対する反応がドライすぎる。

『ペルも速く鳥になれ。もしかしたら私の炎に町人が気づくかもしれない。』

「……ファルコンですよ。言い直してください。」

……
めんどくさいな、ペルって。

——今現在、宮殿に向かって飛行中、大きい私の体の下にコバンザメのようにペルが沿っている形だ。

「：：：夜に飛ぶのって初めてですよ僕。」

「：：：そうか、私はここに来るのに一度徹夜したが。」

「ええ！大丈夫だったんですか!!?!じゃあ今その姿になつてのつてキツかったりします？」

『流石動物系の能力者だな、だけど大丈夫だ。ここに下り立つ前にある島に寄り道してな。そこで一泊させてもらつてるから体力にはまだ余裕がある。』

「へえ……!!!」

ペルが興味ありそうに相槌を打つ。：：：まだ宮殿につくまで少し時間があるからな。何か話をしてやろうか。

「：：：私はな、物心ついた時には無人島にいた。：：：多分、親に捨てられたんだろうさ。死ぬかと思つたよ、けど幸いその無人島には果物がたくさんあつたからね。なんとか生きていく事は出来た。そんな生活を続けていた時に私は海軍に拾われた。生きる意味を貰つたといつても過言ではないな。』

「：：：それって昼の作り話の続きですか？」

… まあ、半分本当で半分作り話だな。

『いや違う、本当の話さ。』

「そうなんですか!!?… てつきり昼の話の続きかと…」

『まあ、そう思っても仕方ない。私からすれば本当に作り話のような人生だからな。』

「ハハハ、本当ですね。……… じゃあ僕もちよつと話しましょうか。」

『… ああ、聞きたいな。』

ペルの幼少期とかどうなんだろうな。まあ今も子供だけだな。

「… 僕はナノハナで生まれました。さつき居た町のことです。父はレインベースでギャンブルばっかしてて、母はそんな父に嫌気が差して出て行きました。… 僕を置いて。」

『…』

… 悲しい話だな。私ならその時点で精神が狂っててもおかしくない。

「悪魔の実もその時に食べました。父が僕に無理矢理食わせて売り飛ばそうとしましたね。悪魔の実はそのままの状態で売ったほうが絶対高いのに。だけど僕は売り飛ばされる前に能力で逃げ切りました。はるか上空まで飛んで。」

『…』

「… その時から、僕は誰も信じれなくなりました。… だけど、僕は夢をあつたんです。」

「人を守る」と言う夢が。その夢は父に売り飛ばされそうになった時、消えかけましたけどね。けど、その夢もなくなってしまうえば僕は何の為に生きているのかわからなくなる。だからアラバスタ兵に入りました。見習いですけどね。あ、能力は見せてないですよ!」

……
強いな、心の芯が。

「……すいませんね。こんな暗い話をしてしまつて。」

「……強いな。本当に強いよ、君は。」

「……え」

『そんな残酷な過去があつたというのに、折れることなく人を救う道を選んだ。普通なら自殺していると思う。……よくがんばつたな。ペル。私が言えたものではないが、よく頑張つたな、ペル。』

「いや、止めてくださいよ…… 褒められるようなことじゃないですし」

『それは違うぞ、ペル』

「……え」

『お前の言うそれは、誰でもできるわけじゃない。今言つたばかりだろう、普通なら自殺してるって。』

「……な、何を……」

『お前は間違いなく強い子だ。だって諦めてない、自分の夢を。今までずっと自分を曲げずに生きてきたんだ。』

「……………」

『それなのによく感情を抑えて生きてきた。よく我慢した。…辛かっただろう。寂しかっただろう。…誰かに、甘えたかっただろう。』

「…う、ううあ…ひぐつ…えぐつ…」

『出しているんだよ。今は誰も、君の涙を笑いやしない。』

「う、う、ううううああ…うああああああああ!!!!!!」

泣かせといてやろう。溜まった思いは一度出しておかなければいつか溜め込みすぎて壊れてしまう。

お前のその涙は、誇るべきものなんだ。

小さい頃の話をするのは、一瞬戸惑った。同情されるのが怖かったからだ。

だけど、話すことにした。この人は決してそんな事はしないと書いたからだ。理由は無い。ただそう思った。

話していくたびに母の真つ赤な顔。父のゴミを見るような目を思い出した。もう一生記憶から消えてくれないであろう地獄がフラッシュバックした。

……それでも言い切った。人に自分の過去のことを言うなんて初めてだし、言うのなら全て言い切つてやろうつて思った。

……何故かすつきりした。本当は口にも出したくない過去なのに、何故だろうか。だけど同時に後悔もした。同情されるかもと思った。さつきは彼女がそんなのするわけないと思つて話したのに。後から思つてしまった。

けど、彼女は予想外な言葉を言った。「強いな」、「よく頑張つた」と。

その言葉を聞いたとき、心がズキツとした。なんでかな……。そういえば、と僕は褒められたことが無いのを思い出した。

それを話すと、彼女は僕を褒めだしたんだ。褒められる度に心に深く巻きついていた何か解けていくような気がした。

—邪魔なのよアンタ!!!

—お前の面を見せるなア!!!次見せたらぶつ殺すぞ!!!

——あたしはもう出て行く。——アイツを思い出しちまう……お前の顔を見ると
よオ!!!

——食え!!! さつさと食って飲み込めクソガキ!!!

——逃げんなア!!! お前は金になるんだよオ!!!!

……駄目だ、

『よく夢を持つて生きてきたな』

『よく感情を抑えて生きてきた。よく我慢した。』

『つらかっただろう、寂しかっただろう。』

……駄目だ……!!

『……誰かに、甘えたかっただろう』

この人は、僕が一番欲しかった言葉をくれたんだ

『出しているんだよ。今は誰も、君の涙を笑いやしない。』

ペルが泣き終わる頃には宮殿の目の前に居た。下りる準備をしなければ。

『ペル、もう大丈夫か。解除するぞ。』

「……………グスツ……」

彼は鼻水をたらしながら首を縦に振る。

『【解除】……………ふう、やっぱり慣れんな、あの姿は』

「……………僕はなる時違和感なんて感じないし、体力も消費しないんですが。」

「え、普通はそうなの!？」

「僕の場合はそうなんです……」

……………私の実はちよつと特殊なのか？

「いや、どうでしょうね……………僕はわかんないですね……………」

「そうか……………つて、ん?」

ちよつとまって、今私言つてないよな?

「……………どうしたんですか。」

「ペル、今私、言つてないよな。私の実が特殊つて。」

「……………確かに、何でわかつたんだろう。」

「……!!!」

見聞色の片鱗が見え始めていた。何故かわからないが

「…… まあ、そんなことより早く王の所へ行きましょう。」

「あ、ああ。」

この子は絶対将来有望な海兵になるな。絶対にお持ち帰りさせてもらおう。

コブラス i d e

…… ま…… うさま……

…… 何だろうか、声が聞こえる。聞いたことの無い声だ…… いったい誰の声だ…… ?

「…… コブラ王様」

「は、はい!!!」

耳元にささやかれた甘い声に耐えられず飛び起きてしまう。その声の主の方に視線を向ける。

「…… !!」

美しい顔立ち、真っ赤に染まった髪、目立つ一本のアホ毛…… ん、どこかで見たことがあるような…… 無いような……。だが美しい…… !!思わず未来の妻が起こしてくれた

あああああああああああああああああああああああああ
 ああああああああああ!!!
 !!!!!! やめろおおおおおおお

嘘だろ!!? 本当に聞こえているのか!!! 恥ずかしいんですけど!!! というか終わった。私、最後にこんな辱めを受けて死ぬのか…!!!

私が恥ずかしさで悶えていると後ろから肩を掴まれた。

…そして感じる殺気。

私はおそるおそる後ろを振り向く。

「女性にそういった言葉を言わせるとは…あなたは後でしつかりとお仕置きをしなればならないようですね? コブラ王」

鬼の形相のイガラムに向かい、プライドもクソも無い見事な土下座を敢行した。

ルイン side

宮殿を訪ねた所、見回りの兵に何者かといわれたので身分証明書を見せたら手のひら

返しのようにペコペコして私を通してくれた。宮殿前の超長い階段をペルと上つていった最中にイガラムと合流し、そのまま王室までやってきたのだが、王が爆睡していたのでイガラムに許可を貰い、耳元でコブラ王様と甘い声で起こそうとしたわけだ。その間後ろに控えていたペルとイガラムは顔を紅くしていたな。

「……全く、コブラはこんなデリカシーが無いとは……まあ心の声を読んだ私も私だが。」

「本当に王様は!!!毎日毎日このイガラムが世話してあげているというのに!!!」

「すいませんすいません!!だって、美少女が甘い声で起こしてくれたんだぞ!!!下心が出てしまつてもしょうがないじゃないか!!」

「うわっ、最低だこの人。欲望丸出しだ!」

「……なら明日から甘い声で起こしてあげましょうか?」

「すいません私が悪かったのでそれだけは止めてくださいお願いしますます本当に止めてくださいお願いします」

まるでお経を読むみたいに謝罪を言い始めたコブラ王。王がこんなのでよく国が纏まつてるな。

「……ペル、君は今まであんなのに仕えていたんだぞ。」

「……………確かに、僕は海軍に行ったほうがいいのかもありません」

呆れた表情のペル。

「……で、『ルイン』……私をどうする気だ。」

「別に、どうもしないが。」

「「え?!」」

だつてこんな王おっさん消した所でどうにかなるわけでもないし。そもそも革命軍とはお友達だからね。

「で、では……なんのためにこの国に……?」

「いや何の為に……王が私を呼んだのだろう?世界会議で護衛してくれて。」

「そ、それはそうだが……私は一度君を殺そうとしたんだぞ!」

「それはもう過去の話。私は過去のことなんて気にしない。実際こつちに何の被害もなかったからね。」

「……ああ、なんて大きな心を持った方だ。」

「ああ、ただ一つ、このペルって子を私達海軍に出来ないか?」

そう聞くと二人は驚いた。ペルは立場上そんなにココから離れても痛くない子だと思うが。

そしてその言葉を聞いたコブラの雰囲気が変わったのを感じ取れた。

「……それは、その子の意思を尊重しているのか。」

「！」

：：： 確かに、私はペルを無理矢理ここに連れて来た。：：： コブラの言っている事は正しい。私は彼の意思を尊重していなかった。ペルをここに連れて来たのは完全に私のわがままだ。

く。 そう思うと今更罪悪感が沸きだした。その罪悪感は顔に表れるほど大きくなっている。

「：：： なら無理だ。ペルにはアラバスタに「ちよつと待つてください!!!」：：： !!」

「確かに僕は、ここに無理矢理連れてこられました。僕の意見も聞かずに無理矢理!!!：：： でも、今日僕は救われたんです!：：： 『孤独』という絶望から、悪夢から!!!：：： 人に言うのが怖くて、ずっと抱えてた過去を、この人は、ルインさんは受け入れてくれました!! 「今までよくがんばった」と。!! その言葉に僕は救われたんです。：：： !!!：：： だから国王様、どうか、どうか僕に、海軍に入る許可をください!!!」

「：：： まさかペルが自分から入りたいというとは。!!!」

「：：： 海軍に入って何がしたい。ペル。」

「：：： ルインさんの部下になりたいです!!!」

「はい? (え?)」

「僕はルインさんに救われました。だから、ルインさんに恩返しをしたい!!そして、親のように接してくれたルインさんを……僕が死ぬその時までずっと守りたい!!!」

「……………」

周りの空気が時間が止まったかのように静まる。これって、遠回しに私に告白してるよ
うな物なんだが。こんなに懐かれるとは思わなかった。

「……………ま、まあ、君の意思が固いことはわかった。……だけどね、ペル君、今の発言は
よろしくないな。」

「……え?」

何の事かさっぱりペルに、イガラムが釘を刺すように言った。

「ペル……君今遠回しにルインさんに告白したんだぞ。」

「え、告白?……………」

!!!

自分の言った言葉の重大性にやっと気づいたペルはその白い顔をどんどん赤くして
いく。

「う、う、うわあああああああああああ!!!」

ペルは顔を真っ赤にして王室を飛び出していった。

平行線ストーリー#1 『壊れた男』

???
side

「……………なんだこいつ。」

オレは死んだ。何回かな。何回も……………。

「……………住宅街か……………」

死ぬたびに、体が体じゃなくなった。刻まれて、抉られて、縫いつけられて、組み込まれて。化け物だ。

——食べるものすら、人と違うんだぜ。

「なんでできたんだっけ……………忘れたな……………」

実験か、何かだった気がする。

わけのわからない装置に叩き込まれて、わけのわからないことを説明されて。

目の前が光ったと思ったら、何もかも変わっていた。

「まあ、いいか……これで終われる……ようやく……」

生きる理由なんてなかった。

定期メンテナンスのせいで、

生き延びていただけ。

目を閉じた。意識を沈めた。

この世界に溺れるようにして

どうにか死んでやろうと思って――

ロキ side

アイツがアラバスタに行ってから三日か。

自分でも驚いている。今、こんなにも寂しいと思っている事が。

それもそうか、まともな人間関係を俺はもっちゃいなかったんだ。だから仕方ないか。

「……ハア……」

寂しさを紛らわす為に外に買い物に出たが、それでも消えない。やつぱり駄目だ。

「……俺はいつからこんな風になったのだろう。」

「…… わかっている。あいつが来てからだってことは。

人って、こんなに弱いんだなと再確認させられたよ。」

「…… ? 何だあれ。」

ふと、路地裏の方に視線を向けた。そこに黒いコートを着た大柄の男が倒れていた。

——見たことが無いな。初めて見る服。白い髪…… 何より、それが発する気配が人のソレではなかった。

俺はその男に近づく。気になったからだ。敵対すると言うのならその場で叩き潰せば問題ない。

「???
side

「…… 大丈夫か?」

落ちかけた意識が、その一言で覚醒した…… 邪魔をしないで欲しい。

オレはその声の主に向かい言ってやった。

「…… いや、いいから。放っておいてくれて、全然……。」

その男は一瞬嫌そうな顔をしたが、

「放っておくわけにはいかないんだよ。海兵として。」

… 海兵？… なんだそれ。

… いや、今から死ぬオレが知っても意味なんて無いな。

「あつそう……。」

立ち去ろうとした。

別に死ぬればどこでもよかった。

するとそいつはオレの肩を掴んだ。

「どこに行くつもりだ。」

「どこだっていいだろ……。」

「そう言うわけにも行かない。ここら一体は海軍が厳戒態勢で警備をしているからな。

夜にブラブラしてたら留置所に放り込まれるぞ。」

「… 行く場所は決まってるから。だから関わらないでくれ。」

決まってる。ただ死ぬればそれでいい。

「… 地獄にでもいくつもりか。」

——そこで俺は気づいた。この男は俺の大半を見透かしていることに。

「… アンタには関係ない……。」

「そうだな。」

脅したつもりだったが、

綺麗に流された。

殴ってやろうかと、踏み出せば――。

「ここに来い。」

そう言われ、路地裏から引つ張り出された。

突然の事で思わずされるがままになる。

――引つ張られて着いたのは、公園のような場所。

「…… 見てみる、ここからの景色を」

「…… 何だお前。」

「何の罪も犯してないのに死にたいって奴の邪魔をする男さ。」

「…… なんでだよ……」

「…… もつたじゃないじゃないか。俺みたいな男にも綺麗だと思えるこの景色を、見ない

まま死にまうなんて。」

俺の目に見えたその男の顔は、どこか寂しそうであり、嬉しそうでもあった。

「ほら、見てみるよ。」

促されるままに、首を回した。

――綺麗だった。

白を貴重とした町並みに人々の笑う顔。まるで平和の文字がそっくりそのまま、映し

出されたような景色。

「……一人になつたら必ずここに来ている。ここから見える景色は、俺の冷え切つた心を暖めてくれる唯一の場所だ。」

「……………」

「俺はロナルド・D・ロキ。お前は？」

「…………… ニコラ・アデル。」

「……今からちようど家に帰るところなんだよ。俺、弟子に料理の腕は一流って言われてるからさ。……なんか作つてやろう。」

「…… いらぬい。」

「何？俺が作った料理は食えないって言うのか!？」

「人が作ったものは食えないし、人の飲むものは飲めない。」

「じゃあ、何を食うんだ。」

俺は驚かせてやろうと思つて、言つた。

「—— 鉾石」

「…… 分かつた。ちよつと上層部うへに頼んで用意してもらおうよ。」

「…… お前、変だな。」

「お前が言うのか、それ。」

「ふっ。」

笑った。

笑ってみて――

そういえばと気づいた。

――ああ。

笑うのなんて、久しぶりだな――。

センゴクside

私が書類作業をしていた時、一本の電話がかかってきた。

「おっかつきく!!!」

〈あられ。ロキだ。〉

「なぬっ!!!ロキ中将!!!?」

〈そんなにおかしいか。〉

意外すぎる、ロキが電話かけてくるなんて。【悪政王】の時でさえ、コング元帥に電話をかけてこなかったというのに。

「……何が目的だ……!!!」

〈いやなんで悪者の対応になってるんだ。〉

〈……ふっ……。〉

電話越しから、ロキ以外の声が聞こえた。

「そこに誰がいるのか。」

〈ああ、ニコラって言う奴なんだけど、コイツの飯を用意してやって欲しい。〉

「飯!!?そんなもの自分で作れば良いではないか!!!」

〈いや、ニコラは鉱石を食うらしい。〉

「……はい?」

〈いやだから、鉱石。〉

「鉱石?……悪魔の実の能力者か?……まあ、とりあえず連れて来てもらおうか。」

〈わかった。すぐ行く〉

そう言っただけで彼は電話を切った。

なんだろうか、もう嫌な予感しかしない。

ガツガツムシヤムシヤバキツ!!!

「……………」

私達は今、とんでもなく恐ろしい光景を目にしている。

彼が連れてきたニコラという男が、鉱石をバクバク食っているのだ。

「……………で、君は何者なんだ……………」

「バリポリ……………ニコラ・アデル……………うまいな……………この鉱石……………」

鉱石に味なんてあるの!!?と思っただが、うまいらしい。レアそメタル石は。

「君は悪魔の実の能力者か?」

「……………なんだそれ。」

悪魔の実のことを知らない……………?

「……………ロキから聞いたと思うけど、オレは果実は食えない。」

「じゃあ、君は一体……………?」

鉱石を食って悪魔のみの能力者でないのなら、正直人間なのかも怪しいぞ

「……………機械だよ……………」

「機械!!?」

私達は目を見張る。こうやって普通に接する事の出来る男が機械なはずが無い。ペガパンクですら未だに『人間兵器』を作れていないんだぞ……!!

「最初は人間だったさ……でも、死ぬたびに人間じゃなくなつた。『化け物』になつたんだ。」

死ぬ!!? 『化け物』!!!? ……意味がわからないな。現に彼は生きてる。

「……まあ、驚いて当然だけど。」

「……君の事は概ね理解した。だが、一つ聞いていいか。」

「………何。」

「なぜ君はロキに接そうと思つたんだ。彼はウチの中では孤立している方だぞ。」

「……なんだと大将!!!今の俺には立派な弟子がいるんだぞ!!!」

「彼女は今、いないではないか。」

「ツ!!!………そうだが、」

「………そいつの方から話しかけてきたぞ。オレはただ倒れてただけだ。」

「何ツ!!!ロ、ロキの方から、だと……!!!」

「うるせえな!!!なんか文句あるかよ!!!……俺だつて寂しいんだよ!!!……一人は……。」

「………!!!」

初めてロキが弱音を吐いた。あのロキが。

「……： そうか、わかった。じゃあニコラ君。一つ提案があるんだが。」

「……： 何、海軍に入れって？」

「全く持つてその通りだ。なぜわかった。」

「いや、だいたいこの流れからして、わかるでしょ。ま、いいけど。」

「!!」

「本当か!!!」

「まあ……： こここの鉱石うまいし、行く当ても無いし……： 死のうとしたらロキに止められるし……。」

…… 彼の強さはわからないが、兵が増えることは悪い事ではない。

だが、ロキに目を付けられるほどだ。強い事には間違いない筈だ。

「……： 書類審査はこちらで通しておく。身体検査だけ出てくれ。」

「……： 学校みたいな事、するんだな……。」

「まあ、学校ほど緩くは無いが。ロキ、案内してやれ。」

「……： !!はい!……： ほら、こつちだニコラ!!」

「……： ああ、わかった。」

彼らは良き仲間になりそうだ。

マリージョアまでの航海 前編

ペルが王室から飛び出して言った後、私達は今後の事について話し合っていた。

「さて、世界会議^{レヴェリ}の件だが、本当に私は行くのか？」

「… センゴクにそう言ってしまったからな。もはや取り消しにできるわけが無い…
ただ…」

「ただ？」

「…：…： ただ、今回の世界会議^{レヴェリ}の議題の中に『ルイン』の能力の詳細と、今後の扱いについてと言う議題があるからな。君にはあまりばれないような服装で護衛をしてみなければいけないな。」

「知ってる。ドラゴンから聞いたよ。」

「!!!…：…： やはり、我らのボスに接触していたか…：…： しかしどうやって…：…：？」

私はコブラにアラバスタに来る途中で起きた出来事を全て話した。

「…：…： 成程、しかし、そんな偶然が起こるものかね。」

「いや、私に言われても…：…： たまたま休息の為に下り立った島が『革命軍』の本拠地だなんて思っても見なかったからな。」

「ハツハツハ、相違ない…………… まあ、その話はこのぐらいいにして……………」

コブラは一泊置いて

「世界会議^{レヴェリ}では、絶対にペルを連れて行ってくれ…………… 彼は忠誠心は人一倍持つ男だ…………… 本来はアラバスタ兵の主戦力として迎えたかったが、君に取られてしまったから…………… 彼に海軍の在り方を教えてやって欲しい。」

「わかった。任せてくれ!!」

「ああ、ではまた明日。イガラム。彼女を客室へ。後ペルも一緒に。」

「了解しました。さあ、こちらへ。ルイン中将。」

「それでは御二方、素敵な夜を。」

見張りのアラバスタ兵がそう言つて客室の戸を閉める。ペルと私を同じ部屋に入れて。

「……………」

ペルはさっきの告白が余程キているのか、私から顔を逸らしている。

…………… 気まずいな。早くこの空気^{レヴェリ}をなんとかせねば。

「…………… そういえば明日の世界会議護衛、ペルも連れて行くことになった。」

「本当ですか!!!」

「ああ、国王から言われたよ。「彼に海軍の在り方を教えてやって欲しい」って。」
「……！そうですか……。」

ペルはそう言ったつきり思いつめた表情をして黙ってしまった。

「…… なにか思うところがあるのか？」

「いえ、ただ寂しくなるな、と。どんな悲惨な過去があつたとしてもここは僕の故郷なので。」

「…… そうか。」

そのことに関して私は言えることはない。私はこの世界に故郷なんてないし、前世もそんな風に悩んだことはないからだ。

「…… もう寝る事にします。早いですよね？明日は。」

「そうだな。私も寝る事にするよ。」

明日か。どんな一日になるんだらうな。

そう思いながら私は瞼を閉じた。

早朝、既に私とペルは身支度を終わらせ、王室前でコブラの身支度が整うまで待機。

率直に言おう。暇である。コブラの身支度だけに何十分かかっているんだ!?女の私でさえ十分ちよいで終わったぞ。

化粧? 私はいつもすっぴんだ!!

「: : : 遅いですね。」

「全くだ!! どれだけ時間が掛かっているんだ!?!」

「: : : どうします? 何かして遊びます?」

「そうだなあ: : : じゃあ指スマでもしてようか。」

「いいですね!」

王室の前で指スマをする17歳(実年齢23歳)の姿がこれである。

「じゃあ、先行は私からで。」

そう言つて指を構える。

「いくぞ: : : : :」

「: : : : :」

な。

長い沈黙が流れる。

「: : : あ、あの、まだ「指スマ2ツ!!」うわっ!!」

ペルはビックリして親指をそのまま立てていた。対する私は親指を立てていない。

—そう、これが私の作戦。一度いくぞと言った後に長い沈黙をつくり、相手がその空気に堪えられなくなったところを狙う。すると高確率で相手の指を立たせることができる!! つまるところの必勝法だ。

「……フッフッフ。」

「ひ、卑怯ですよ!!」

「卑怯? どこが? 私はルールに則っているぞ?」

「ツツツツ!!!」

「アツハツハツハ!!」

本当、男子はわかりやすい表情をするからからからかい甲斐がある。

「……君達は私の部屋の前で何をしている……」

「ああ、コブラ王か! いや、あまりに暇だったのでな。簡単な遊びをしてたわけだ。」

「あまりペルをからかわないでやって欲しい。意外と繊細なんだからな。」

「あ、はい。すいませんでした。」

普通に怒られた……。確かに、今のはイーのペルにはかなりきたかもしれない。

「……まあ、いいですよ。次やる時に全力で叩き潰しますから。」

前言撤回、彼は別の意味できていた。まあ次も私が勝つが。

「……さて、もう政府の船は来ている。行くぞ君達。」

「ああ（はいー）」

アラバスタ、ナノハナに定着していた政府の軍艦に私達は乗り、無事出航した。その政府の船の中には私以外の護衛の海兵も乗り合わせていた。ただ一つ、言わせて貰うのなら

「なんで師匠がいる。」

そう、何故か師匠が乗り合わせていた。

「いやな、新しい部下に世界を見せておきたくてな。無茶言つて乗らせてもらった。」

「部下!!? 師匠に!?!」

思わず声を張り上げて驚いた。「孤独の狩人」と呼ばれている男に部下なんて……

まあ私が言えた義理ではないが。

「ああ、紹介しよう! ニコラだ!!」

そう言つて師匠は隣にいる黒いコートを着た男の背中をバシバシたたいた

「……ニコラ・アデル…… お前が、ロキが散々言つていたルインか……。」

ボケーツとした感じ、見たことがない服。なにより、この気配……

!!!!

只者ではないのはそれだけで感じ取れた。

「ふわあ… 別に、ロキの部下ってワケでもない… けど、海兵だ… よろしくな。」

「あ、ああ。」

どこか師匠に似てるな…。いい人であることには間違いないな。

「それと、私も新たな部下が出来たんだ!!」

「何イ!! ルインに部下ア!!」

いやいや、師匠じゃないんだし、私に部下が出来ても不思議じゃないだろ。師匠じゃないんだし。

「ペル!」

「はい!」

私が名前を呼ぶと、私の後ろからひよっこりと顔を出す。

「ペルです。よろしくお願ひします!」

「へえ、子供か…。何かワケありか?」

「まあ、彼の中では私が救ったってことになるな。」

「…! そうか…。けど、それがどう関係するんだ?」

「いや、一度海軍に勧誘して… 救ったお礼みたいな形で仲間になった。」

「へえ。」

「……………ルイン君？」

後ろから物凄いきれを感じた。振り向くとそこには

「コブラ国王!? なんでしょうか。」

「ちよつとこつちに来たまえ」

そう言われたのでコブラの方に足を運ぶ

「なんで『孤独の狩人』がいる!! 少なくとも私は『中将』クラスの護衛は君一人だと思っ
ていたが!!」

「無理言つて乗せてもらつたらしい。こればかりは私にはどうにも…。」

「マズイのだよ、もし君以外の将校に『革命軍』の存在がバレたらどうする!!」

「…何の話をしてるんだ…?」

「ウワア!!」

ニコラが私とコブラの後ろから声を掛けてきた。私でも気づかないほどの影の薄さ
だった。

「い、いやいや!! 何でもないんだよ海兵君!!」

「…そうか…ちなみにオレは、ニコラ・アデルだ。」

王様に敬語を使わないとは余程肝が据わつてるんだなあニコラは。

…私? 私はこの王のボスと仲良いから大丈夫だ。

「そ、そうか…… フウ……」

おいコブラ。露骨なため息が出てるぞ。

「…………… ルイン。」

「はい！なんでしよう師匠」

師匠の声に若干怒気が含まれていたので私は敬語を使う。

「…… 何か隠してるな。」

「ヒイイ!!!」

マズイ!!革命軍のことが師匠にばれたらマリソフォードの外周100回どころでは済まないぞ!!

「…… そうか、まあいい。何かワケありなんだろ？今回だけだ。」

「…… すいませんでした。」

この様子から師匠は完全に理解したのだろう。見聞色で。

—なんか私、今日謝ってばかりなんだが。

「…… あ、あのルインさんが、敬語を使った…… !!ロキさんは何者なんだ……」

おっと、ペルの中でロキ中將はランクアップしたらしい…… 悪い方向に。

「…… あいつ、なんか違うんだよな。」

突然、ニコラはそう言っぺルを指差した。

「… 違うって、どういうことだ？」

「ルインやロキはなんか、使いこなしてるような感じがしたんだけど、あいつはまだ、力の半分も出せてない感じがするんだよ…。」

… ?

この男は何を言っているんだ？

「… ちよつとあいつ借りるぞ。」

そう言つてニコラはペルを引つ張つて甲板の方へ向かった。

ニコラ side

「な、何するんですか！ニコラさん。」

そう言つてもがくペルを、オレは甲板に放り出す。

——ロキやルイン、その他の海兵を見て、わかつた事がある。この世界にいる人の何人かは超能力のような何かを使う奴がいる事だ。

その超能力のような何かをロキは悪魔の力と呼んだ。

オレが海軍の奴等を見た限り、その力を自由に使いこなせるものもいれば、そうじゃない奴もいるように見えた。こいつは後者だ。

「… お前も、使えるんだろ。」

「使えるって、何がですか！」

「ロキやルインみたいな、超能力、いや、悪魔の力。」

「!!!」

「……この反応は、そういうことだ。」

「……なんでわかつたんですか。僕はあなたの前では使わなかったと思いますが。」

「わかるんだよ……そういう奴等は、他の奴と発する気配が違うんだ……ロキのは見だし、ルインのやつは話から聞いてた……お前のやつ、見せてみろよ。」

「………わかりました。」

すると、目の前の少年は鳥と人の間のような姿に変身した。

「………違う。」

「違うって、なんですか。」

「ロキは、もっと自然体だった気がする……。まあ、あいつも最初はこうだったのかもな……。」

「……何が言いたいんです？」

「……お前はまだ、その力の使い方をよくわかっていない。己の身に宿す悪魔の使い方を……だから、実戦でその力の使い方を覚えさせる……。」

オレは構える。

「… 今から模擬戦をするぞ…」

「ええ… 僕、あんまり戦い慣れてないんですが。」

「安心しろ。オレは手加減するから。」

「いや、そういう問題じゃなくて…。」

… いちいちうるさい奴だな。一発入れてやろう。

— オレが放った拳が、ペルの鳩尾に直撃する。

「ぐう!!!」

「… そうやって、戦いを避けるようじゃ、強くなれない… だから、やるぞ。」

「… 無茶苦茶な人ですね。わかりましたよ!!」

彼も構えた。

— 彼を壊さないように、気をつけないとな。

マリージョアまでの航海 後編

ペル side

「……じゃあ、行きますよ!!」

獣人状態の僕は背中に翼が生えている。その翼を最大限活用する為、空高く飛翔する。

「……おお、」

ニコラは飛翔した僕を珍しいものを観るかのように見ている。

——今に見てろ、これを喰らったらそんな顔できなくなるからな!!

空高くに飛んでいる僕は、ニコラに向かって落ちてるようにして向かっていく。

その時にかかる重力の影響で上がっていくスピードを推進力に変える、

——速度は、最大の武器だ。

「……喰らえッ!!!」ファルコン・エッツ【隼の暴爪】!!!」

ニコラの体を能力で変形させた爪で捕らえる。秒速500メートルの速度で放たれる一撃で無事にいられるはずが無い。

ザシュツといった心地いい音が辺りに響く。

「……………成る程な。スピードを武器にしているのか。」

「!!」

今の手ごたえ的に喋る余裕がないほど深くやったと思ったが……

「……………今度は、オレの番だな。」

声が聞こえたときには、もう彼の姿を認識する事が出来なかった。

—どこだ、どこに消えた。

「がっ……………!!!」

脇腹辺りに強い衝撃が伝わる。まるで、象の鼻におもいつきりぶたれたような痛みを。

あまりの痛みに変身が解け、ガクリとその場に倒れこむ。

「……………脆いな。そんで小さい。」

「……………ち、小さいですか、脆いですか……………」

「……………起動してないとはいえ、気持ち強めに打ち込んだが……………喋れるのか。」

……………ここで倒れたら、もう追いつけない。

「これくらいは攻撃で倒れてたら、ルインさんを守れやしない……………!!!」

「!!…： 近くなつてる。」

あいかわらずニコラが何を言っているのかがよくわからないが、こんな所で倒れる僕ではない。

——ルインさんを守ると誓つたんだ。強くなるのさ、守り抜く為に。

そう思うと、何だか痛みが消えていくような気がした。

そして、力が込み上げてくる。

「…： もう、脆いなんて言わせないですよ…：!!」

「成つたな。ペル。」

再び変身をする。その時、いつもとは違う何かを感じた。

何だろうか、前よりも強くなったような感覚だ。

「そこまでだ、ニコラ、ペル君。」

睨み合う僕たちの間に、ロキさんが割り込んだ。

「…： ロキさん、邪魔しないでくださいよ。ここからだつてのに。」

「いや、ここ船の上だからな。無闇に暴れて壊されでもしたら弁償しなきゃいけないのだらうが…：。んで、ニコラ。」

「…： 何。」

「ペル君は覚醒しているんだな。」

… 覚醒？何の話だ？

「ああ、今その覚醒とやらをしたみたいだ。」

「何イ!!?なぜ今!!?」

「オレが覚醒させた。」

そう言ったニコラに対し、驚きの表情を隠せないでいるロキさんは、

「… ペ、ペル君?もしかして、ニコラから受けた傷が、直つてたりする?」

と、恐る恐る聞いてきた。

僕は脇腹に手を当てると

「パンチか何かを食らったと思うんですけど、もう痛くないですね。」

「… マジか。」

「マジです。」

「… ニコラ、お前は海軍校の教師になればいいよ。推薦してやる。」

「… 止めとくよ、めんどくさいし。」

こうして模擬戦は中途半端に終わった。

ルイン side

師匠が外が騒がしいからと言ってこの部屋から出て行ったので、マリージョアのガイドブックみたいなものを読んでいた。

この本は王族のみに支給されるらしく、コブラの許可を貰って特別に読ませてもらっていた。

この本によると、私達は「レッドポイント赤い港」と呼ばれる港に移動し、そこにあるボンドラと呼ばれる乗り物でマリージョアまで移動するらしい。

「…ボンドラって何だろう。」

「ああ、シャボン玉で飛ぶリフトだな。」

「そうなんだ…って、うわっ!!! 師匠?!? いつの間にか!!」

「お前がボンドラのページを読んでいた辺りからだ。」

… それって、結構前からじゃないか。

「それより、だ。お前が連れてきたペル君が能力に覚醒してるぞ。」

「ええ!?!」

「ニコラいわく、覚醒させたそうだ…。アイツは将来、化けるぞ。」

「そんなことが可能なのか。」

「何らかの形で悪魔の実際の覚醒条件を満たしたんだろうな。ちなみにまだその覚醒条件ってのは解明されてないぞ。」

「…へえ。」

覚醒、か。私もいつの間にかしてたみたいだけど、予兆なんてなかったもんなあ。

「… 入るぞ。」

「失礼します！」

ちようどのタイミングで彼等が入ってきた。

「聞いたよペル!! 覚醒したんだってね、おめでどう！」

「は、はい！ルインさん!!」

「… ふわあ。」

「ニコラもありがとう！ペルを覚醒させてくれて。」

「… お前の元に就きたいって言ってるんだ。これくらいしとかなきやお前の護衛なんて一生出来ないと思うからな。」

本当、ニコラには感謝しなきゃあな。

訓練させる手間が省けるもんだ。

「… とところで、ずっと気になっていたんですが、覚醒って何ですかね。」

「ああ、覚醒って言うのはね、悪魔の実際の力の延長線みたいなものさ。私とペルみたいな

動物系は生存本能が強くなって、より野生の力を引き出せるようになる。師匠みたいな超人系は自分の周りのものに影響を与え始める。自然系はまだ確認されていないね。」

「へえ……勉強になりますね。っていうか、ロキさん能力者だったんですか。」

「まあな、ピタピタの実際の溶接人間ってとこだ。」

「そうなんですネ、じゃあニコラも?」

「……いや、オレはただの海兵さ。」

「……うう、ただの海兵に傷一つ付けられない僕って一体……」

……彼には見聞色を通じない。私はその時点で只者じゃないと踏んでいるが。

ドゴオオオン!!!

!

「「「!!!」」」

突如、爆破音が聞こえた。その爆破音と同時に、アナウンスが響き渡る。

〈突如前方に巨大戦艦が出現!!!本艦はただいま砲撃を受けております。王族の皆さんは直ちに自室まで移動してください!!〉

……
突如?

「ハア、ハア、る、ルイン君!!」

「コブラ王!?大丈夫ですか!!?」

外から入ってきたコブラ王は肩から大量の血を流していた。

「ああ、私は大丈夫だ……だが前線で応戦している海兵達が押されている。今すぐ向かってくれ!!」

「わかりました。行こう!! 師匠、ペル、ニコラ!」

どこの馬の骨か知らないが、この船に襲い掛かってきた事、後悔させてやろう!!

???
side

「クソ、コイツ強いぞ!!」

俺様の周りには俺様の武器『サイクロプスハンマー』の餌食になった雑魚共が転がっている。

全く、近頃の海兵は脆いと言うものよ。

数だけで俺様に勝てると思っっているのか?

「この護衛船には王族が乗ってるんだらう? さっさとこつちによこせ!! そうすればお前の命は助けてやろう。」

「そんなことするわけないだらう!! 我々はアラバスタの王コブラ様を無事護衛する事が

任務だからな!!」

「チツ… 口だけの雑魚に用はねエんだよ!!」

俺様の自慢のハンマーが歯向かう雑魚の頭を捉える。

このハンマーは俺様にしか扱えない代物。俺様の能力で俺様にかかる負荷をゼロにしているからな!!

… しつかし、確実に頭を捕らえたはずだが、違和感があるな。

「そこまでだ。懸賞金5200万ベリー」悪鬼「マッシュユ。」

「ああん!!? 誰だ!! 俺様を呼び捨てする雑魚は!!」

俺様を呼び捨てする奴は許さん!! 叩き潰してやる!!!

「誰だか知らねエが潰れろ!!」

俺様を呼び捨てしたソイツにハンマーを叩きつける。その衝撃で護衛船の甲板に亀裂が入る。

だが俺様は、この事を後悔することになる。

「お前みたいなの5200万^雑ベリー^魚に呼び捨てする事のどこが悪いんだ?」

バカなツ!!! 今確かに叩き潰したはず!!

!!!… 貴様は… 孤独の狩人… ロキ… !!!

バカな!!! 何故護衛船に奴が乗っている!!?

「グエ……!!!」

首元をつかまれる

「……俺を……その通り名で呼ぶんじゃねエ!!!」
ウエルディング・パベット
 「溶接人形!!!」

瞬間、俺様の視界が真っ暗になる

(き、貴様!!何を……)

……気づいてしまった。俺様が、喋れない事に。

俺様が……苦しんで死ぬ事に……

ルイン side

「……なんなんだ師匠、この銅像は。」

私達が駆けつけたときには、逃げ惑う海賊達の姿だけだった。そして師匠の目の前に、彫刻家が彫ったかのような立派な像が置かれていた。

「……コイツが今回の襲撃の犯人だ。『悪鬼』の名で通ったクソ雑魚だ。」

「いやいやいや、なんでその犯人がこんな立派なアート作品になってるのって聞いてるの。」

「……察せ。」

「え？」

「そんなことより残りの海賊達を潰してこい。俺は今、気分が悪い。」

師匠はそう言うのと船室の方へ歩き出して行つてしまった。

「あ……あ……!!!」

ペルが恐怖に染まった声色で声を上げる。気づいてしまったのか。

「……これからはどんな事があつても師匠を怒らせては駄目だ。こうなるからな。」

「は……はい……き、肝に銘じておきます……!!!」

「……あいつも、化け物なんだな……。」

ニコラスide

海賊船はルインが燃やしに行った。残されたオレ達は残党を狩る事に専念する。

「……おそいな。」

「グギヤアアア!!」

オレの掌低は物理的な意味で貫通するからな。

せめて相手が苦しめないように、と心臓部分を貫いて殺してる。

「…に、ニコラ、その殺し方は、ちよつと…。」

「…こうする事で相手は苦しまずにあの世にいけるだろう?」

「サイコパスですか?」

「…サイコパス?なんだそれ。」

「あ、いいです。気にしなくていいんですよ。」

と言った後、明らかにため息を吐いた。

—何がしたかったんだ?

「…あそこに固まつてる連中は、僕にやらせてください。」

ペルが指差した方向には刀を持った海賊が5, 6人ほどいた。

あれくらいなら大丈夫だろう。

「…ああ、いいぞ。」

「わかりました。じゃあ、行ってきますね。」

ペル side

「何だ?! つかい鳥がこつちに向かって飛んでくるぞ!!?」

…爪はいつでも打てる状態にある。

「打ち落とせ!!」

連中は銃を構えるが、その選択は正しかったとは言えないだろう。

「【飛爪】 ツ!!!」

『ゴオア!!!』

飛ばした爪は海賊達の体を撃ち抜く。銃弾の雨のように。

…だが、

「…何だこれ…。」

海賊の腹部に弾丸ではとても開かないような大穴が開いており、当て損ねた爪は船の甲板を抉っていた。

「それが、覚醒だよ。ペル。」

「あ、ルインさん!!」

獣人状態で空を飛んでいるルインさんは掌に紅の炎を灯していた。

「さげてさて、メは私にさせてもらおうよ。」

彼女は掌に灯した炎を巨大戦艦目掛けて放った

「【地獄^{ヘルフレア}の炎】」

その炎は巨大戦艦をあつという間に火達磨に変えてしまう。

—ああ、こんな力を持つ人を、守れるのだろうか。

不安だなあ……。

ルイン side

「……ルイン君だけではなく、君達全員が化け物じみた力を持っていたんだな。」

燃えて海底に沈んで行く戦艦、アート作品、抉れた甲板、周りに飛び散っている血を見たコブラはまるで殺人鬼を見るかのような目でこちらをうかがってくる。

「その像、アンタにやるよ。いい値段で売れると思うぜ。」

「い、いや、遠慮しておこう。末代まで呪われそうだ。」

確かに、見た目は綺麗だが欲しいかかって言われたら欲しくはないな。

「そ、それよりだ。もうじき『赤い港』レッドボードに到着する。これからは本番だぞ、君達。」

「……ふわあ、めんどくさいな。」

「なんか、さっきの襲撃のせいで緊張感が無くなってきましたね。」

「……俺はまだイライラしてるけどな。」

本当、「悪鬼」は師匠に何を言ったんだ？ここまで機嫌が悪かった事なんて早々ない

ぞ。

「：ハハ、それでこそ君達だ。頼んだぞ。」

燃えゆく戦艦を背に、護送船は大海原を駆けて行った。

道中

「……あれが、この世界を真つ二つに割る大陸か……!!!」

「……………ふわあ。凄いな。」

「うわあ……!!!始めて見ます！僕!!」

「……懐かしいな。」

「「レッドランド」赤い土の大陸!!」

初めて見たな。感動物だよ。ワンピファンとしては一度は訪れたかった場所だ。

—その名の通り真つ赤の大陸で、見上げても頂上なんて無いんじゃないかって思うほどでかい。

「ハハハ、私は4年に一度見るがね。」

「いや、そういう事言わないでくださいよ。雰囲気台無しじゃないですか。」

「ああ、それはすまないな。それと、もうすぐ上陸するからな。持っていくものの準備だけは済ませておくんだぞ。」

「ああ、わかった。」

赤い港レッドボードへの期待を高めながら、私は持ち物をチェックすることにした。

赤い港レッドボード

「皆ー!!!コブラ国王様がご到着なされたぞ!!」

「おおっ!!あの名君と名高いあのコブラ様が!?!」

赤い港レッドボードの住民は私達を心から歓迎してくれているようだ。

「いい町だね。」

「ですね。」

「……ふわあ……」

「……何かうまそうなもの置いてないかな……」

その町の雰囲気の流れされ、私達の会話まで和やかなものになっていく。

「……君達、完全に休暇モードに入っているではないか……」

「いやだつてコブラ王、私、こんな和やかな町始めて来たんだぞ?」

「いや君は一体どんな人生を歩んできたんだ!?!」

「……あつ!!私の美味しい物センサーが反応してる……あの店だな!」

「いやちよつと!?!スルーしないでルイン君!?!っていうか美味しい物センサーって何!?!」

コブラの話の聞く気なんか微塵も持ち合わせていない私は土産屋の方に足を運んだ。

「えっ、ちよ……!!!!……ハア……。」

「諦めろ。アレがアイツだ。」

「……そうか、ボンドラの予約は既に取ってあるから、時間になったら彼女を迎えに行つてやってくれ。」

「ああ。ペル、頼んだ。」

「ええッ!!?!何で僕!!?!」

「お前はパシリに最適だからだ。」

「……。」

美味い物センサーに反応した店に行ってみると、赤いモチみたいなものが売っていた。

「おおっー!!何これ!モチ!!」

「おお、お客さん!それは赤い土レッドライオンの大陸大福でっせ!!モチモチの厚い皮に、中にはとろーりトロけるカスタードと、赤い港の名産品のイチゴが入ってるよ!!試しにお一つ、食ってみるかい?」

「おお!!食べる食べる!!」

「オウケエイ!!:. . あいよ!代金はいらんからな!!」

店員のおじさんから大福を一つ受け取る。

「では、遠慮なく. . . あむっ。」

—絶妙な弾力の皮、モチモチの皮を噛み切ると、濃厚なカスタードが口の中で暴れ回る。

そして、カスタードの中から姿を現すイチゴがまた絶品。前世で食べたイチゴのどれよりも甘く、雑味が無い。

「うんまあああ!!えっ!!何これ?」

「だろぅ?!観光客の方は皆これを食べっとうまいうまいって言うってくれるのさ!!ウチ作った甲斐があるってもんですわ!」

これは皆に買って行ってあげたら喜ぶ事間違いなしだな。一ダース買っていくか!

「おじさん!!これ一ダース買ってもいい?」

「あ、俺の話は聞いてくれないのね。。。 ああ、いいぞ、1,000ベリーだ。」

私は安いなあと思いつながら財布を取り出し定員に渡した。

「あんがとよ！また寄ってくれ!!」

「ああ、またいつか！」

この店は私の頭に記録しておこう。

—ルインさん？

「!!!」

「うわわ!!ちよつと、構えるのはやめてくださいよ!!」

。。。今、気配を感じなかった。

もし話しかけてきた相手がペルじゃ無かったらブツ飛ばしてただろう。

「あ、ああペルか。どうしたんだ？」

「あなたが土産屋によっている間にボンドラが発車しそうなんですよ!!!」

「そ、そうか、わかった。」

。。。コイツには本当、驚かされてばかりだな。。。 見聞色といい、覚醒といい。。。

正直、こんなに才能を持っているとは思わなかったが。

「。。。？何ボーつとしてるんですか!!もう時間が無いんですから速く行きますよ!!」

コブラ王の下へ戻ったら、周りが騒がしくなっていた。

—何かあるのかなあ。

「……来たか、ルイン君。」

「遅い。遅かったからには美味しいもの買ってきたんだろうな。」

「……ふわあ……眠い……。」

三人がそれぞれの反応を返してくれた。

「ああすまない。待ったか?」

「いや、ナイスタイミングだ!!」

そう言つてコブラはボンドラの予約チケットを見せびらかす。

「そうか、良かった……すまないな。勝手に飛び出して行つて。」

「いやいや、問題は無いよ。他の王達ももうボンドラに乗り始めた頃だ。」

「成程、道理で騒がしいわけか。」

「そうだ、そろそろ私が予約した物も発車するからな、皆行くぞ。」

「ああ。」

まず目に映ったのは、巨大な城のような建物だ。

その周りには木という木で多い尽くされている。美しい。まるで天国のようだ。

「……さて、君達、ここでは絶対に荒事を起こすな。その時点で死罪だ。」

…… やめてよ、ここが地獄に見えてきたじゃないか。

「僕達に限ってそんな事起こすわけ無いじゃないですか!!」

やめてperl君、フラグ建築しないで。

「そして、ここでの君達の立場は『護衛』だ。常に私の元に就いてもらうぞ。」

護衛か。この旅の内容が濃すぎて忘れかけてたけど、アラバスタに行った理由ってそれだったわ。

「さらに、絶対に守ってほしい事がある。もし天竜人が『奴隷』で遊んでいる所を見ても、絶対に手を出さないでくれ!!」

コブラ王が真剣に行つてくる辺りやっぱ天竜人つてクズなんだな。

それで、私の周りにいる人達、絶対に手を出しそう。

「わかつてるよ、常識だからな。」

「僕も良心が痛みますが…… 頑張ります。」

「……………」

怖いなーこの三人やらかしそうぞ、特に師匠。

「……よし、では行くぞ。四人とも。」

世界会議^{レヴェリ}って言うのは一番最初に見た建物の中で行うらしい。

そこまでは自力で歩かなければならないらしい。

「……ん？もしかやコブラか!？」

長い道のりを歩いていると、突然向こう側から声がした。

「おお!!リクか!!息災であつたか!!」

なんと、まさかのリク王でした。

「いやーおかげ様でドレスローザは平和だよ。かつて国中で騒ぎになったあの男も今は剣闘士として戦ってるからな……って、今回の兵はいつもの人達ではないんだな。」

「ああ、そうだよ。海軍からお取り寄せしたのさ。」

「へえ……ん、その譲さんよ。」

……譲さん、誰だろうか……

私は辺りを見渡すが、そんな女性はどこにもいない。

「お前の事だよ。」

「あ、そうか……。で、なんでしょうかりク王様。」

「：： いや、な。つい最近君の顔とそっくりな人物を見た気がするんだが：：：：」

リク王がそう言った途端、彼の護衛兵が何かに気づいたように騒ぎ出す。そして、その護衛兵の中で一番くらしいの高そうな男がリク王に告げる

「リク王様、彼女は今回の議題の女海兵、世界を揺るがす力を持つと言われる『ルイン』ですよ：：：！！」

「な、何イ!!?それは本当なのか!!?」

「ああ、私が『ルイン』だ。」

嘘は言っちゃいけない。こういう時こそ本物であると言っておかなければ。

「：：：： すまんコブラ、ちよつと吐き気が：：：：」

「うおおおおお!!!大丈夫かリク!!リクーーーー!!!」

——リク王様ーーーー!!!

数秒後、彼の周りはキラキラしたもので埋め尽くされた。

世界会議（レヴェリー）#1『ルイン』

私の所属する国際統治組織世界政府を形作るもの、それが加盟国であり今現在では170カ国以上の国が加盟国として世界政府を支えている。

そして、四年に一度、その加盟国の中から50カ国が聖地マリージョアに集まり、この世界について会議をする行事がある。

—それが世界会議だ。

この会議によって世界の方針が決まると言っても過言ではない。

「さて、司会はフィリップ君か。では早速今回の課題の内容を。」

「ああ。今回の課題は、そこに座ってる女の能力、その女の意思、思想等を問いただし、生かすか殺すかの判決を下すのが第一だ。その次に……」

そう、私は世界会議レヴェリーに出席することになった。しかも殺される可能性がある。

色々言いたいことはある。だが、その中から一つだけ言わせて貰うとするなら、

なぜこうなった。

「… ええと、ルイン君、だったな。改めて自己紹介しよう… 私はドレスローザの国王を勤めているリク・ドルド三世だ。以後よろしく頼む。」

「丁寧な自己紹介どうもありがとうございます。私は海軍本部中將のルイン・アラクハートです。今回の議題に私のことが出るようですが、そんなに警戒しなくても私は世界を滅ぼす気なんて毛頭ありません。」

私は丁寧に自己紹介を済ませる。リク王はワンピースのキャラの中でも尊敬する男の一人だからだ。

「おお… !! 礼儀がなっていると… 世界を滅ぼす力を持つと聞いていたので、どんな荒くれ者かと…」

「おいリク!! その辺にしておけ。ルイン君は怒らせるととんでもない仕返しがつてくるからな!!」

「何?! これはすみませんでしたルイン殿!!!」

：：：　なんか土下座されたわ。私はそんなに気にしてないし、逆に私のイメージを悪くするような事を言ったコブラに腹が立つんだが。

「いえいえ、リク王殿、私はそんな事で怒るような女じゃありませんよ。コブラ王はちよつとお話がありますが。」

「そうか：：：　良かった。」

「：：：：：　私は死ぬのかルイン君。」

「いやいやコブラ王、ほんのちよつと、お話をするだけですよ。けど良いお話じゃありませんけどね？」

「い、いやだ：：：　いやだあああああああ!!!」

師匠たちとドレスローザ兵が見ている中、私はお話と言う名の説教を慣行した。

私のお話説教で病んでしまったコブラと完全に私のことがトラウマになってしまったりク王たちを連れ、無事目的地に到着した。

巨人族でも通るのかつてくらい大きな扉が聳え立っている。

その扉を手で触れてみると、見た目の割には重量感を感じなかったので、私は勢いよく扉を開けた。

「たのもー!!!」

その一言で、場内の空気が凍りついた。物凄く視線が痛い。

「……………ルイン。」

「……はい、なんででしょうか。」

「お前、コブラ王に目立つなと言われただろうが!!!なんでそんな目立つ事する!!?バカか!!!見てみる!!コブラ王とリク王が真っ白になってるぞ!!!」

そちらの方を見てみると燃え尽きた灰のようになっていた。

「……すみませんでしたア!!!リク王様!コブラ王様ア!!!」

「いや謝らなくていいから!!余計目立つわ!!!」

「……ケツハツハツハ!!!」

罪悪感に殺されそうになった私が土下座して謝っていると、一つの野太い声が辺りに響いた。

「……今回は面白エ奴等連れて来たじゃねエか!!コブラ!リク!!!」

そう言つて私達の前に現れた男は、コブラとリク王の肩を掴んだ。

「……君か。フィリップ。……すまん、私は今君のテンションについていけるほどの元

「気はないんでね。」

「… 私もだ。」

「おいおい、つれねエなア。… んで、そこのお前。」

フィリップと呼ばれた男は私を指差し、こう言った。

「お前、『ルイン』だろ。」

その一言に場内の空気がざわめきだした。

「… そうですね。私が『ルイン』です。」

「何イ!!？」

「『議題の女』だと!!？」

「何故ここにいるの!!？」

そう言った声があちらそちらで往復している。

なんだ、私がいちゃ不味いのか。

「ケハツ!! おんもしれえ!!! 今回の世界会議レヴェリーに参加して正解だったぜ!!」

「さいですか。」

「なんだよ、お前さつきあんなに目立ってたって言うのにそのナリか!？」

… 言っちゃいけないけどこの人ウザいわ。私の苦手なタイプだわ。

「… あ、今俺の事ウザいつて思っただろ?」

「!!…… いやいや、そんなわけ…… ないじゃないですか……。」

この人、見聞色使いか? いや、そんなことよりも重大な問題がある。

—私、嘘下手だ!!!

「…… まあ、良いか。嘘言ってるのは自分が一番わかつと思うからな。」

「は、はあ。」

「そんなことより、皆ア!!!」

彼は王族達に呼びかけ、告げる。

「今回の世界会議^{レヴェリエ}。コイツも出席させるから!!」

……… はい?

「……… いやいや、いやいやいや!!」

おかしい。コイツは何を言っている?

「今回は俺が議長を務めるからな!! 多少の我が儘は通用するのさ。」

「いやいや、世界会議^{レヴェリエ}に我が儘って通用するんですか!?! それだつたらこの世界終わって

ますよ!!」

「ケツハツハ!! そうだな。だけど他の王達に異論はないみたいだぞ? そうだろオ!!!」

— 今回の議題の本人が来てくれたのだ。出席させれば本人から直接いろいろ聞き出すことが出来る。

―確かに、それはありだな。

―私は兵器の事しか興味ない。勝手にしてくれ。

―見定めてくれよう。

「……だ、そうだ。出席してくれるな？」

「……はい。わかりました……。」

……もう逃げ場がないじゃんこんなの。

と、言う過程を経て今に至るわけだが、おかしくない？完全にフィリップとか言う奴のせいだよね!!?

しかも面子が凄い。

ジェルマのジャッジ、リク王、コブラ、エリザベローⅡ世、タラツサ・ルーカス等々この世界で様々な偉業を果たした者達が全員ここに集まっているのだから。

「さて、早速『ルイン』殿に質問があるのだが。」

一番最初に挙手したのは……………誰だ？あの人。

「えーつと、ハリウッド王国のハン・バーガー王だな。どうぞ。」

成程、ハンバーガーか。美味そうな名前だな。

「さっそく能力を見せて欲しい。とりあえず見ない限り判決を下すわけにはいかんなな。」

…能力か。この部屋で見せるには少々危険だな。

「わかりました。が、この部屋で能力を使うのは危険です。」

「いや大丈夫だ。彼がいるからな。」

そう言つてフィリップの方を指差す。

フィリップはそれにグーサインで返す。

…何か秘策があるのか？

「…じゃあ、使いますよ。」

そう言つて私は席を立つ。世界の王達は私の行動一つ一つに注目する。

「【竜化】。」

瞬間、私の体は炎に包まれていく

「おお!!火の能力か。なら自然系ロギアなのか?」

「いや、竜化と言っていたから動物系ソオンの可能性もある。」

王達は私の変化について語り合っている。答えを言おうか。

『…正解は動物系ソオン系系の獣種。モデルファイアドレイクさ。』

変身完了。変身中に出了た炎でこの部屋が燃えてるんだが、本当に大丈夫なんだろうな

!?

…竜、か。そんな幻の存在の力を持つ人間はカイドウ以外で知らなかったが……。

成程、道理で世界を滅ぼす力を持つと言われているのか。危険だな。

ほう…面白い。

…コブラ、お前はあれとよく過ごせたものだな。

…ああ、彼女は私の部下の一人に心から信頼されているからな。あの子が信頼を

寄せる相手と同じ国で過ごせないわけないだろう?

「ケハハ!!つくづく面白エ奴だ……けど、このままじゃここが燃えるから、魔法を使

わせてもらおうぞ?」

フィリップはそう言つて指を鳴らした。

「!!」

なんだ、この感覚、どんどん小さくなっているのか? いや、それにしては抵抗力というものを感じない。

まさか、戻されている!!?

その感覚が無くなった後、私は自分の手に触れた。

「…人の手だ…!!!」

驚いてる私を見たフィリップは実におかしそうに笑い声を上げた。

「ケツハハハハ…ハン・バーガー王、これで大丈夫か。」

「ああ。問題ないよ。能力は世にも珍しい幻獣種だったことに驚きだが。」

「そうだな、俺も驚いた…他には無いか?」

彼は再び王族達に問う。

しかし、王族達の反応はない。もう彼等の中で私をどうしたいか決まっているのだからか。

「…何もねエのか。じゃあ俺の意見を言わせて貰うぜ。俺はコイツを生かしても問題ねエと思う。ロジャーとまともに戦つて生還するどころか一番の功績を挙げた猛者だ。しかもセンゴクから聞いた話なんだが海軍に従順らしいじゃねエか。言われた仕事は

きつちりこなすし、なによりあのサカズキ、クザン、ボルサリーノの三人がコイツに懐いてるって聞いたしな。」

—ほう… アレ等をか… なら信用できるな…。

—私、以前サカズキを護衛にしたらとんでもない目に…。

—さすがは、『ルイン』ですな。

私に対する賞賛の声やあの三人の愚痴が議会で飛び交いあう。今度あの三人にどうやったらそこまで嫌われるんですか？ ツて聞いておこう。

「… 他の王も異論は無いな。」

フリーリップがそう告げる。その言葉に反論するものは一人もいなかった。

「… それでは、『海軍本部中将ルイン』は、これからも我々世界政府側に付き共に世界の均衡を保つ者として頑張っていこう… って感じで、これからも海軍で頑張れよ。」

「は、はい…」

案外速く私に関する議題が終了した。世界会議ってこんなものなのか？

「… さて、本題に入ろう。」

「えっ!!本題?!」

私の話が本題じゃなかったのか!?

「… ルイン君には話してなかったな… とある少女の話さ。」

「…？」

「先日、南の海サウスフルにある人口2000万人の国であるデルタ王国という国が一夜にして滅んだのだよ。」

「!!? どういうことですか!!?」

私は思わず大声を上げる。人口2000万人を一夜で消すほどの危険人物がいるのか!!?

「…コブラ、そこからは俺が話す。」

先程の態度からは考えられないほど冷静に、真剣に話すフィリップを見て、私は内心驚く。

「フィリップ…。」

「デルタ王国は、俺の親友の国だ。しかも、その夜、俺もその国にいた」

「え…。」

世界会議（レヴェリー）#2『死の鎌』

俺はその夜、親友の治める国であり、緑と笑顔の国『デルタ王国』の王室にてその親友であるデルタ王と酒を飲んでいた。

「ケツハハハ!!! そういや、デルタは出るのか? 世界会議に!!!」

「んぐつ… んぐつ… ぶはあ… ああ、一応な… それより、フィリップこそここにいていいのか。もうすぐだぞ、世界会議は。」

「ああ、お前と行こうと思つてな、大臣にもそう言つてあるぞ。」

「ハハハ、うれしいね… 君にだけは話しておいてもいいかもしれないな。」

「… 何をだ。」

「まだ誰にも話していないんだが… 『ハーツハア!!! その話はさせねえぜ!!! デルタ!!!』…!!!」

「何者だ!! (誰だ!?)」

俺達はそのことにあつたものに驚愕する事になる。

オーラのようなものを纏つた頭蓋骨が、浮いていたのだ。そして、その横にはフードを被り、身の丈に合わないほど大きな鎌を持った少女がいた。

「骨三郎……うるさい」

『おいアズ!!いつも言ってるだろ!!俺様の名前はスカルデロンIIデIIモンテIIシヨスタコビツチ三世という立派な名前があるんだぞ!!』

「……長い。」

『あ……そうですか。』

……いきなり出てきたと思つたら何だ?こいつらは。どこぞの売れない漫才師か?

「……どうやってここに入ってきた!?この城には2万を超える兵士が常時見張りをして
いる筈だが……」

確かに、俺もこの部屋に来るまでに数え切れないほどの兵士を見た。しかも全員手練
と聞いているのだが

「殺した。」

「何だと、彼等は選りすぐりの兵士だぞ!!!」

『あんな雑魚共、俺様とアズの前では赤子同然よ!!!もつと言うなら国民も全員俺とアズ
で消してやったぜ?俺達はそれだけ。「骨三郎、喋りすぎ。」わわ、悪かったよアズ!!!』

その言葉を聞いたデルタはガクリとその場にしゃがみ込んだ。

「嘘だ……嘘だ!!!」

「お、おいデルタ!!!」

「き、貴様等アア!!!よくもオ!!!」

そう言つてデルタは彼女等に向かつて自分の手を差し出す。

いけない。それを使えばデルタは……人殺しになる!!!

「やめろデルタ!!!それだけは!!!」

「黙れ!!ファイリッブ!!!こいつ等は私が愛するこの国を……壊したんだぞ!!!」

「嘘かもしれない。窓から外を見てみる!!第一、こんなガキがこの国を壊せるわけが無いだろう!!!」

俺はそう言つて王室の奥にある大きな窓を開けた。

そして、絶句する。この王城のまわりにある筈の城下町は火の海と化し、この国の象徴である森ももはや森とはいえない代物になっていた。

「……!!!何で……!!!」

『ヒヤハハハ!!!見ろアズリエル!!!あの絶望しきった顔を!!最高だ!!!』

「それより、果物出して。」

『いや俺手が無いの知ってるだろ!!!』

「出して。」

『はいはいこれでいいんでしょ!!? 本当アズは骨使い荒いぞ!!』

そういうやり取りを経て、アズリエルと言う少女は左手にリングを持った。

そして、目に見えない速さでデルタの腹部をその大きな鎌で貫いた。

「ブツ……!!」

「デルタア!!!」

貫いた鎌はデルタの体から噴き出した血で真っ赤だった。

俺はその血を見て、恐怖のあまり動けなくなつたんだ。

「あ……ああ……!!!」

デルタの目がどんどん生氣の無いものになっていく。デルタの体がどんどん血で赤くなつていく……

「フ……ファイリ…… ツプ…… 逃げ…… ろ……… 生き…… 延び…… ろ……」

デルタが最後にそう言葉を残すが、俺は恐怖のあまり放心状態となつていた為、その場を動くことすら出来なかつた。

「…… 骨三郎、どう?」

『おう、ばつちり成功してるぜ!!!』

「……… そう……… これ、いらないからあなたにあげる。」

彼女等は俺の元にあるものを投げ込んできたんだ。

「……………何だ、これは……」

なんとか言葉を出す事の出来た俺に、彼女は言った。

「……骨三郎。」

『めんどくさい説明は全部俺任せってか!?!… お前ならわかるだろ? 悪魔の実さ……
それも、今アズが殺したデルタの能力だよお!!』

「……………殺した……何を言ってるんだ……………デルタなら……そこにいる……」

『ヒヤハハ!! コイツ現実が受け止められなくなってるぜ!!』

「……彼は、幸福者。」

幸福者、俺はその言葉に反応する。

「……幸福者?」

「そう、肉体と言う枷から、生という地獄から開放された、幸福者……あなたは違う。あなたはただの不幸者。今日という日を一生トラウマにして生きる不幸者……だけど私は優しいから、チャンスをあげる……その実を食べて、この日のことを一生後悔しながら生きるか、それとも死ぬか。」

この時の俺は死にたい気持ちでいっぱいだった。親友を失い、その親友の国にいながら何も出来なかった自分に怒りの感情もわいた。

「ちなみにどちらも選ばない場合、私は何もしない。」

『!!おいおいアズ!!』

「いいの。」

「……どちらも選ばない。それだけはあるえなかつた。」

それは、この国から、親友から、逃げるのと同義だつたからだ。

そうしてしばらく沈黙が続いた。聞こえるのは町が燃える音だけ。その中で俺はど
うするか考えた。死んで楽になるか、彼の能力を得て生きるか。

考えて考えて、気がつけば夜は回り、日差しがこの王室を照らしていた。
そうしてやつと一つの結論に辿り着いた。

あいつの分まで生きて、いつか必ず、この女に一泡吹かせてやると!

だから、こう答えた。

「……俺は……生きる!!!」

「そう、じゃあその実を持って、こっちに来て。」

いつか復讐するためだと思つて俺はその女に近づいた。

「骨三郎。」

『あくはいいはいい、やりますよつと』

頭蓋骨はそう言うのと纏っているオーラを大きな手に変化させ、俺をつかんだ。

『たしか『ザビエル』はあっちの方向だったな…』

その言葉に俺は一つの疑問の覚えた。

何でそんな事を言う。

その疑問に答えるかのように頭蓋骨は窓の方に近づいて

『あばよ!!馬鹿国王!!!達者でな!!!』

そう言つて俺を空に向かって投げたのだ。

「… こうして俺は自分の国に戻り、全王国に俺が能力者になった事、友の国が滅んだ事、アズリエルという化け物の事を伝えたわけだ。」

… その前に一つ言わせてほしい事がある。

「フィリップさん? 何で投げ飛ばされて生きてるんですか!!?」

「… ケハハ、さつき見せただろ。俺の能力… 『リセリセの実』の力だ。」

… やっぱ能力者だったのか。この人。

「『リセリセの実』のリセット人間。あらゆるものを指定の時までリセットできる力。俺はこの力で大怪我を一日前の自分の状態までリセットしたから無傷なわけだ。」

…結構チートじゃない？それってつまり自分が死ぬって時とかに自分の体を最盛期に戻したら不老不死と言っても過言じゃないし、オペオペの実でオペしなくても病気になる前の自分の状態までリセットすればいいだけだもんね。しかもさつき使った感じ周りのものにも影響を与えられるとか…ごめん、私のよりチートだわ、その能力。」

「…どうした、そんなに顔を青ざめさせて。」

「いやいやいやいや、なんでもないですよ!!」
 フィリップを敵に回すのだけは絶対にやめよう。そのアズリエルって子に同情するよ

「…ケハハハ、まあ、いい。それより国一つを壊滅させたアズリエルについてだ。」

「手配書は出来ているのか?」

「海軍に連絡してサンプル程度ならもう出来ている。これだ。」

そう言ったある国の王がその手配書を会場中にばら撒いた。サンプルだぞ?もつと大事に扱えよ!

そう突っ込みたくなったのを我慢しつつ、ばら撒かれた手配書を一枚拾う。

その手配書には大きな鎌を持ち、フードを被った赤い目の女の子とけらけら笑う不気味な骸骨が写っていた。

【死の鎌】アズリエル&骨三郎
デッド・サイス

懸賞金3億2000万ベリ

この手配書を見て思ったことは、

「やった事の割に金額は低いな。」

「いや、過去最高額だ。彼女はこれで初頭手配だからな。」

訂正、あのルフィでさえ初頭3000万。この子は化け物だ。

「… 成程… フィリップ、聞きたいことがある。」

「なんだ、コブラ。」

「このアズリエルは確か、デルタ王が何かを話そうとしたときに現れたんだよな。」

「そうだが。」

「… なぜ、言おうとしたタイミングで現れた？」

「… 確かに、言われてみれば… 奴等はデルタが俺に何かを話そうとしたときに現れた。「その話はさせない」とも言っていた。」

成程、つまり彼女はそのデルタという王と何らかの関わりを持っているわけか。

「… おいおいカバ共。今俺様達はそういう話をしに来たんじゃない。ここは世界会議だぞ。」

「なんだと!!?俺はその憎い女に親友を殺された上に生かされたんだぞ!!?」

「わからないのかカバが、そう言う私情は自分の国で勝手にしとけ。俺様の国には関係

ない。」

「滅んでるんだぞ!! 大国が!! 一人の女の手によって!! それは関係ないの一言で済む話じゃない!! お前の国にだってその女は来るかもしれない!! そうしたらどうする気だ!!! そんな発言をした以上、おまえを助ける国なんか無くなるわけだぞ!!!」

「まーっはっはっは!!! 助けなんぞ要らんわ!!!」

あいかわらずワポルは感じ悪い。

よく世界会議^{レヴェリ}でそんな発言が出来るもんだ。

「…その発言を撤回しろ、ワポル。」

そこである男が始めて言葉を発した

「ああん!?!?! き、貴様はリク・ドルド三世!!!」

「フィリップが言った事は正しい。国を一夜で滅ぼす時点でその女は四皇レベル、そんな女を野放しにすればいずれは世界問題と化す。これ以上の被害が出ないうちに消さなければ危険だ。…いいか、ここで取り上げられる時点でその問題を無視する事は出来ない。むしろ私情を言っているのは君の方だ、ワポル。」

思いつきり論破されたワポルに呆れの視線があちこちから集まる。

「…くそ!! リク!!! 貴様ア!!!」

…すいませんワポルさん、あなたどんどん傷口広げてますよ。

「… さて、そのアズリエルの対策なんだが… 海軍本部から中将クラスの海兵を雇うってことでいいのではないか？」

… リク王？何言ってるの？

「確かに、そのルイン中将のような猛者がズラリといますからね。」
… え、ちよつと？

「… 私は自分の国で対処できるからいらないんだが。」

「私の国は必要だ。」

「ミーの国も!!」

いつの間にか、どの国がどの海兵を雇うかと言う話で持ち切りになった。

「… フィリップさん？」

「なんだ。俺はお前を雇うつもりだが。」

「… そうですか。」

いやなんですけど、一回海軍本部に帰ってゆつくりしたいんですけど。

「待て、フィリップ。私が雇うのだ。」

「コブラ… お前にはやらんぞ!!」

「いや、私だ!!!お前達!!!」

「… えー、今回の世界会議レヴエリの結論だが、『ルイン』はこれからも我々世界側として共に悪と戦うと言う事、【死の鎌デッド・サイス】アズリエル&骨三郎対策として加盟国全てに海軍本部中將クラスのを配置。アラバスタがボルサリーノ、ドレスローザがルイン、ザビエルは…」

結局、世界会議レヴエリで私の意見が通るはずも無く、海軍本部中將クラス全員が各国に配置される事になった。

… ふざけんなよ。なんで新世界なんぞにいかなきゃならないんだ。私はマリルフォードでゆつくりしたいのに…!!!

あゝあゝ… イライラする…!!!

「… えーと、ルイン君、これからしばらくよろしくな…。」

「ええ、よろしくお願ひしますリク王様。」

よりよって言いだしつべのリク王んとこだし、気分はBAD!!!

デッド・サイス
死の鎌め…!!! 覚えておけよ!!!

「…ぷっ… アツハハハハ!!!」

「笑うなルイン君!! 待ってくれえ!!!」

コブラがあまりに無様すぎておもわず声に出して笑ってしまう。

「… フツ」

「がっ…」

リク王がまるでコブラを馬鹿にするかのような笑い方をし、コブラに止めを刺す

「… ちなみにリク王。」

「何だルイン君。」

「私がドレスローザに行けば、ロキ中将と私の部下もセットで来ますからね」

「何… だと…」

リク王は頭を抑えその場にしゃがみこんだ—

アズリエル side

新世界、オルゴス島

人口約2000人ほどが暮らす集落。

私と骨三郎は今、この集落に潜伏していた。

「はい、ユウちゃん。新聞。」

「…ありがとう。」

ユウという偽名を使つて。

勿論、骨三郎には隠れ家で隠れてもらつてる。

「…!!」

その新聞には、死デッド・サイスの鎌アズリエル&骨三郎と書かれた手配書が。

(もうここにもいられない…!!)

私は隠れ家に向かって走つていった。

ドレスローザ編 『ドレスローザ』

世界会議後、宮殿の端つこの方で座っていた三人に世界会議で話し合つた事全てを説明。師匠は顔を引きつらせていたが、他の二名は快く了承してくれたので私達四人でドレスローザに滞在する事が確定した。そして赤い港レッドポードで買った赤い土レッドドラインの大陸饅頭を三人に渡した。ニコラだけは「俺食えないから、返すよ」と言つて私に饅頭を返却してきた。せつかく買ったというのに。

私も今食べる気はなかつたのでリク王の口の中に無理矢理詰め込んだ。そうすれば「よく王相手にそんな事が出来ますね!」と突つ込みもいただいた。

リク王は饅頭がおいしかったのか、赤い港レッドポードの例の店で大人買いをしていた。

そうして今、私達は海の上、元々リク王が新世界側の赤い港レッドポードから来ていたので、思ったより長旅になる事はならなそうだ。

……と言つても、ドレスローザまでは少し時間がかかる。その間は自由に過ごしてくれとリク王に言われた。

そこで私は重大な事に気づいた。

—やる事が、無い

以前あれほど休みを欲していた私だがいざ休憩しようとしても、思いつくのはセンゴクさんの胃の調子はどうなんだろうとか、サカズキとクザンは無事昇格したのかとか、同僚とかのことしか思いつかない。

……もしかして私ってかまってちゃんか？

他の三人は三人で別々の事やってるし、それを私が邪魔するわけには行かない。

—ああ、どうしたもんかなあ……。

プルプルプル、プルプルプル

突然、鞆の中に忍ばせておいたでんでん虫が鳴り響く。タイミング良すぎか！こんな
にうれしいでんでん虫はないぞ!!

私は大喜びででんでん虫に出る。その時の私はそのでんでん虫がセンゴク専用の物
ということを完全に忘れていた。

「はいもしもし!!ルインですが!!!」

「……ずいぶん楽しそうだな……!!!ルイン!!!」

「……はい？」

「何故海軍本部中將が各国に配置される事になったのだ!!聞けばルイン!!貴様もその議
会に参加していたらしいな!!!」

… あ、マズい…

「我々海軍に中将クラスの実力を持つ者は数十名しかいない!! その数十名を190ヶ国以上ある加盟国へばら撒けば海軍本部の戦力はどうなる!!」

「… いや… そのことに関しましてはリク王が… 貴様がその場にいた時点で言い訳は通用しない!! 貴様がその場で我々海軍には加盟国全てに派遣できるだけの中将クラスはいませんと言えれば良かったものを!!」… そのことに関しましては申し訳ございませんでした! しかしアズリエルを捕らえればこの指令も解除するという事になっておりますのでへもう彼女の手配書は全世界に公表している!… 全く、ここまで海軍を動かせるその少女とは一体…」

「そうか、センゴクさんはまだ知らないのか、彼女の事。」

「彼女はデルタ王国を一夜で滅ぼした化け物です。」

「何イ!!… だからこのような政策を… ちなみに、その事件が起こったのはいつだ。… 確か二日前だと。」

「成程、まだ南の海サウスゲルを抜けていない可能性があるな… 王達には悪いが、私達の方で配置する海兵はこちらで決めさせてもらおう。君はリク王といると言う事はドレスローザに行くのか。」

「はい、そうですが。ロキ中将たちも一緒に。」

へわかった。では君達はこのままドレスローザへ向かってくれ。
「何故？」

へ新世界の海賊は桁違いの強さを持つものが多い。対処できるのは君達のような兵のみだ。へ

「わかりました。では。」

へああ、頼んだぞ……。ああ、中将を増やさねば……。へ

そこででんでん虫は目を閉じ、眠りだす。

「あああ……。鬱になるわ……」

本当、上司に怒られるのは心にク。しかも今回は私が起こした騒動じゃないってのに。

本当、上下関係ってのは理不尽だよなあ……

「さて、そろそろ着くぞー！ルインくブゴバアア！！！！」

全ての元凶が勢いよくドアを開けてきたので思いつきブン殴ってやった。

ドレスローザに着いた。入国の際にリク王が国民達にその顔はどうされたんですかと聞かれていたが、私を庇ってか甲板で転んだと言いその場を和ませていた。ペル達も最初はリク王のたんこぶだらけの顔を見て一度動揺していたが、私が殴った事を知ると爆笑していた。

「しっかしルイン。まさかお前がそんな事するなんてな。」

「いや笑い事じゃないですからね！本来だったら首が飛んでますよ!!」

「フツ…」

「いや笑い事じゃないですからねニコラさん!？」

本当、こいつ等は私が国王を殴ったというのにぶれない。あまりにいつも通りな彼等を見ると思わず笑みが零れてしまう。

だが、そんな感情に浸っている暇もない。重要な問題がある

「…まず住居だ。私達が住むスペースを確保しよう。」

「ルイン君、それなら王宮に来ればいいではないか。」

「いや、私は国民達と仲良くしたい。王宮なんかに住んでしまえば、それこそ国民達に身

分の高いものだと思われてしまい、いささか遠慮がちになるんじゃないか？」

「む…それはそうだが…。」

「」

こつちに来る原因を作ってしまったのに申し訳なさがあるのかリク王はなかなか引き下がろうとしない。申し訳なさがあるんだったら私がやりたいって言ってる事に反対しなければいいのに。

… だつたら、こうしようか。

「…じゃあ、あなたが私の家を建てるときに全額負担つてことで。」

「何!?!… まあ、こちらに連れてくる原因を作ったのは私だからな。そうさせてもらう

よ… となつたら少し大きめの家を作らねばならんな…。」

「いや、小さめでいいぞ?」

「…え?」

「…え?」

…

あれ、なんか気まずいな。もしかして何か今考えている事にすれ違いがあるのか?

「…君達は四人で住まないのかね?」

「え…」

「彼等も一緒に住める家にしようかと思っていたんだが…」

「… ああ！成程！そういうことか！！だったらぜひそうして欲しい。わざわざ四つの家を建てるのもリク王に負担がかかるだろうし。」

「ちよつと!!?何で僕たちの意見を聞かないんですか!!!」

「何だ、もしかして嫌なのか？」

「い、いや…それはさすがに……」

「俺は別にいいぞ。お前とは前から同居してたしな。」

「… オレも。」

ペル以外の二人が了承した為に、ペルに周りからの視線が集まっていく

「… わかりましたよ！住めばいいんですよね住めば!!」

「… フツ… ガキだな、お前。」

「僕を子ども扱いするなア!!」

ペルが獣人化してニコラに掴み掛かるが、ニコラは大して痛そうな表情を見せない。それどころか獣人化しているペルを暖かい目で見ていた。

「… 本当、覇気も使っていないのに何であんな平気でいれるんだ…?」

「あいつは変わってるからな。もしかしたらこれから生活する上で一番面倒なのはアイ

「ツかもしれないぞ。」

「へえ……食べる物が違うとか?」

「……お前は超能力者か?」

「……え、うそ?」

……今度彼にいろいろ問いただす必要があるな。

「……まあ、即行で家を建てておくから、君達は観光でもしてきなさい」

「おつ!!それはいい!!!おい!ペル!ニコラ!!喧嘩してないで早く行こう!!」

「……だつてさ、ペル。」

「……!!覚えていてくださいいね……!!!」

今現在、私達とはあるレストランで食卓を囲っていた

このレストランの名物は「ローズイカのイカ墨パスタ」。正直言おう、めっちゃやうまい

!!箸が進む進む!!

……あ、フオークだったわ。

「食事中のどこ悪いが、これからどうするつもりだ?」

「んぐんぐ……どうするって……いっぱいあるよ?すること。」

「例えば？」

「ペルの鍛錬、アズリエルの搜索、海賊潰し、私の部下探し。」

「…… お前に部下は必要か？」

「まあ、必要ないっちゃないけども、信頼できる部下つてのはやっぱり欲しいよね……」
そうしなきゃ私の^{悪魔の実}2億が無駄になる。

「おお!!僕、強くなれるんですか!!?ルインさん達みたいに!!!」
ペルが期待の眼差しをこちらに向ける。

「師匠までとは行かずとも、私くらいになら余裕でなれる。」

「おおーツ!!!」

私なんて能力が無ければ少将レベルの腕だからな。ペルなら余裕で私を超えるだろう。それより気になる点が一つ

ニコラが一切食べていない。

「…… それにしても、食べないのか?ニコラ?」

「食えない。」

「え?」

食えない事はないだろう。だってこんなうまいのに。もったいないなあ。

そう思ったのでこう言ってみる

「いらぬのなら、私が貰っていい？」

「ああ、オレは口キから飯貰うから。っていうことで、くれよ。」

「……ここで食うのか？」

「ああ、どうせいつかはバレるんだし、いいだろ。」

師匠は「これ、触るの嫌なんだけどな……」と言って懐から何かを取り出した。

「……何……それ……」

師匠が手に持っていたのは白色の石だった。

「ほれ。」

「おお!!これこれ!!!」

いつもなら死んだ目をしているニコラが無邪気な子供のようにはしやぎだした。

石もって騒ぐ奴なんてクレ○ンし○ちゃんのボ○ちゃんくらいだと思つてた

「うめえ……この濃厚な味が何とも……」

……まあ、本人が嬉しそうだし、この件に関してはもういいか。

私はイカ墨。パスタを一口嚙り、ペルの方を向く

「明日からみっちり鍛えるからな！」

「本当ですか!!」

現時点で見聞色の素質を見せているペルを育成するのは実は簡単である。

素質を持つものは訓練の中ですぐ感覚を掴む、私はただ、その掴むまでの工程を見てやればいいだけ。後からは自分で育っていくだろう。

ある考えもあるしな……

「……お前等が訓練に励むって言うんだったら、俺達はどうしようか。」

「師匠達は観光でもしてなよ。ただし、海軍の制服は着ない事。周りから変な目で見られたくないでしょう?」

最も、本心は国民達に親近感を抱いてもらいたいって言うわけだが。

「……そうだな、そうするわ。ニコラ! お前行きたい所あるか?」

「……………無い。」

「そうか、だったら適当にブラブラするか……んじゃ、俺とニコラはお先。お前等の分まで代金は払っとくからゆくり食べるよ。」

さつきまで師匠の周りにあつた山盛りの料理は私の気づかぬうちに全て消えていた。ニコラが食べなかつた分まで消えていた。

彼はどれだけ早食いで大食間なのだろう。私は少し引いてしまった

そして取り残された私達は黙々と料理を頬張り続けた。

『八尾比丘尼』

ロキ side

俺はいろんな国を見ている。砂漠の国や春島、東の海の辺境も。ここも仕事で来たことがある。その時はただ仕事のことを考えていたから、ただ来たことがある程度の認識でしかない。

だからめいっばい見てやろう。俺達がこれから住む国はいかなものか見てやろう。違う目線から見たらこの国はどんな風に映るのだろうか。

そう思った俺はニコラを引きつれ、人ごみの中に紛れていった――

まず俺達はルイン達と飯を食べた店を出た後、町の大通りをひたすら直進していた。ほとんどの家が石レンガで建てられていて、ごく一部の建造物は木材が使用されている。

マリソフオードの家と比べると重量感がある。しかもどの家も単調な色だな。建物だけを見れば無表情、何も感じない。

—さあさあ、取れたてのドレスエビだよ!!今ならお安くしとくよお!!!

—皆さーん!!こちらの服はいかがですかー!どんな男性でもかつこよく着こなせる
タキシード!!

—ママー!!あれ買ってー!!

—うっし!!今日もいい汗かいた、なあ!?兄弟?

—全くだ!

：：： そんな街中だからだろうか。国民の楽しそうな声がやけに耳に残る。無機質な背景に映る賑やかな国民達は、俺の目から見ると輝いて見えた。

「いい町だな、ロキ。」

「：：： ああ、いいな。マリソフオードみたいだ。」

「フツ：：：： ふわあ：：：： あのお店寄るか?」

「そうだな、行こうか。」

ニコラが珍しく興味を示したからな。寄らない手はなさそうだ。

中に入ると、薬品のような物が入ったボトルがそこらじゅうに置かれていた。そのボトル一つ一つにラベルが巻かれていたので、近くにあった一つを手にとつて見る。

「……『爆蓮』……?」

……聞いたことも無いな。政府公認ではなさそうだ。

俺がまじまじと『爆蓮』を見てみると突然、服の裾を引つ張られた

「お客さん……危ないですよ……それ……」

「うおおッ!!!」

俺は驚いて思わず『爆蓮』を放り投げてしまう。白髪ロングの女性が幽霊のように現れ、俺の裾を引つ張つたのだから。

「ああ……!! 私の『爆蓮』が……!!!」

彼女は流れるようなスピードで『爆蓮』をキャッチ。傷は無いかとボトルを念入りに見た後、もとある位置に戻した

「……すまん、驚いてつい……」

「いいんです……私が裾を引つ張らなければこんな事にはならなかつたんですか

ら……。」

……優しい店主だな……普通なら起こっても仕方の無い事なんだが。

「……ここ、何の店？」

「あら、お連れ様がいらつしやつたのですね……！ここは薬屋【八尾比丘尼】といいます……ちなみに私は店主のエミリーです……。色んな薬を扱ってますから……」

……どんどん彼女の声小さくなっていく、ニコラは気にしていないようだが。

……言いたくないが、この人。

「コミュ症ですね？」

「あうう!!!」

「容赦ないな、お前……」

……あ、口に出てしまつてたか。

「……そ、そうですよ!!……本当に……」

……どうやら彼女はコミュ症がコンプレックスなようだった。

……こういう人種もいるんだな。俺が知る女つていつたら生意気女ルイくらいしか知らないしな……

「悪かった。お詫びに今日なんか一品買つてくよ。それとこれからも鼻屑にさせてもらうよ。」

「本当ですか!?!… なら許します!」

「… 急に切り替わったな。」

「♪」

「鼻歌まで歌いだしたぞ……」

「さて… その薬品を買おうか… って言っても気になっているのは一つだけなんだが」

「店主さん、『爆蓮』は一体どんな薬品なんですか?」

「はい!… 『爆蓮』は私の作り出した爆薬です。空気に触れると化学反応を起こして大爆発を起こします。… 正直言つて、火力は『ダイナガン』と同等ぐらい!」

「!! 『ダイナガン』だと!!」

「… 何それ。」

「… 兵器だ。それ一つで島を一つ地図上から消せる。」

「へえ… そんなおつかないのと同等、ねえ…」

「ちなみに店主さん、量産出来るのか?」

「ええ… ですが、今はその気がありませんので、現存してるのはその一本だけですな。」

「… これは俺達が管理するしかない。こんな店に置くのは危険すぎる。」

「… 店主さん、これ買った!!」

「はい！お値段は一億ベリーになります！」

…ん？聞き間違いか？

「…えーつと「一億ベリーです」…あ…はい。」

これも世界を守る為と、泣く泣く俺は一億ベリーを支払ったのだった。

『コロシウム』

その後、俺達は無事？店を出て、再びブラブラする事となった。

「………… お疲れ。」

「言うな、只今記憶から抹消中なんだよ。」

「それを手に持つてる限り、抹消なんてできないと思うが。」

俺は手に持っているボトルを見る。

『爆蓮』『ダイナガン』と同等の火力があるらしい爆薬。俺がこれを厳重管理するため買ったんだが……

…… 普通、1億もするとか思わんだろ？何かその場の空気に流されて買ったけども。

「…… 後が怖いな。」

ニコラがニヤニヤしながらそうつぶやく。コイツ…… 人事だと思いやがって…… !!

…… よし、これは見つからないように隠す事にしよう。

「これから何するの。本当に暇だぞ、オレ達。」

…… 本当だな。何もすることないな。この島の物は結構見たし…… 見てないって言ったらコロシウムくらいか……

…ん？コロシウムⅡ暇が潰せるⅡストレス解消Ⅱ行くしかない

「…とりあえずコロシウムにでも行くか。」

「わかった。」

とりあえず暇と苛々を紛らす為にコロシウムへ向かう事にした。

「…思ったよりでかいな…ここ。」

コロシウム前まで来たが、想像の2倍はでかい建物だった。いかにも闘技場といった建物である。

ここに来る道中で国民に話を聞いたんだが、今から行けばまだエントリーが出来ること。暇潰しにはちょうどいい。

…と、思ったが俺が行けばおそろく無双する。それでは参加者も可愛そうだな。

…あ、そうだ。面白い事考えた

「ニコラ！エントリーしてこいよ！俺お前が戦ってるのあんまり見たことないからさ。」

「……いいぞ。オレも暇だしな。ロキは参加しないのか？」

「俺はおそらく無双して終わる。だから観戦するわ。」

「……わかった。」

ニコラはそう告げて受付へ向かった。さて、お手並み拝見と行こう。

ニコラ side

ロキが参加しろというから受付まで来たが、実を言うと戦いなんてそこまでしたくない。

—争いは何も生まないと知っているからだ。

……なら何故参加したって？ロキに言われたから。

何か矛盾してる？……まあ、どうでもいいや。

「……参加は、ここで合ってるか？」

「はい、こちら殺生禁止コロシウムエントリー場でございます。参加される場合はこちらの書類にお名前を。それと職業を。」

受付上から紙とペンを渡されたので『ニコラ・アデル』と記入する。職業か。たしかセンゴクとか言うおっさんが俺の事を『海軍本部大佐』って言ってたな。

じゃあ、そう書いとくか。

そうして書き終えた紙を受付嬢に渡す。

「：： はい、ありがとうございます。それではこちらの紙を持ち、奥の方へと進んで行って下さい。」

また紙を渡される。それには「Aブロック」〔1494〕と書かれている。

：： おそらくエントリー番号だろう。

「ありがとうな。」

「はい、頑張ってくださいね。」

さて、頑張るか。

奥へ進むといかにも荒くれ者といった男達が大勢いた。

全員が凄まじい闘気を放っている。

「今日こそ奴を倒すぞ!!お前らア!!!」

—オオオオオオオオオ!!!

熱気ムンムンなここはオレにはちよつとキツイな…。

もうちよつと静かな場所を探すか…。

「おい、そこの君!」

さて、あつちの方角から光が差してるな。行つてみるか。

「君!!黒衣の君!!」

… うるさいな。

「……… 何？」

「ああ、聞こえてなかったと思つたよ。君も出場者か？」

「そうだけど… 何か用。」

「おれはナツク。剣闘士だ。君がこの場の空気が嫌そうにしてたからね。お勧めの場所を紹介しようと思つたんだ。」

ナツクと言う彼はお人よしのつもりでオレに声を掛けてらしい。オレからすればありがた迷惑でしかないが。

… だが、せつかく声を掛けてきてくれたのだ。そのお人よしに乗つかる事にするか。

「… そうか、じゃあ頼むよ。」

「わかつた！着いて来て!!」

言われるがままに着いて行つた。

… 最近、人に着いて行く事が多い気がするな…。

「着いたぞ！」

大きな窓があり、闘技場を一望できる場所だった。さっきの所より静かだし…

「…いいな、ここ。」

「そうだろう、俺のお気に入り場所だからな！…： そういえば名前は？」

「…： ニコラだ。」

「そうか、よろしくな。」

彼が手を差し出してきた…： ああ、面倒だが握つとくか。

差し出した手を握ると、彼は笑顔になった。

そして、ふと闘技場を見つみるとさつき見た荒くれ者達がざつと100人ほど立っていた。

「…： ああ！もうすぐAブロックの試合が始まる！俺はBブロックだからただだけど。」

「…： そうか、じゃあオレも行くか…：」

「え!?ニコラAブロックなのか!?今から入場口まで戻るのはキツイかな…：」

「大丈夫だ。」

オレは窓へと歩き出す。

「ま、まさか… 飛ぶつもりかい？」

「ああ、速く着くだろう？」

「……………」

また後で来よう。いい所を覚えてくれた。

ロキ side

無事に観客席に座る事の出来た俺は司会の演説を聞いていた

『さてさて!!殺生禁止のコロシアム、Aブロックの試合がまもなく始まろうとしています!!見て下さい!!闘技場を!!総勢100名の強豪達がああ男を倒すべく、闘志が燃え滾ってるではありませんか!!』

—ウオオオオオオオオオオ!!!奴は今日必ず倒す!!!

—いや、俺だあ!!!奴を倒すのは!!!

… どうやら相当な手練がいるらしい。これは見物だな。

だが、ニコラの姿が見えない。あいつ、配られた紙にAブロック出場って書いてたんだが。

『!!見て下さい!!選手待機室の方から何かが飛んできます!!!』

瞬間、コロシウム全体が揺れ、闘技場のリングに亀裂が入った。

—派手な登場するじゃねエか。ニコラ。

周りが動揺する中、ニコラは一言告げた

「—壊れるなよ、お前ら。」

『圧倒』

ニコラ side

オレがコロシウムに下り立った時、コロシウムは静寂に包まれていた。

観客も選手も皆オレから視線を離せずにいるようだ。

……さすがにちよつと目立ちすぎたか。でもこれくらいしか思いつかなかつたしなあ……

『……え、ええと……か、彼はニコラ・アデル！Aブロック最後の参加者です!!……それでは……Aブロック、スタートです!!』

簡単すぎるだろオレの説明……もつと触れるところあるだろ。まあいいけど。

……傷つけないように、尚且つ勝つ。

「ウオオオオオ!!!」

早速一人の剣闘士がオレに向かい走ってきた。目には恐怖と高揚の二つが表れている。

——恐いか、オレが。それでも立ち向かってきた事は凄いと思うぞ。

「オラア!!!」

剣闘士の剣がオレを斬らんと大振りで降りかかる。だが、その剣筋は余りにも直球かつ読みやすい

当然、その剣をいなし、隙ができた相手の胴を担ぐ

「何しやがる!!」

「傷つけずに勝つんだよ。」

観客席とリングの間は水で満たされているのでそこに向かって投げればいだろう。

簡単だな。

「う、うわあああ!!」

オレは担いだ剣闘士をそこに向かって放り投げた。

しかし、そんな俺の行動に飛び交ってきたのは罵声だった。

「技を見せろ!!ここは神聖なコロシウムだ!!!」

「さっきの演出で期待したが、その程度なのか!!?」

「……成程、認めてもらえないか。ああ、出来れば痛めつけたくなかったんだが。」

「へッへッへ…… お前みたいな腰抜けなんざ、このコロシウムに立つ資格はねえんだよ

!!!」

「ぎゃははは!!! やつちまえ!!」

…… まあ、コイツらで魅せればいいか。

「ぐえっ!!」

「寝てろ」

二人の剣闘士の頭を掴み、お互いの頭を思いつきりぶつけてやる。脳震盪を起こすつもりでやったが、彼等の頭は血まみれで見るに耐えない姿となっていた。

そんな彼等を見て青ざめた観客にオレは言った。

「… あんまり刺激しない方がいいぞ。神聖なコロシラムに死人が出る。」

そんなオレの一言が剣のように刺さったのか、彼等はそれっきり何も言わなくなってしまう。

… まあ、ちょっとやりすぎたかな。善処しよう

「… ハハハハハハ!!!!面白エ奴が来たじゃねエか!!」

… 今度は巨漢だな…。

『おおつと!!今大会のダークホース、このドレスローザを攻めてきた賊を計100名ほど血まみれにした男『血塗れのアスク』が動き出したア!!』

… へえ、アスク、か。まあ楽しめるだろう。

「さて… お前はどうか弄んでやろうか…。」

「… オレは多分負けない。」

「その威勢がいつまで持つか楽しみだぜエ!!?」

「……こっちのセリフかな……」

巨漢の拳とオレの拳がぶつかり合う。その余波で何名かの剣闘士（鱈）を場外に吹き飛ばした。

この事よりコイツはそこらの剣闘士（鱈）よりは強いという事がわかる。

「ハハハハ!!もつと本気で来いよ!!」

拳と拳がぶつかり合う中、巨漢は余裕を見せている。おそらくまだまだ余力を残しているのだろう。それでもつてオレの拳と張り合うだけの力を持っている。

賞賛に値する……。だが、オレは起動してないし、出力も上げていない。その時点でオレが負ける事は万一にも無いだろう。

オレとしてもこのまま睨み合うのはめんどくさい。だから、出力を上げるか――

「ハハハ……ん…… おおお!!?」

『おお!!押されています!!あのアスクが!!』

司会の一言で歓声が沸き立つ。巨漢はその歓声に焦りを見せた。

無論、オレがその瞬間を逃す訳が無い。巨漢の腹や顔、間接にどんどんパンチを入れていく。

本気を出される前に潰せば、無駄なエネルギーを消費せずに済む。

「がっ!!ぐぼっ!!……ぐぼあ!!!」

『……!!!』

会場は騒然とする。彼等からしたら予想外なのだろう。オレからすれば予想通りだが。

どんどんたんこぶができ、腹や膝が赤く腫れかけてきた。そろそろ頃合だな。殴るのをやめた途端、彼は声も上げずに倒れこんだ。

『……た、倒してしまった……!!!あのアスクを!!!』

—うおおおおお!!!

—すげー!!!

—かけー!!!

—アスクが……負けた……!?

コロシウムを歓声が支配する、とは逆に剣闘士達は絶望の渦に囚われた。

曰く、アスクを倒した奴に俺達が敵う訳ない、と。

……だが、ここは神聖なコロシウム。オレは技を見せる義務がある。

可哀想だと思いつながらもオレは一步一步、彼等へ近づいていく。

「「降参します!!!」」

剣をコロシウムに放り捨て、剣闘士のプライドはどこへ行ったのやら、彼等は思いつ

きり頭を地面につけていた。

こんな恥さらし、オレなら絶対したくない。

『… 貴様等…!!! コロシアムで降参とはどういうことだ!!! キュロスを倒すのではないのか!!?』

「うるせエ!!! 俺達はいいつに懸けるんだ! 打倒キュロスという夢をこいつに!!!」

「キュロスでさえ手間取るアスクをニコラさんはあつけなく倒したんだ!! 俺達が勝ち上がるより絶対に可能性が高い!!!」

『……………』

司会、観客、剣闘士の視線が一気にオレに注目。

何か言わなきゃいけないのか…

『… あのさ、お前等の夢を勝手に託されても困るんだよ… だけど、さっきの奴含めそこまで倒したいって言う奴に俄然興味が沸いた… 降参したいならすればいい。降参しない場合はお前等を場外に投げ飛ばすだけだしな。安心しろ、痛くはしないから。』

『… だそうだ。』

… こうなったら降参してくれた方がうれしいんだが。

『… ははは、だつたらいつちよやるか!』

「そうだな、安心して戦える」

： どうやら満場一致でリタイアはしないとのこと。

痛くしないって言わなきゃ良かったし、痛くしないって逝った途端にやる気になる彼等もどうだろう。

幸い、残ってたのは9人。軽く相手をしてやろうか。

私用

ルイン side

戦闘^{師匠たち}狂に置いてけぼりにされた後、取り残されたご飯をあつという間に完食した私たちは食後のデザートと言う名義で隣のカフェに来ていた。私たち動物^{ゾオン}は燃費が良くないから食料は取れるだけ取っておきたいのだ。

・・・ 本当だからな？

「あ、あの・・・」

向かい側に座っているペルが申し訳なきそうに話しかけてくる

「何だ、遠慮は無くてもいいぞ？」

「は、はい・・・ 僕たちつてどのくらいの期間ここに滞在するんですか？」

いい質問だ、答えて進ぜよう

「アズリエルの捕縛と私用を済ませるまで。恐らく年単位で滞在する事になる。」

「私用って何ですか？」

「私直属の部下を三人ほどスカウトして、今の私レベルまで鍛えぬく。」

そう、私もそろそろ部下が欲しい！だつてガープ見てみ！？あのじいさんにはもつたい

ないレベルで優秀なボガードさんいますやん!!あれみたらさすがに欲しくなる。

「ええツ!!そんなんですか!？」

「ああ、ちなみにペルも私直属の部下にしようと思うがいいか？」

「……!!はい!!」

断られたらどうしようかと思っただけで、案外嬉しそうで良かった良かった。

「じゃあ、気持ち早めに食べてここを出よう。安心しろ、私のおごりだ。」

「…… 絶対この話が無かったら僕に奢らせてましたよね。」

「……… そんなことない」

「嘘が下手!」

店を出て数分道を前へ直進した頃の話

「さくで、探すと言つてもねえ、コロシウムには行けないし……」

「そうですね…… あ、ロキさんに電話してみてもどうでしょう!彼僕らより先にた

いられて出て行きましたし、心当たりがあつたりするんじゃないですかね?」

「ペル…… お前は天才か?」

「いやあ…… へへへ」

天才が言ったように師匠ならもう既に色々見てるはずだ。電話して聞いてみよう。

プルプルプル、プルプルプルガツチャ。

へはいこちらロキ、何用だ？ルイン。へ

「師匠店出て行った後コロシラム以外にもどこか行った？」

へあー行ったな、何かニコラの奴が薬屋に行こうって言つてなあ、その店に寄つた。へ

「何て言う名前の店だ？」

へ『八尾比丘尼』って名の店だよ。妙な存在感放つてるからすぐわかる。へ

八尾比丘尼……前世の世界では確か不死身の人魚の名前だったかな？恐らく関係は無いだろうが

「ありがとう師匠、行つてみることにするよ。」

へああ、あと……へ

何かを言いかけたが言い切る前に電電虫切つたので良く聞き取れなかった。まあ、それほど大事な事でもないだろう

ペルに行き場所が決まつたと告げる

「へええ、知らないですね。初めて聞きましたよ。」

「いや君がこの住人？……っていか目の前にあるあの店がそうじゃないか？」

「……あ、確かに……人一人入ってないですね。」

「失礼だぞペル、以後控えるように」

「… 善処します」

そんな会話をしながら『八尾比丘尼』へと歩を進め、店の戸に手を掛けて勢い良く開けた

「頼もー!!!」

「… あなたも大概ですよ」

「お、お客さん!?… えへへへ… 今日によく来る…」

店主と思わしき女性が私達の姿を認識するなり顔を綻ばせる

「どうやら相当な経営難に陥っているらしい。そうでなければあんな神を見るような眼はされない。」

「… ちなみにさつき来た人は長身の二人組だったか? 一人は紫色の髪でもう一人は黒いコートを着てる」

「はい、そうです!もしかしてお知り合いですか?」

「ああ、まあ色々。」

「へへえ… あ、この店に寄ったということは何かお探ですか?」

「まあ、私は今私直属の部下をスカウトしようと思っている、連れに聞いたらこの店は面白い人がいる的なことを聞いてな。見に来たってワケだよ。」

「…なるほど、それで私をスカウトしたいってワケですか。」

「いや、そこまで言っていないが…いや、どうだ？私の部下になってみないか？」

「…お客様がどういった仕事をなさっているのか聞かなければ、お答えできませんね。」

確かにそうだ。いきなり私の部下になれって言われてはいなりませんよって言う方が珍しい。ちゃんと身分を証明しよう

「M: C02468。海軍本部中将ルインだ、以後よろしく。」

証明書を店主に見せると「嘘…」と言いながら膝からガツクリとその場に倒れこむ

「!!大丈夫か店主さん!?!」

「あのルイン様!!?ロジャー海賊団最後の大合戦 “紅色の乱” で宝樹アダムで出来たオーロジャクソン号を燃やし、“飛將軍”と互角に戦りあったと言う伝説を持つルイン様!!?一部の新聞では“未来の大将”とまで言われているあのルイン様!!?顔写真が公開されていなかったから気付きませんでした!!私あなたの大ファンなんです!!サイン!サインをくださいお願いします!!」

…え、ええ…

「…ルインさん、この人結構ヤバイ系じゃないですか。」

「…………… そうだな。 だけど薬屋を営んでるってことは一応薬全般作れるわけだ。」

「はい！基本の回復薬やドーピング薬、毒薬、爆薬まで!!何でも取り扱っております!!」

ステータスは申し分ない。戦闘にも補助にも向いている最高のステータスだと思う。しかもこの感じだと私にベタ惚れだから忠義を誓ってくれる事間違いないだ。

「採用。」

「ちよッ！ルインさん!？」

決めた、こんなに優秀な素材を薬屋に放置する事自体がもつたいないのだ。

一人萌え上がっている店主の肩に手を置く。

「私と、来てくれるか(イケボ)」

「は、は…… はひひひひ……」

頭から湯気を発した店主はそのまま気絶した。

「…………… 何を見せ付けられてるんだ、僕……」

もう先の未来が曇りがかって来ていると言う現実には、ペルは頭を抱え込んでいたのだった

『Bブロック』

人々に正しき死を与えること。それが私の仕事。誰にもその存在を知られる事なく行うその仕事は、ストレスがよく溜まる。先日の件で私という存在が公になった手前、無理に活動ができなくなってしまった。

—あの王はそこまでのリスクを負ってでも殺さなければならなかった。知ってはならないことを知ってしまったから。

世間で私は「王殺しの大悪党」と呼ばれている。しかし逆に言えばそれだけ。肝心な所は何も明かされていけないからよしとする。

…だが、私生活に支障を着出した。全ての国に中将クラスの海兵が配置されたのだ。

「…ハア…」

『おいおい！そんなへこむなって!!お前と俺なら中将なんざケチヨンケチヨンだぜ!!』

拙い言葉使いで私を励ます骸骨。そのポジティブさは見習いたいものだ

「…ドレスローザ…確かここにいる中将は「孤独」と「ルイン」。」

『珍しいよなア、あの孤独の狩人が他の中将といっしょにいるなんてよお!』

「……そう。」

—嫌な予感がする

ニコラ side

「ぬおらッ!!!」

わかりやすい剣筋で首を狙う刀を左手で受け止め、刀身を握り潰す。

「わかりやすいんだよ、首なんてのは一撃目から狙うもんじゃねエ、しかも」

オレは剣闘士の体を腹から抱え、持ち上げる

「大振りは大きな隙を生む、実戦では破壊力重視の一撃より手数で攻める方が相手を困惑させられる、じゃあな。」

そう言った後、場外の水上に向けて放り投げた。これで最後の一人を場外に落とした『……!!決まったー!!今コロシム優勝候補【血濡れのアスク】を圧倒し、立った今九人の剣闘士の攻撃を全ていなして傷つけることなく場外へと放り投げ!!見事決勝ブロックへの出場権を手にしたその男の名はア!!!皆さんせーの!!!』

—ニコラ・アデルツ!!!!

先程の静寂とは真逆、決勝進出を祝う歓声がコロシウム中に響き渡る。俺を軽蔑する声の一つも上がらない。つまり完全勝利だ。

『それでは観客の皆様！今から休憩時間を一時間取ります、トイレや喫煙室はコロシウム入場口手前にありますのでこの休憩時間中にご利用ください。後コロシウム限定弁当も販売してるのでそちらの方もぜひとも購入してみてくださいはいかがでしょう！それではまた一時間後、Bブロックにてお会いしましょう!!』

「さ、ニコラさん、こちらへ……」

係りの者に誘導されるまま進む。そうして剣闘士待合室手前についた時、二階の窓の所で観戦していたはずのナックがオレの事を出迎えてくれた

「ニコラ！お疲れ様、あんなに強かったなんて思わなかったよ！俺でも苦勞する相手なのに一瞬で倒しちゃうなんて……」

「……まあな。」

アイツは、心の方に問題があった。海賊を十人程度葬ったってだけで慢心していた。故の勝利だ。人間レベル状態の俺にとっては。

「ふわあ………眠い……ん？」

何かがこつちに向かつて直進してくる

「ニコラ先生く!!」

その何かの正体は先程の試合でオレに負けた剣闘士の集団だった。

「この試合が終われば俺達にもつと戦い方を教えてください!!」

「アンタみてえに強くなりてえ!!」

「先生に言われて気付いたんだよ、勝ちを追い求めすぎて色んな物が疎かになっていた事を」

「今まで独学でやってきたんだが、やっぱり先生が欲しい!!」

面倒くさいことになった。オレただ思った事言っただけなのに。

「…… やって見たらどうだい？俺も君が鍛えた生徒と戦ってみたいし」

「…… まあ、明日以降ならいいか。そんならオレ暇だし。」

「!! 本当ですか先生!! よーしお前ら!! 明日から頑張ろうぜお前ら!!」

うおおおおおおお!!!

「…… めんどくさそうだなニコラ」

「まあな」

本当、鉱石の一つくらい持参して来いって言いたい

「… あ、ナツク、キュロスって誰だ？」

そう、あの荒くれ者の剣闘士たちがキュロスを倒すという所だけは同調していた。だから興味をそそられた。

「ああ、彼は別名“コロシウム無敗の男”。現在2600戦無敗なんだよ。俺も戦ったことがあるけど一度も勝ったことがない。だから今日こそその伝説を打ち破るんだ！俺が!!」

「へえ。無敗、ねえ…」

2600戦か。それらの試合全てを無敗で勝ってきたのならそれこそ大海賊と呼ばれる者レベルの経験が積まれている。言うのは悪いがナツクがどれだけあがいても勝てる相手ではないだろう。まだナツクの戦闘を見ていないから断定は出来んが。

「… さて、俺は今からウォーミングアップしてくるよ。ニコラはどうする？」

「オレは寝る。」

体が壊れている故に、異常なほどに眠い。まあ、いつものことだが。

「そ、そうか。わかった。じゃあ良い夢を。」

「ああ、勝てよ。」

「任せろ!!」

ナツクは上機嫌で待合室のトレーニングルームへと歩いて行った。それを見送った

俺もちょうどいい寝床を探すためにそこらじゅうを歩き回ることにした

—結構歩いた末、寝るのに最適だと判断した場所はトレーニングルームの奥の独房前にあるベンチ。ここなら誰にも快眠を邪魔されないだろうし、第一声を掛けてすらいいな筈だ。

「……おい、お前さっきの試合凄かったな！」

前言撤回。場所を変えようか

「待って!!」

「……何だよ、オレは眠いんだ。」

「あんたならキュロスを倒せるかもしれないねエ。だから頼む!!俺達の方まで「甘ったれたこと言うな……!!」

「うるさいんだよお前ら全員。自分が倒せないと理解した瞬間他人任せか、くだらない。」

「何だと!!!」

牢屋に入っている数人の剣闘士が檻を掴んで叫んだ。

「誰かに倒してもらえるなんて考えるな、それは自分がまがりにも一度は超えたいと思った相手に対する侮辱だ。」

「ぐっ…」

オレの言葉が相当響いたらしく、剣闘士たちは何も言えなくなっていた。…流石に言い過ぎたかな。

「…自分で倒したいって考えるなら手は差し伸べてやってもいい。」

「本当かア?!?!」

「ああ、ロキとルインに掛け合ってみてやるよ。もしかしたらお前等を鍛えてくれるかもしれないエ。」

オレがそう言うのと再びこの暗い独房内の剣闘士たちは歓声を上げる。まだ決まったわけじゃねエのに気が早い奴らだな。

まあルインは愛想良いからOK出しそうだが、ロキは何か言つてきそうだな。

「…ふわあ」

ああ、眠い。さっさと退散していい寝床を見つけることにしよう。

それから少し時間が立ち、Bブロックの試合が始まろうとしていた。

ナツクが教えてくれた場所からコロシウムを一瞥すると中々覇気のある者たちが何

名か確認できた。もしかしなくともオレが戦ったAブロックの奴らよりは遥かに強いだろう。

『さあさあBブロック！全世界から集まった猛者達が集います!!… おっと、最後の一人が入場してきましたア!!』

—最後の一人、そいつの入場に観客達は歓声を上げた。

『最後の一人イ!!当コロシアム所属の剣闘士、何度かキュロスへの挑戦権を得たことのある優勝候補の一人！その名もナツク・ロバーツウ!!』

—おおおおおおお!!

—今日も魅せてくれナツクー!!

…へえ、アイツ意外と人気なのか。一目見たときはそこらの剣闘士と大して変わらないナリをしていたからわからなかったが決勝戦に進出したことがあるのか。

そんなことを思っていると、ナツクがこちらを向いてニカツと笑って見せた。それを見ていた女性客たちは黄色い声を上げる。

「…フツ。」

これは面白い戦いになりそうだな。寝ずに見物するとするか…。